

第1遺構面 第1遺構面が中世の耕作土層上に残されていたことは先に述べた。この層については、調査区の約3/4、北東から西部分の広い範囲にわたって堆積していることを確認しているが、堆積層の上面に遺構が残っていたのは、調査区の東部のみで、西側の大半部分ではまったく遺構は確認されなかった。また、調査区の南東部については、現代の建物の基礎で堆積層のほとんどが失われており、基礎を撤去するとすぐに、縄文後期の堆積層である粗砂層が露呈すると先に述べたが、この部分でも粗砂層上に遺構を確認した。

第1遺構面の遺構として確認したのは、掘立柱建物と思われる規則的な配列の柱穴が11ヶ所。その他、柱痕が残っているものの、掘立柱建物のような、規則性のある配列をなさないピットが21ヶ所。井戸である可能性の高い掘りこみが2ヶ所、楕円径の浅いへこみが1ヶ所である。

掘立柱建物 調査区東部で、掘立柱建物ではないかと思われる規則的な配列の柱穴が確認されている。柱穴は東西に3列、南北に4列の配列で、2間×3間の柱間を持つ。8.0×5.5mほどの規模の建物となると考えられるが、柱と柱の間隔が3.0m近くあり、異様に広いことが確認された。各々の柱穴内部に堆積した土の様子を観察すると、ほぼすべての柱穴で、直径約10cm程度の太さの柱痕が残っているのが確認できた。

通常掘立柱工法で住宅を建てるには、柱間が広すぎると建物の強度に問題が生じ、上屋が自立できないのではないかと考えられている（1.6～8.0m程度が適正值とされ、そのような構造の建物が見つかる例は多い）。このことから考えて、今回見つかった柱穴列については、掘立柱建物であり、地上に残された柱の痕跡以外にも、補助的な柱が存在したが、地面を穿って立てない工法であったため、痕跡が残らなかった、あるいは掘立柱建物ではない何か別の構造物である可能性の両方が残されている。

各柱穴の内部からは、ごく少量の中世のものと考えられる土器が出土しているが、破片が小さすぎて、時期の判定は不可能である。この遺構が造られたのは、中世耕作土上であることから考えて、少なくとも耕作土層の堆積した時期である中世のある時点より新しい。しかし、遺構の直上に堆積していた層が現代の耕作土層であることから正確な時期の限定が困難になっている。掘立柱建物という工法自身が通常中世以前のものであることから、中世の可能性も多く残されているが、もっと新しい近世（江戸時代）～現代の構造物である可能性も残されており、現時点では判断材料が乏しく限定できない。このことは第1遺構面上で見つかったすべての遺構についても同様である。

井戸 掘立柱建物？の南側に2ヶ所並んで井戸状の構造物が見つかる。両者はともにほぼ円形の形をしていると考えられるが、南側のもの（S E 101）については、直径約1.6m、深さ0.8mをはかるものの、西半分が建物の基礎を造る際に壊されてしまっていて、残っていなかった。また北側のもの（S E 102）については、直径約2.0m、深さ1.6mだが、内部に堆積した土の最上層は現代の土だった。これらの遺構の中からは、ごく少量の中世のと思われる土器片と、井戸枠と思われる木材片等が出土したが、井戸枠については腐食が激しく、取り上げると同時に粉化した。この両者の遺構の機能については、構造からほぼ井戸と考えられるが、出土遺物が乏しく時期が判定できない。北側のものについては、先に述べた掘立柱建物と同じ層上に造られていることを確認したが、南側については、

粗砂層の堆積している範囲に残されていたもので、あるいは北側と異なる時期のものである可能性もある。

土坑 調査区の南端では、現代の基礎工事で中世の旧耕作土は失われてしまい、基礎を取り除くとすぐに縄文時代後期の粗砂層があらわれる。この粗砂層上で、長径約0.7m、短径約0.5m、深さは0.2mの楕円形のくぼみを確認した。中に堆積していた土からは、中世のものと思われる大きな甕の破片がまとまって出土した。このことから、中世の遺構と考えられるが、時期の判定は不可能であった。機能については不明である。

ピット 第1遺構面となる中世耕作土層上には、その他建物の柱穴ではない、機能のわからない小さな穴が複数確認されている。このような穴（ピット）は、調査区南東部の基礎で堆積層のほとんどが失われていた範囲の縄文時代後期の粗砂層上にも数カ所確認されている。

これらピット、土坑のような、縄文時代後期の粗砂層上で確認されたものについては、第1遺構面の時期、中世のある時点以降～近代・現代にいたる幅広い時期のものである可能性と、より古い、中世のいつかの可能性とが両方ある。調査区北東部の第1遺構面と同じ中世の旧耕作土上に作造られていたものが、現代の基礎工事で中世の旧耕作土は失われてしまい、遺構の深い部分が地山ともいえる縄文時代後期の粗砂層上に残っているものなのか、もともと縄文時代後期の粗砂層に築かれたものなのかを判別する手がかりがないからである。

第2遺構面 第1遺構面となる中世の耕作土層を取り除くと、地山層が現れることは、基本層序の項で述べたが、この地山層の上にも、第1遺構面よりさらに古い時期の遺構がわずかに残されていることを確認した。確認されたのは調査区の東側でピットが2ヶ所、西南端で溝が2条、ピットが1ヶ所である。どの遺構も規模が小さく、出土遺物は皆無で、機能についても良く分からない。

これらの遺構は、中世の耕作土層を取り除いた地山上で確認されていることから、中世の遺構であると考えられる。

第3遺構面 調査区の南東部については、現代の基礎工事で中世の旧耕作土までは失われてしまい、基礎を除くとすぐに縄文時代後期の粗砂層が現れるが、この粗砂層の上面には、先の項で述べた中世の遺構のほかに、小河川のような痕跡が残されていた。これは、調査区を東西に横切るような流れの痕跡で、幅約4.2m、深さは最深部で0.65m程度である。

内部には最上層に13世紀の土器を多量に出土する層が薄く堆積し、以下にはほとんど遺物の混ざっていない砂層が何層も繰り返して堆積していた。堆積層の状況からみて、ある程度速度の速い流れではないかと考えられる。川底付近から、縄文時代晩期（約2,300年前）の土器片が数点まとまって出土したことから、この流れがその頃のものであることが判明した。最上位の13世紀の土器を多量に出土した堆積層については、この小河川が完全に埋没したあと、河川後の地形のややくぼんだ部分に2次的に堆積したものであると考えられる。

小結 今回の調査では、正確な時期のわからない、中世のある時期の耕作土層の上に、掘立柱建物の可能性が高い柱穴列、井戸を、その下層の地山上に機能不明の溝、ピットを、また

縄文時代後期に地山の層を削って堆積している粗砂層が調査区の南東部に広がっていて、その砂層の上に、縄文時代晩期に流れていた、小河川らしい自然地形の痕跡などを確認した。

今回の調査で、最も大きな問題点として残されたのは、それぞれの遺構がいつの時代のものであるかと言う点である。

本調査区内でおこった出来事を、時間順に追っていくと、第1段階・縄文時代後期、大規模な洪水のような何らかの急な水の氾濫が、起き、その堆積作用によって、地面が削られ、代わりにきめの粗い砂の層の地面が出来上がる。第2段階・縄文時代晩期（約2,300年前）、ふたたび急激な水の流れが起こる（鉄砲水?）。しかし今回は以前のような大規模なものではなく、水は地面のごく一部を削って押し流しただけで済んだ。この流れは一瞬の出来事であったか、あるいはある程度の期間継続していたものかはわからないが、縄文時代晩期のうちに水の流れは終了し、小さな川のように見えていたものはすっかり水が運んできた砂で埋まってしまった。第3段階・13世紀にはこの付近は多くの人々が住んでいたらしく、多くの土器が残されているが、当時の人が残したものが、遺物包含層となって堆積する。縄文時代の川があった場所にも同じように堆積したが、もとは川が流れていたため、そこだけはまわりより少し地面がへこんでいて、堆積が厚くなっていた。北側の地山のうえにわずかな遺構を残したのも、この頃の人たちではないかと考えられる。第4段階・13世紀以降、まだ中世のうちに一帯は田が造られて、13世紀の住人が残した遺物包含層も削られて、田の土に置きかえられてしまう。やや地面がへこんで厚く包含層の堆積していた川の痕だけに、包含層が残される。第5段階・中世なのか江戸時代なのかは不明だが、かつては田であったこの場所に、掘立柱建物が建てられる。第6段階・建物がなくなったあとは現代まで、ふたたびこの場所は田として使われていたが、宅地化が進み現在のような景観になる。

上記のような時間の流れが考えられるが、今回検出した第3遺構面は第2段階・縄文時代晩期であり、第2遺構面に関しては、第3段階・13世紀頃の遺構、第1遺構面については第5段階・時期不明となると考えている。遺物包含層と第1遺構面の造られた耕作土相互の時間的前後関係については、調査区全体が大きく建物の基礎で穿たれていて、連続する層として観察できなかったが、部分的に包含層が残されていた状況証拠から、今回の仮定では包含層が先に堆積して、包含層を削って置かれた旧耕作土はそれ以降の中世とした。耕作土から出土した土器は大半が中世のもので、一部古墳時代のものが混じっていた。中世の土器については、時期を判定するに足るだけのものは見つからなかった。

13世紀の遺構については、密度が低く、機能もよくわからないものである。包含層から非常に良好な状態の遺物を多量に出土したことから見て、近接地域に良好な集落遺跡が存在するものの、本調査地についてはすでに集落の辺縁部にあたると考えられる。今回確認された遺構は東に集中していること、過去の既済の調査結果から見て、集落本体は当調査区の南東に位置し、この場所はムラの西北端部であると考えられる。

16. 戎町遺跡 第34次調査

1. はじめに 戎町遺跡は妙法寺川によって形成された扇状地と沖積地に占地し、その左岸の扇状地末端部に位置する縄文時代から中世にかけての遺跡である。当遺跡は現地表面の標高約13～14mの高さに立地している。

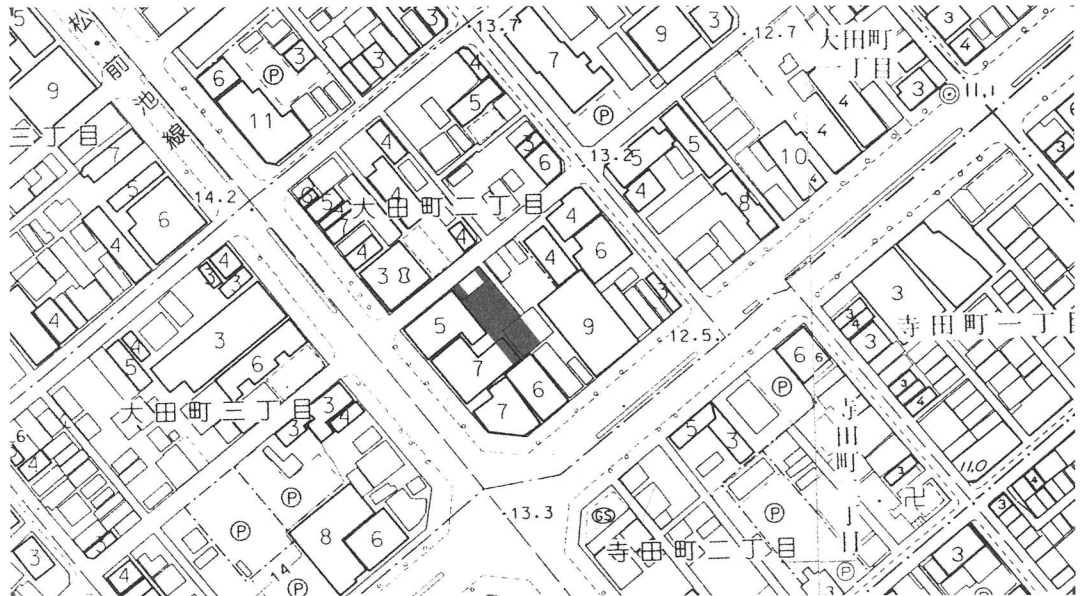


fig.79
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 今回の調査は社屋建設に伴う調査で、建物基礎を打設する部分8ヶ所について現地表面下1.6mまで文化財に影響を及ぼすことからその部分について調査を実施した。調査区は南西から北に向かって順に1区～8区と呼称する。

基本層序 層序は、盛土、耕土、旧耕土、遺物包含層である黒灰色砂質シルト、第1遺構面のベースである淡灰黒色シルト質細砂、第2遺構面の遺物包含層である黒灰色シルト質細砂、そして第2遺構面である淡灰茶色細砂の順となる。

1区 第1遺構面では北西側に向かって落ちていく遺構(SX101)を検出しているが、調査区が狭小であるため遺構の規模・性格については判らない。第2遺構面で土坑(SK201)1基を検出した。深さ約0.2mで、土坑内から弥生土器片が出土している。

3区 第1遺構面において溝状遺構2基、土坑1基を検出している。SD101は最深部が約0.2mを測り、弥生時代中期頃の遺物が比較的まとまって出土している。SD102は深さ約0.2mで、SD101とほぼ同時期と考えられる遺物が出土している。SK101は直径1.2m、深さ約0.3mを測る土坑であるが、出土遺物はない。

4区 第1遺構面において溝状遺構1条、土坑1基、不明遺構1基を検出した。SD103は、6区で検出されたSD104の続きと考えられ幅0.4m、深さ約0.1mを測る。弥生時代後期頃の遺物が出土している。土坑(SK102)は深さ約0.1mを測る。

S B 201 第2遺構面は、竪穴住居(SB201)1棟、土坑2基、溝状遺構、ピット多数を検出した。規模ははっきりしないが、推定規模直径約7.6mの円形の竪穴住居である。検出面からの深さは約0.1mである。柱穴は1本確認されており、深さは約0.4mである。弥生時代中期の土器が出土している。

その他遺構 SK202は長さ1.5m、検出幅0.65m、深さ約0.2mである。直径0.2～0.4mのピットを多く検出しているが、散在しているためまとまらない。一部のピットからは弥生土器が出土している。

5区 第1遺構面において溝状遺構1基、土坑2基を検出した。SD104は南北方向の溝で、検出長約0.9m、深さ約0.15mである。SK103は幅約1.0m、深さ約0.2mを測る土坑である。SK104は規模については判らないが、深さ約0.25mを測る。第1遺構面から下層については砂～細砂の堆積が確認され、流路が存在していると考えられる。

7区 第1遺構面において土坑2基、不明遺構1基を検出した。SK105は最大幅0.65m以上、深さ約0.2m、SK106は幅0.9m、深さ約0.2mを測る土坑である。いずれも弥生時代後期頃の遺物が出土している。SX103は規模については判らないが、深さ約0.3mを測る。

6区と同様、下層については砂～細砂の堆積が確認され、遺構等は確認されなかった。

3. まとめ

今回の調査は調査区が狭小で、この調査範囲内で遺構のつながりを把握するのは困難であった。遺構面は2面確認されたが、今回の調査における深度が現地表面より1.6mと制限されていたため、下層の遺構については確認できなかった。

調査面積が少なかったにもかかわらず、遺物は主に弥生時代中期～後期にかけての土器が多く出土している。土器の磨滅もほとんどなく、使用後廃棄されたものと思われる。出土遺物から、第1遺構面は弥生時代後期、第2遺構面は弥生時代中期と推定される。

今回第2遺構面で竪穴住居1棟を確認したが、周囲の調査が進むとさらに竪穴住居の数が増えると思われ、戎町遺跡南東部の集落域の全体像が明らかになってくると考えられる。

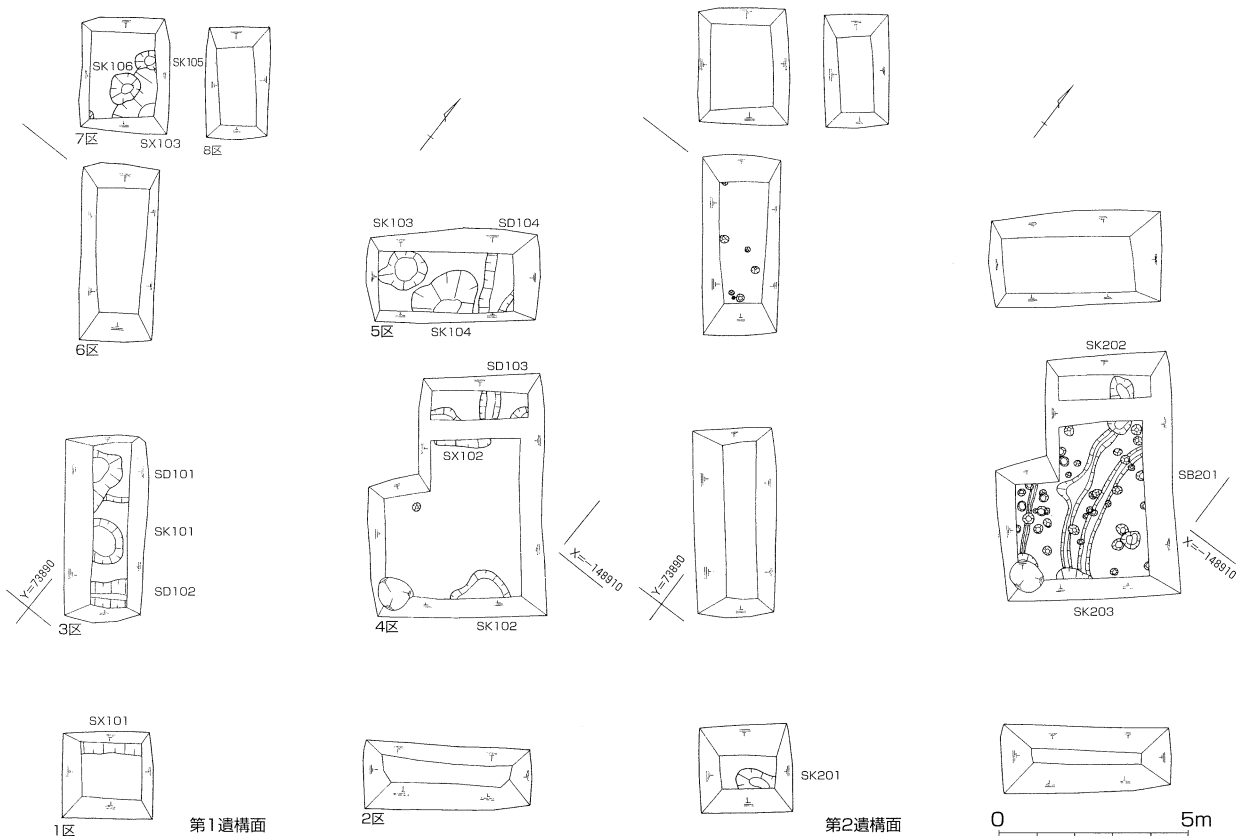


fig.80 遺構平面図

17. 戎町遺跡 第35次調査

1. はじめに

戎町遺跡は須磨区の東端部、妙法寺川左岸の沖積微高地上に位置する縄文時代～中世の複合遺跡である。過去の数次にわたる調査においては、数多くの遺構、遺物が確認されており、特に弥生時代においては、大集落を形成していたことが明らかになっている。今回の調査（第35次）では、弥生時代中期～古墳時代後期の遺構、弥生時代前期～中世の遺物が確認された。



fig.81
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 区画街路の拡幅部分、幅約2.5m、長さ約22mの調査区を設定して調査を実施し、弥生時代第35-1次調査の遺構面を2面検出した。

基本層序 調査区の基本層序は、攪乱・旧耕土を除去すると黒褐色シルト層、暗褐色シルト層、灰褐色細砂層となる。このうち黒褐色シルト層と暗褐色シルト層が遺物包含層であり、暗褐色シルト層上面と灰褐色細砂層上面で遺構を検出した。遺物包含層までの深さは、現地表下0.6～0.7mである。

第1遺構面 暗褐色シルト層上面で検出した遺構面でピット約40基、溝2条、土坑1基を検出した。

溝 いずれも一部を検出したのみであるが、北側のSD01は幅0.9m、深さ0.4mの断面V字形である。南側のSD02は不定形で深さ0.3mのものである。SD02の底から弥生時代第IV様式の壺が一個体出土している。

ピット いずれも直径0.2～0.4m、深さ0.1～0.25mを測るが、建物としてはまとまらない。

土坑 全体の規模は不明であるが、直径0.9m以上、深さ0.4mのものである。

遺構の時期 遺物包含層及び遺構の埋土より弥生時代第Ⅳ様式の土器が出土しており、遺構が形成された時期は弥生時代中期後葉頃と考えられる。

第2遺構面 第1遺構面のベースである暗褐色シルト層は土器を含んでおり、この層を除去したところ灰褐色細砂層上面で第2遺構面を検出した。検出した遺構は、ピット20基、溝1条である。なお、南半部については礫層と粗砂層の堆積であり、安定した面は存在していない。

ピット いずれも直径0.2~0.3m、深さ0.25~0.3mのもので、建物としてまとまるものはなかった。

溝 一部を検出したのみであるが、幅約4.0m、深さ0.6mの規模である。第1遺構面で検出したSD01と同じ場所に位置し、第1遺構面のSD01は、この溝が埋没する過程で存在していたものと考えられる。

遺構の時期 遺物包含層及び遺構の埋土より弥生時代第Ⅲ様式の土器が出土しており、遺構が形成された時期は弥生時代中期中葉頃と考えられる。

小結 調査区の南半部については第2遺構面に該当する安定下生活面は存在せず、また第1遺構面でも遺物包含層である黒褐色シルト層の堆積が薄くなり、南端では認められなくなる。遺構もまばらで、おそらく戎町遺跡の南端部に当たっているものと考えられる。なお、第2遺構面より下層については遺構面になりうる層や遺物は検出しなかった。

第35-2次調査 第35-1次調査地東側の区画街路設置箇所において調査を実施した。この調査地でも2面の遺構面が確認された。

基本層序 箇所によっては若干層位が異なるが、概ね上層より現代盛土、2~4層の旧耕土層、黒褐色粘砂土（遺物包含層）、濃褐灰色粘砂土（遺物包含層）の順で、黒褐色粘砂土の下層上面が第1遺構面、濃褐灰色粘砂土の下層上面が第2遺構面となる。第2遺構面のベース層からは僅かに土器の小片が出土するものの、下層については遺構面になりうる層位は確認されなかった。遺構面までの深さは、第1遺構面がGL-0.5~0.8m、第2遺構面がGL-0.7~0.9mを測る。

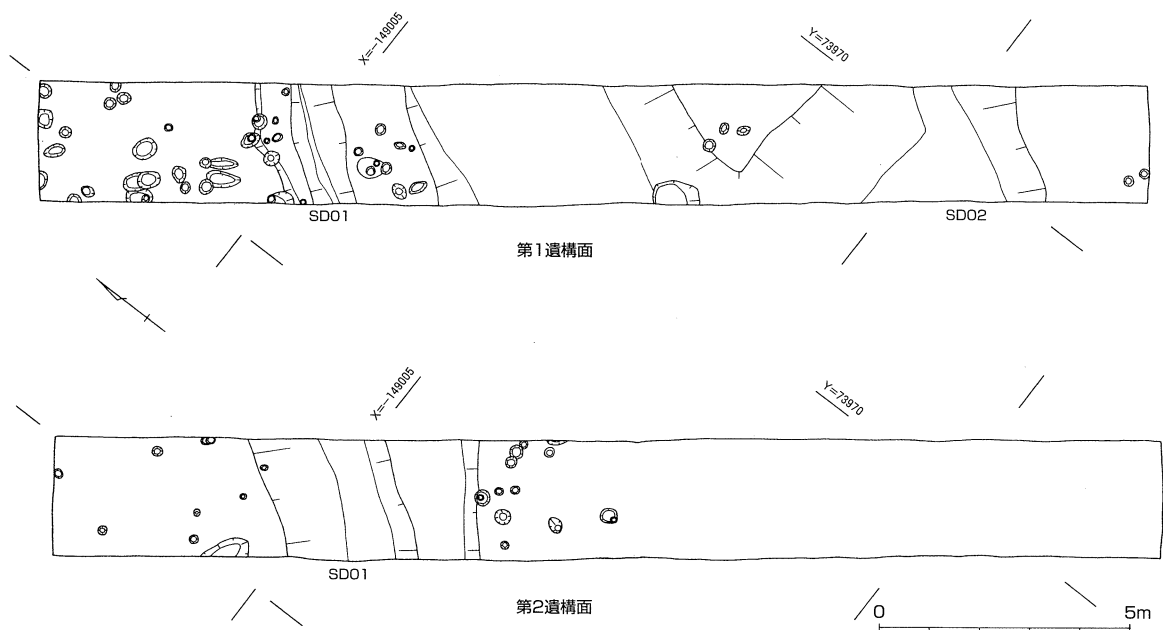


fig.82 第35-1次遺構平面図

第1遺構面 土坑、溝、ピット、落ち込みなどの遺構が検出された。直径約1.0m、深さ約0.45mを測る土坑（SK02）、幅約1.2～1.7m、深さ約0.3mを測る中規模レベルの溝（SD01・02）、調査区北端で検出されたL字に屈曲する溝状の落ち込み（SX01）以外は比較的小規模なものが多い。遺構内からの遺物はSX01からのものが多く、その他、SD02、SX02、SX03などから比較的多く出土しているが、他の遺構については少量である。SX01からの遺物概ね弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式新段階）に属するものと考えられ、SD02、SX02、SX03のものは、弥生時代中期中葉～後半（畿内第Ⅲ様式末～第Ⅳ様式前半）に属する可能性が高い。また、時期比定の困難な遺構についても、遺物包含層等の出土遺物から判断すると、概ね弥生時代中期中葉～後半に属するものと推測される。

第2遺構面 土坑、溝、ピット、落ち込み、流路などの遺構が検出された。調査地の北半部で検出された幅約3m、深さ約0.65mを測る大規模な溝（SD22）、南端部の流路状落ち込み（SR21）以外はいずれも小規模なものである。SD22、SR21で弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式古段階）に属すると考えられる遺物が比較的多く出土しているが、それ以外の遺構からの出土遺物は少なく、時期比定は困難ではあるが、遺物包含層等の出土遺物から判断すると、概ね弥生時代中期前半～中葉に属するものと推測される。出土遺物は土器類の他に、サヌカイト片なども多く含まれる。

小結 今回の調査の遺構分布の特色として、北半部に比較的多くみられるという点が挙げられるが、このことは戎町遺跡の中核部が北方に位置することを意味するものと推測されるが、南半部においても遺物包含層からの出土遺物も多く、遺跡の拡がりやさらに南方あるいは東方に続くものと考えられる。遺構そのものは小規模なものが多いが、集落遺跡の一部として捉えられるものと考えられ、その成果は重要である。

第35-5次調査 調査区の制約により、全容は明らかではないが、幅3.0m、深さ0.8m程度の溝と考えられ、北東から南西方向に流下する。下層は粘質の堆積層であるが、上層は均質な砂層の堆積が見られ、洪水等により一時に埋没したと考えられる。溝底付近で、弥生時代中期中葉のまとまった遺物の堆積が見られた。

SD101

小結 他の調査区の溝とは、明らかに性格の違う流路が検出された。しかし、近接する墓域との関連及び性格は、周囲の調査の進展を待たねばならない。

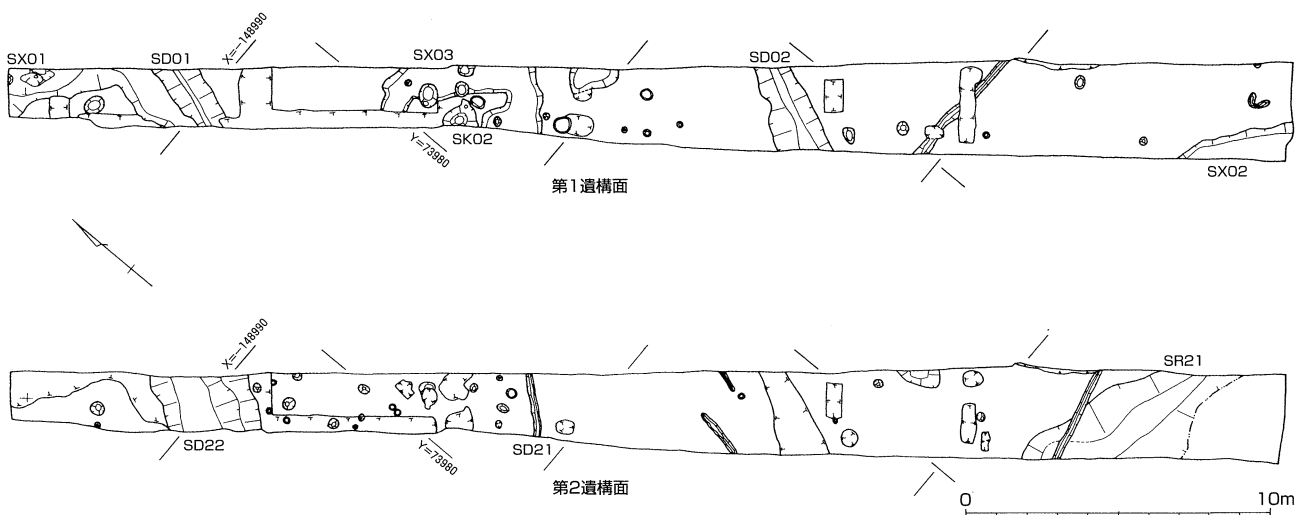


fig.83 第35-2次遺構平面図

第35-8次調査 第35-1次調査地の北端付近と第35-2次調査地の北端付近をつなぐ区画街路設置箇所において調査を実施した。この調査地でも周辺調査地と同様に2面の遺構面が確認された。

基本層序 上層より現代盛土、2層の旧耕土層、暗褐灰色砂質土（遺物包含層）、淡灰茶色砂質シルト（第1遺構面ベース層）、濃茶灰色砂質シルト（遺物包含層）の順で、淡灰茶色砂質シルト上面が第1遺構面、濃茶灰色砂質シルトの下層上面が第2遺構面となる。第2遺構面のベース以下層については遺構面になりうる層位、遺物を包含する層位は確認されなかった。遺構面までの深さは、第1遺構面がGL-0.2~0.5m、第2遺構面がGL-0.5~0.8mを測る。また、調査区の北側壁面のほぼ中央部に、層位が褶曲する部分を有するが、盛土以下、遺構面に至るまで同じ状況を呈するため、おそらく阪神淡路大震災による地殻変動の影響と考えられる。

第1遺構面 竪穴住居、土坑、溝、ピット、落ち込みなどの遺構が検出されており、特に西半部に集中している。竪穴住居S B101は、全体の1/4程度しか確認できなかったため、規模等の

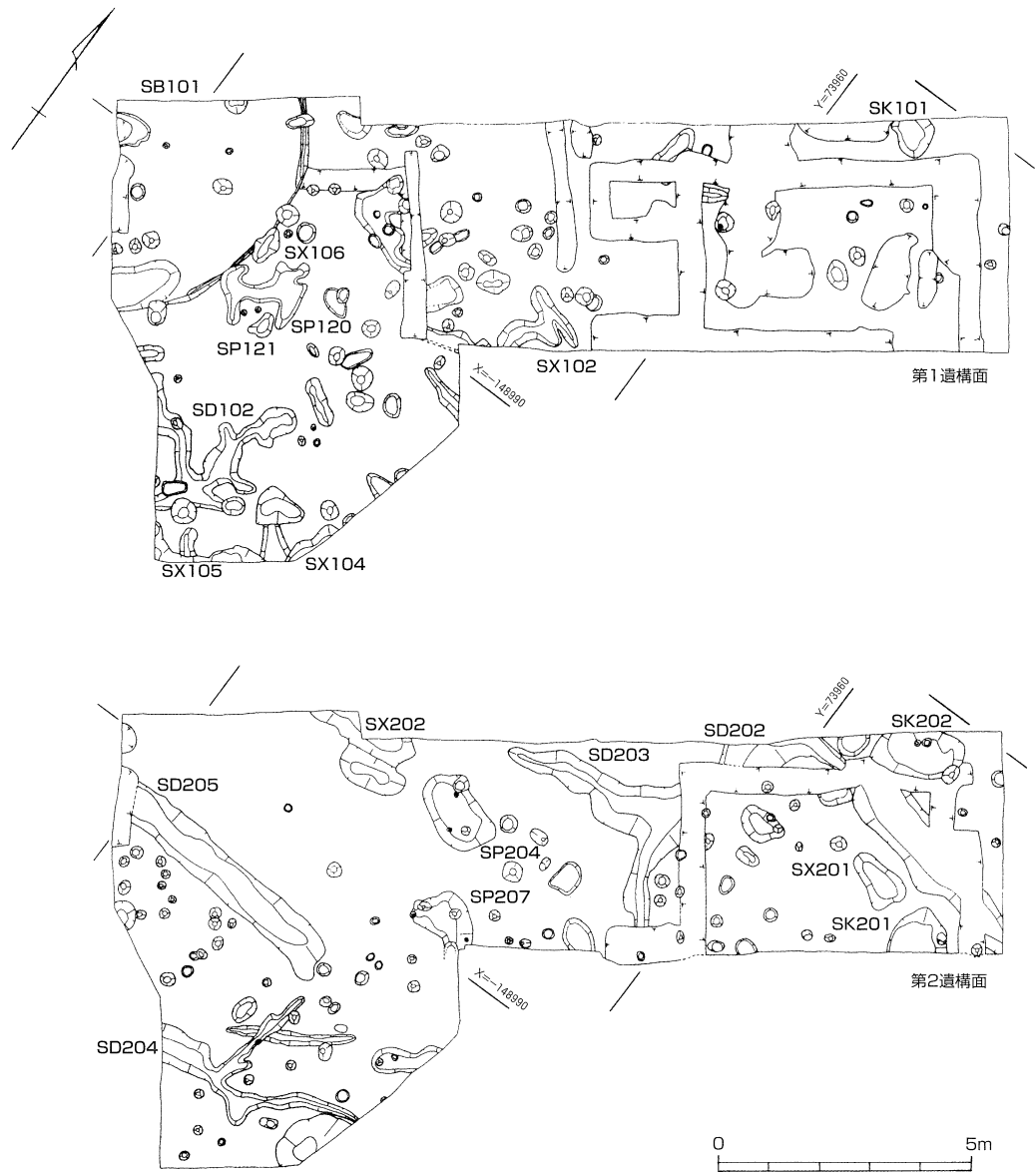


fig.84 第35-8次遺構平面図

詳細は不明である。その他、小規模など土坑（S K101）や不整形な落ち込み状遺構（S X101～106等）、溝状遺構も検出されている。遺物はS B101、S X106などの遺構内や遺構面を覆う遺物包含層中より比較的多く出土しており、その大半は土器類であるが、サヌカイトの剥片なども含まれる。遺構の時期は、S B101は若干古い時期のものも混在するが、概ね弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式前半）に属するものと考えられる。その他、同時期ものと推測されるものは、S X102・106、S P121などで、また、S X101、S D103、S P115などは、弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式新段階）、S X102～105、S D102、S P120などは、弥生時代中期中葉～弥生時代中期後半（畿内第Ⅲ様式末～畿内第Ⅳ様式初頭）にほぼ属するものと推測される。それ以外の遺構については、遺物包含層出土遺物の状況から、弥生時代中期中葉～弥生時代中期後半（畿内第Ⅲ様式新段階～畿内第Ⅳ様式前半）の範囲内に属するものと考えられる。

第2遺構面 土坑（S K201～203等）、溝（S D201～205等）、ピット、落ち込みなどの遺構が検出された。土坑はいずれも直径約1.2～1.6mの平面規模が中レベルのものであるが、S K203は深さが約0.45mを測り、他のものに比べてかなり深い。溝はS D201～204が幅約0.3～0.9m、深さ約0.1～0.15m程度であるが、S D205は幅が約0.8mであるが、深さが約0.5mを測り、断面形も逆台形状を呈する。その他ピット、落ち込みなどについては、規模の大きいものが存在しない。時期の判明する遺物が出土した遺構は、S K201～203、S D201～205、S P203・204、S X202などで、若干古い時期のものも含まれるが、いずれも弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式古段階）に属するものと推測される。遺構面を覆う遺物包含層からの出土遺物は多いが、遺構内からのものは第1遺構面に比べると少ないものの、S D202・205などからはまとめて出土している。出土遺物がほとんどなく、その時期比定が難しい遺構については、遺物包含層出土遺物の状況から、弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式古段階）か、それより若干古い時期に該当するものと考えられる。遺物の大半は土器類であるが、サヌカイトや結晶片岩の剥片なども多くみられる。また、第1遺構面ベース層からは扁平片刃石斧、S D205からは磨製石斧、S D202からは切目石錘、濃茶灰色砂質シルト（下層遺物包含層）とS K203からはサヌカイト製の石鏃なども出土した。

小結 今回の調査地は他の調査地に比べて検出遺構、出土遺物も多く、遺跡の中核部があるいはその縁辺部にあたる箇所と判断できる。その中で特筆すべき点として、第2遺構面で検出された数条の溝が挙げられる。これらは平行あるいは直行するようなかたちで存在し、S D202・205からは投棄されたかのように土器片がまとめて出土している。また、時期的にもほぼ同時期と考えられ、S X202も含めて、方形周溝墓の周溝部分の残欠である可能性を消極的ながら示唆しておきたい。

3. まとめ

寺田町1・2丁目付近における遺跡の広がりが概ね確認できた。

弥生時代中期においては、第35-8次調査区から第35-9次調査区西端部を中心として生活域が広がり、第35-4次調査区周辺に墓域が広がる。戎町遺跡南端部の当時期の土地利用を考える上で良好な資料を得たと言える。

古墳時代後期の堅穴住居の存在は、同時期の松野遺跡との関連を強く示唆するものである。

18. 行幸町遺跡 第2次調査

1. はじめに 神戸の市街地の背山である六甲山地は、東から西へ次第に標高を下げて鉢伏山で急崖になり明石海峡につながる。行幸町遺跡は、この六甲山地と大阪湾に挟まれた狭隘な平野部の西端近くに位置し、千森川によって形成された扇状地上に立地する。現地表の標高は、16m前後である。この地域は摂津と播磨の国境にも近く、古代より交通の要所として知られている。調査地の北側には近世の西国街道が東西に通る、古代の山陽道もほぼ同じルートを通っていたと推定されている。

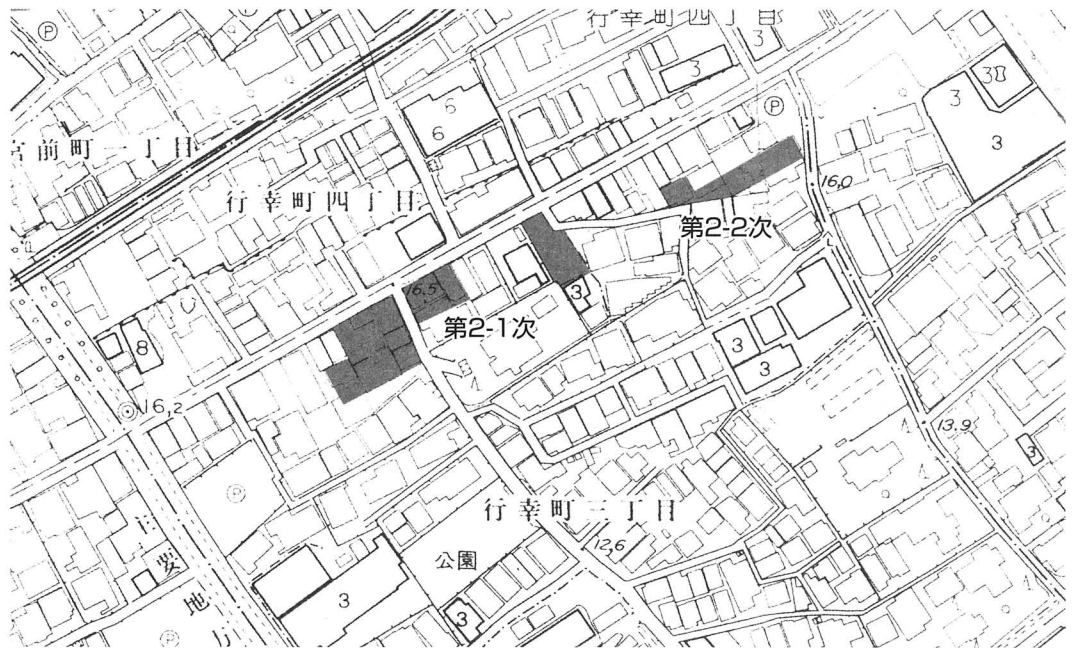


fig.85
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 今回の調査地は、第1次調査地の周辺に位置する。第1次調査では飛鳥時代に掘削されたと考えられる「大溝」や、奈良時代以前の掘立柱建物などが確認されている。

第2-1次調査 この度、中央幹線街路築造工事に伴い埋設管を敷設する歩道設置部分について調査を実施することとなった。西端部分で「大溝」の一部と思われる遺構を検出したが、その遺構の規模と方向を確認するため、北側に拡張を行った。

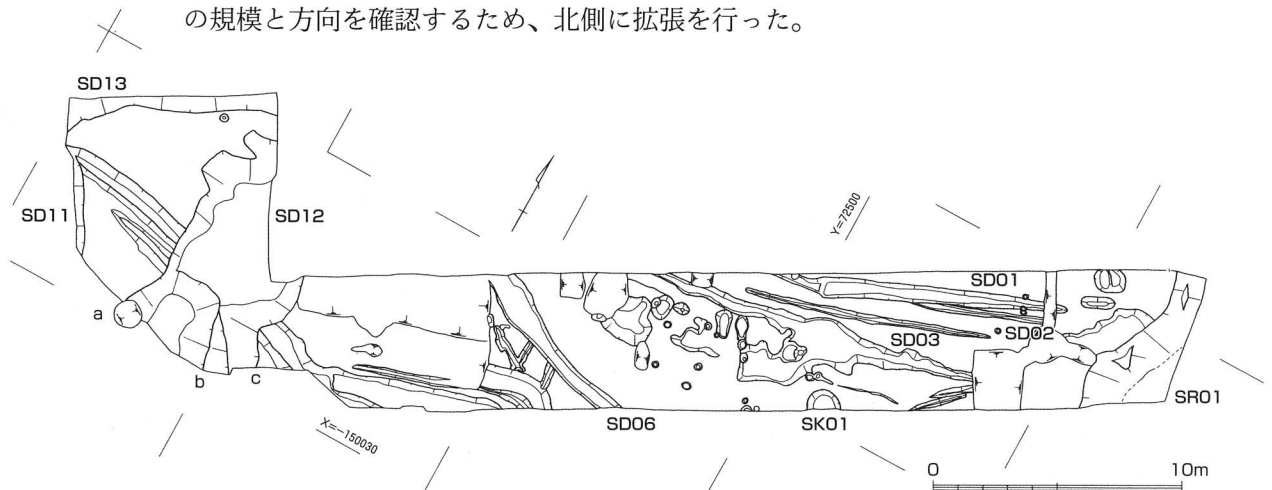


fig.86 第2-1次遺構平面図

基本層序 基本層序は、盛土、灰色砂質土、灰黄色砂質土、灰茶色砂質土、茶灰色砂質土、茶灰色砂質土（遺物包含層）、遺構基盤層である。現況は旧宅地造成に伴う段差が存在しており、遺物包含層および遺構面は部分的に削平を受けている。遺構面のレベルは15.4～15.8mを測り、中央部から西側にむけて徐々に下がっていく。遺物包含層は、概して西側が良好に残存しており、奈良時代の土器も含む。遺構は溝、ピット、土坑を検出した。

溝

遺構名	幅	深さ	遺物	備考
S D01	0.7m	0.15m	土師器・須恵器	埋土：暗灰褐色砂質土
S D02	0.3m	0.06m	土師器・須恵器	
S D03	0.3m	0.1m	土師器・須恵器	
S D06	0.6m	0.25m	土師器・須恵器	

S D08 調査区西端および拡張部で検出した落ち込み状の溝である。後述のS D12上層を切り込んでいる。遺物は、須恵器・土師器・青磁・陶器すり鉢などが出土しており、中世のものと思われる。

S D11 拡張部西辺で検出した溝である。第1-2次調査で検出している「大溝」の北側につながる溝の東肩と思われる。埋土は黒色粘土である。

S D12 調査区南西隅で検出した北から南方向の溝である。上層部は中世の溝S D08と近世以降の溝に切られる。幅約6.0mで、検出面からの深さは約1.3mを測るが、南側は調査区外のため掘削できず、湧水も認められたため最深部までは到達していない。埋土は上層が褐色砂、下層が黒色粘土である。下層は植物遺体も含む粘土層であることから、流水がほとんどなく淀んでいた時期があったと考えられる。上層は砂がラミナ状に堆積しており、洪水によって一気に埋没してしまったのであろう。

遺物は、須恵器・土師器が出土している。特に最下層からは須恵器甕と馬歯が隣接して

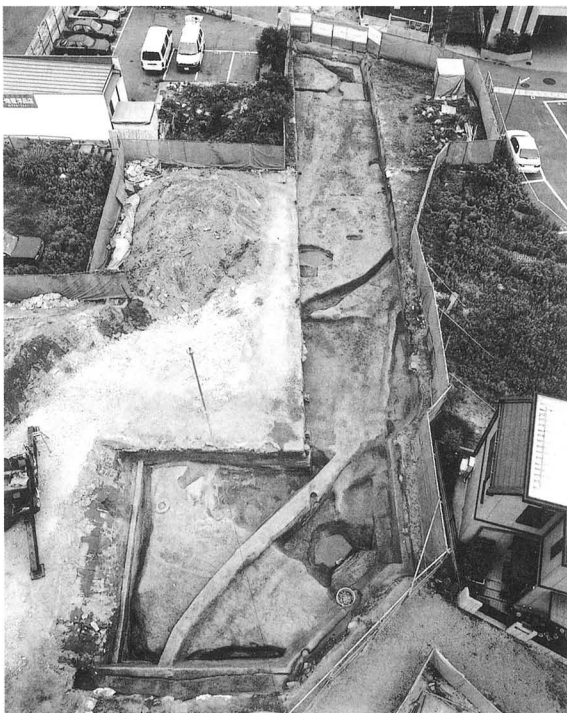
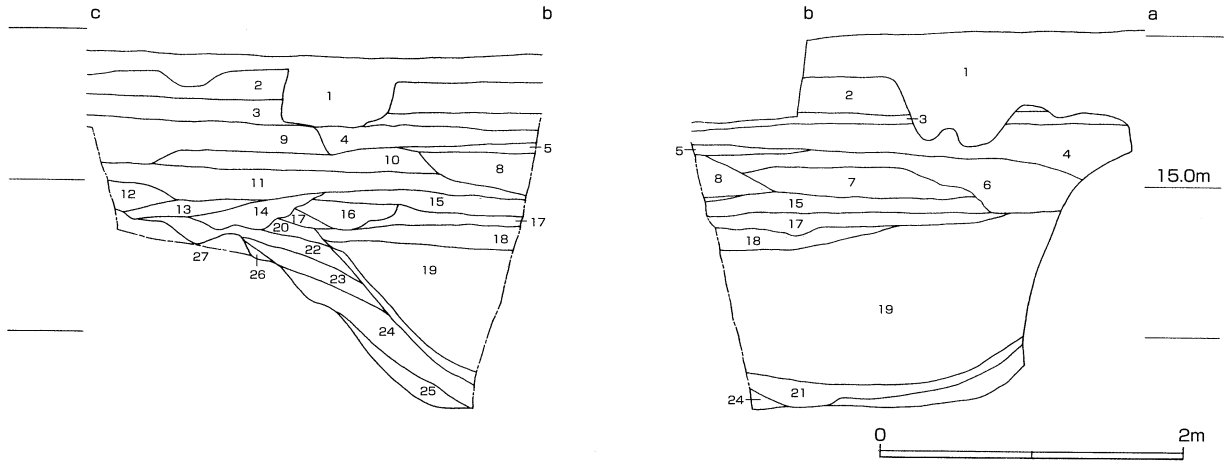


fig.87 第2-1次全景



fig.88 S D12



1. 盛土・攪乱 2. 灰色砂質土 3. 淡黄褐色砂質土 4. 淡茶灰色砂質土 5. 淡灰褐色砂 6. 淡茶褐色砂質土 7. 青灰色砂質土
 8. 褐灰色粗砂質土 9. 暗灰色砂質土 10. 褐灰色砂質土 11. 褐灰色粘性粗砂質土 12. 淡褐灰色粗砂 13. 灰褐色粗砂
 14. 淡褐色砂暗褐灰色シルト質細砂混じり 15. 暗灰褐色砂質土 16. 淡褐灰色砂 17. 暗茶褐色粘性砂質土 18. 淡褐色砂
 19. 白褐色～黄褐色粗砂～細砂（ラミナ状堆積） 20. 暗褐灰色粘性砂質土 21. 黒色粘土（植物遺体含む） 22. 黒灰色粘性砂質土
 23. 淡黒灰色粘質土 24. 黒灰色粘性砂質土 25. 暗灰色粘性粗砂質土 26. 淡灰色砂 27. 白褐色粗砂

fig.89 SD12断面図

出土した。馬歯は長さ30cm程を検出しており、顎骨と思われる部分も残存する。また周辺からは種子も出土している。

SD13 拡張部北辺で検出した溝で、南肩部分のみを検出した。埋土は東側が褐色極細砂～粗砂の互層で、西側は黒灰色砂質土が堆積する。西端でSD11に接続している。黒灰色砂質土から須恵器・土師器が出土している。

SK01 調査区東半の南壁部分で検出した土坑で、直径1.5m、深さ0.5mである。埋土は上層が明黄褐色砂、下層が灰褐色砂～細砂、最下層が褐灰色砂である。遺物は出土していない。

SX01 東端で検出した南北方向の流路で、茶灰色砂質土上面から切り込む。西肩部分を検出した(SR01)ただけで、最深部までは掘削できていない。埋土上層は暗褐色砂質土と青灰色砂質土が堆積し、中層は褐色粗砂～細砂、下層は砂がラミナ状堆積を呈する。堆積状況は自然的なもので、洪水で一気に堆積したものと思われる。須恵器・土師器が出土しており、鎌倉時代以降と思われる。

その他 その他、ピットは何基か検出できたがごくわずかであり、建物としてのまとまりを確認するには至らなかった。

第2-2次調査 第2-2次調査では、4ヶ所（A・B・C・D区）に別れた地区の調査を行った。A区は、第1-1次の北西側、B区は第1-1次・第1-2次の間に、C・D区は第1-1次の西側に位置する。

A区 地表高は16m前後である。

基本層序 A区の基本層序は以下の通りである。①瓦礫・コンクリート・黄褐色土（表土・整地土）②黒色粘性砂質土（近代の耕作土）③暗灰色粘性砂質土（近世～近代の耕作土）④灰黄色砂質土（近世頃の耕作土）⑤黄灰褐色～暗灰色砂質土（時代不明の耕作土）⑥褐色系中砂～粗砂（洪水砂）⑦黄灰褐色砂質シルト～粗砂（遺構検出面）現況地表面から遺構検出面までは、約0.9～1.2mあり、北西～南東方向に緩やかに下がっている。

- 遺構** 南半部に溝1条と北半部に犂溝が10条程度発見された。
- 溝** 検出長約12m、幅2.0～3.0m、深さ0.8～1.0mの溝で、南東～北西方向に流れたと考えられる。この溝は第1～1次調査で確認されている溝と接続し、さらに調査区の西側に延びていることが判明した。溝の掘形は逆台形で、一部小段状を呈している部分もある。堆積土はおおまかに4層に分かれる。1・2層は褐色系の砂質シルトで、遺物はほとんど含まない。3層は黒褐色砂質シルトで奈良時代の土器、板状に加工された木片、木の枝などが集中して出土するところが中央部～西半部にかけて発見された。4層は黒褐色砂質シルトと黄灰褐色中砂～粗砂がラミナ状に堆積する。出土遺物は少量ではあるが、飛鳥～奈良時代の須恵器、土師器と板状に加工された木片（曲物の底部分か?）、木の枝等であり、第1次調査と同時期のものが出土している。溝と同時期の遺構は確認されず、この溝の掘られた理由を明らかにすることはできなかった。
- 犂溝** 調査地北半部に犂溝が確認された。おおむね東西方向に延びるものが多く、1.0m未満の短い溝については南北方向に走るものもある。検出長は0.5～6.0m、幅は0.2～0.25m、深さは数cm程度のものである。黄灰褐色～暗灰色砂質土が埋土となっている場合が多い。犂溝の時期は、耕作土の出土遺物から近世を大きく遡らないものと推定される。
- B区** 現地表面高は16m前後である。
- 基本層序** B区の遺構検出面までの深さは、北端では現地表面から約1.0m、南端では1.9m前後と北西～南東へかなり傾斜する地形を呈している。基本層序の大略は以下の通りである。
 ①瓦礫・コンクリート・黄褐色土（表土・整地土）②黒色砂質土（近世～近代の耕作土）
 ③黄褐色砂質土（近世の耕作土）④茶褐色砂質土（中世末～近世初め頃の耕作土）⑤褐色砂質土（中世頃の土壌化した層）⑥茶褐色～暗灰色砂質土（溝埋没後の窪んだ部分を埋める土、中世の土器を含む）⑦灰褐色細砂～中砂（遺構検出面）
- 遺構** 南端部に溝1条と中央～北端部に犂溝、ピットが発見された。
- 溝** 検出長約12m、検出最大幅2.5m、深さ1.3～1.8mの溝で、北西～南東方向に流れたと考えられる。溝の南側の肩部は調査範囲外に出てしまい、底から南にわずかに立ち上がる部分までしか確認できなかった。
- 溝の掘形は調査できた範囲内では逆台形で、小段状を呈している部分が確認される。堆積土はおおまかに5層に分かれる。1層は褐色砂質シルトで、遺物はほとんど含まない。2層は黒灰色砂質シルト、3層は黒色シルト、4層は細砂混じり黒色シルトで奈良時代の土器、板材の破片、木の枝等が少量出土する。5層は黒色シルト混じり青灰色細砂～粗砂がラミナ状に堆積する。この層では湧水量が多く掘削に難渋した。溝西端の底付近から飛鳥時代の須恵器破片が発見された。溝の東半分では、肩の部分が広がっており、遺構検出面より約0.5mの深さで抉れている。上層には1層（褐色砂質シルト）が、下層には青灰色砂礫層が堆積し、この砂礫層が溝本体にも多く流れ込んだ状態で確認されている。これは溝開削後に、洪水等で溢水した時に生じたものと考えられる。また、東端で発見された落ち込みも同様のものであろう。
- ピット** 調査区中央で5ヶ所、北端で3ヶ所発見された。中央付近で検出されたものは、直径0.5～0.7mの円形または楕円形で、深さ約0.2m程度、暗褐色粘質土を埋土とする。北端の

ものは、0.2m前後の円形で、深さ約0.2m程度、灰色粘質土を埋土とする。

ピットの埋土からは土器の小片が出土するものもあるが、時期の確定は困難であった。

噴砂の痕跡 調査区北端付近で、幅1cm、長さ0.3~1.4mの細砂が詰まった地割れ（方向は座標北から約9°と47°西）が確認された。壁面にかかった部分を断ち割りして観察すると、遺構検出面である黄灰褐色細砂~中砂の下層にある黄灰色細砂層から吸い上げられた状態で、茶褐色砂質土（中世末~近世初め頃の土器を含む耕作土）の上面まで到達していたことが判明した。これは激しい地震動に伴う液状化現象の結果、生じたものと推定される。

小結

B区では、溝とピットが確認できた。ここまでの調査で、溝はほぼ直線に延びていることが判明した。出土遺物からみた年代もおおよそ飛鳥~奈良時代であり、これまでの結果を追認するものである。また、激しい地震動に伴う液状化現象の痕跡（噴砂現象）が確認された。これは地割れの上端が中世末~近世初め頃の土器を含む耕作土で止まっていることから、有馬・高槻構造線の活断層変位に伴う、慶長伏見地震（1596）によるものと推定される。調査地点から約800m北西に位置する、須磨寺に伝わる古文書「當山歴代」によると、この地震によって堂舎が倒壊、圧死者多数という記述があり、それを裏付ける資料となるであろう。

C区

現地表高は15.2m（北端部）~16.2m（南端部）である。

基本層序

C区は、北端と南端で約1.0mの比高差を有する。調査区の北10mあたりで約0.3mの段差があり、中世頃の耕作地造成によって削られたものと思われる。

基本層序の大略は以下の通りである。①瓦礫・コンクリート・黒灰色腐植土（表土・整地土）、②灰褐色粘性砂質土（近世~近代の耕作土）、③茶褐色~灰褐色砂質土（近世の耕作土）、④褐色混じり灰色砂質土（中世の耕作土：段差よりも南で確認される）、⑤黄灰褐

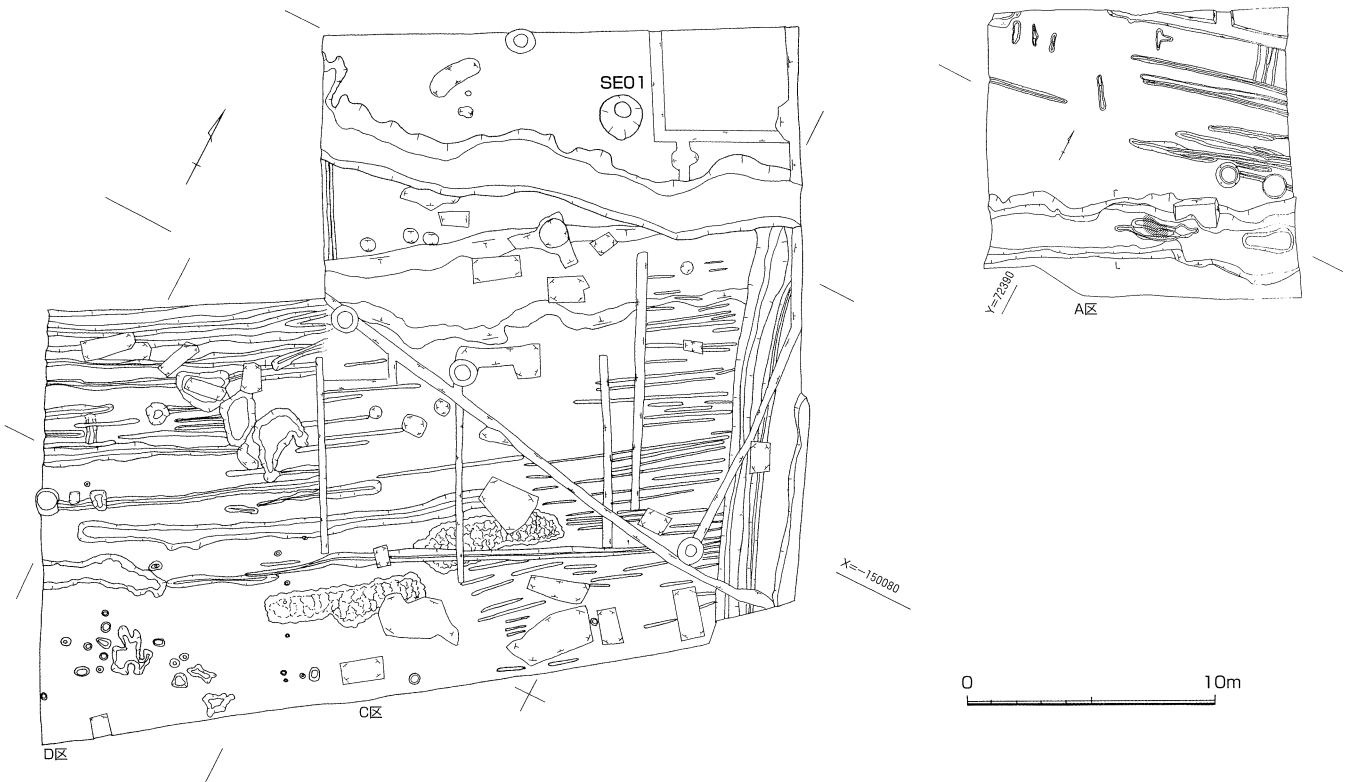


fig.90 第2-2次遺構平面図

色細砂～中砂（遺構検出面）

北側では現地表面から－1m前後で、南側では－0.4～0.6mで遺構検出面に到達する。

遺構

北端部で溝1条と井戸1基、中央～南端部にかけては中世の流路1条、ピット2基、犁溝多数が発見された。

溝

検出長約20m、幅2.5m～3.0m、深さ0.7～0.8mの溝で、西～東方向に流れたと考えられる。これまでの調査で発見された溝と接続が、このあたりでは、溝の幅、深さ共に規模が縮小しており、人工的な溝というよりは、自然流路のような様相を呈している。

溝内の下層には砂礫、中層には黒色シルトがそれぞれ堆積する。また、上層には、黄褐色系の中砂～粗砂が大量に流入しており、洪水等で最終的には埋没したようである。

出土遺物は土師器、須恵器の小片が僅かに出土しただけであった。

SE01

直径1.8～1.6m、深さ約1.0mの井戸である。遺構検出面から約0.5m掘り下げたところで、直径0.5mの穴を径と同じ位の深さで掘るといふ、二段の掘形となっている。下段の掘形には4条の箍をはめた桶が据えられていた。桶は幅9cm、長さ50cmほどの22枚の板で作られており、2cmほどの小穴を穿ったものがある。なお、井戸枠に転用されているため、底板は失われている。桶の中には、板材や角材片が捨てられていた。その中には、先を尖らせた長さ約40cm、幅6cmの板材があった。その一端は折損しているため、本来の形状、長さは不明である。この井戸の正確な時期は不明であるが、上層の堆積土からは室町時代頃の土器、陶器が出土し、近世の陶磁器を含まないことから、当該時期の遺構であると判断している。

中世の流路

東隅で8.5mにわたって検出されたが、大部分は現在使用中の道路敷に重なり、調査できなかった。調査できた範囲では、肩部から底面に向けてほぼ垂直に0.8～0.9m落ち、粗砂系の堆積物が詰まっていた。その中からは主に室町時代の土器、陶磁器が出土した。この流路と平行に数条の浅い溝が西側に走り、溝から西には後述の犁溝群がそれらとほぼ直交する状態で確認されたことから、耕作地の区画溝の可能性が高い。

ピット

南端で2基確認された。いずれも中世耕作土である褐色混じり灰色砂質土が埋土となっている。

犁溝

南半部を中心に多数の犁溝が確認された。これらの溝はおおよそ南南西～北北東方向を往復しており、耕起の方向が窺える。ほとんどが数cm程度の深さしかないが、10cm程度の溝や部分的に数十cmにわたって広く不定形に掘りこまれた個所もあり、畝立て、採土等が行われたようである。東端の浅い溝および中世流路付近で犁溝が途切れていることから、耕作地の区画となるようである。

小結

C区では、これまで確認された溝の続きが検出された。ここまでの調査で、溝はおおよそ120mの長さにわたり、ほぼ直線に延びていることが判明した。しかし当該区の様子をみると、溝というよりは自然流路に近い様相を呈している。南半部では多数の犁溝と耕作地を区画する溝、流路が確認された。

D区

現地表面高は15.5m前後である。

基本層序

D区は、C区に隣接し、基本層序は変わらない。現地表面から0.5～0.7m程度で遺構検出面に到達する。

- 遺構** 溝、犁溝多数、ピット、不定型な落ち込みが確認された。
- 溝・犁溝** 溝、犁溝はC区と同様に南南西～北北東方向に延びている。北端部の数条の溝は耕作地の段落ち際の排水用の溝と考えられる。幅1.0m程度の溝には、底面に鍬を打った痕跡が二列で規則的に並んでおり、畝立ての際に帯状に掘りこまれた溝であろうと推定される。
- 不定形な落ち込み** 北半部に4ヶ所、南半部に3ヶ所あり、0.2～0.3mの深さがある。底面は凹凸が著しく、不定形な平面形である。いずれも中世の耕作土で埋められている。土取り穴や木の根の痕跡と思われる。
- ピット** 南端部で発見された。いずれも浅く、柱穴とは判定しがたい。
- 小結** D区で発見された遺構にはすべて中世（鎌倉～室町時代）の遺物を含む耕作土が入っており、当該時期頃の遺構であると判断される。

3. まとめ

第2-1次調査では、第1次調査で検出された「大溝」と関連する遺構を確認した。調査区南西端で検出したSD12は、南側で「大溝」につながると考えられる。下層からは馬歯や種子が出土しており、何らかの祭祀が行われていた可能性がある。SD11とSD13は規模が不明であるが、第1-2次調査で検出している「大溝」の北側につながる溝の東肩と思われる。

建物に関しては確認できなかったが、これらの「大溝」が存在することは、背後に相当規模の集落を想定させる。今後の周囲の調査により、「大溝」の規模や方向なども含めて当遺跡の実態も明らかになるとと思われる。

第2-2次調査では4ヶ所の地区を発掘した。昨年度確認された飛鳥～奈良時代の溝の総延長が約120mにわたり、ほぼ直線に延びていることが明らかになった。溝の状況は、西側が浅く幅も狭いのと比べて、東側は深く、幅が広く掘られているということが判る。この溝の掘られた理由は、まだ解明されていないが、等高線にほぼ平行な形で掘られていることからみて、何らかの引水、導水施設の可能性があるのではないかと推測される。いずれにせよ、相当な掘削工、運土量であり、工事のために動員された人員はかなりの数におよんだことは確実であろう。この工事を計画し、労働力を組織化した主体がどのようなものであったかは明らかではない。

ほとんどの調査区で、中世の犁溝が確認されたが、特にC、D区では良好に残存していた。両地区では、畝立てや鋤または鍬を規則正しく打ち込んだ痕跡が発見されている。また、当該時期の耕作土はいずれも、保水力のきわめて低い砂質の地山上に直接、置かれており、水田として湛水することは不可能であったと想定される。上記のことから、中世段階では当該地周辺は畝地として利用されていたようである。飛鳥・奈良時代段階での土地利用状況は明らかでないが、水田として利用されていた可能性はほとんどなく、中世と同様に畝地または荒蕪地となっていたことが想定される。仮にこれまでの調査で確認された溝が、灌漑用途を持っていたとしても、もっと東の地域を潤すためのものであろう。

19. 舞子古墳群 第18次調査

1. はじめに

舞子古墳群は明石海峡北岸の通称舞子丘陵上に所在する古墳群である。古墳は丘陵頂部やそこから派生する小尾根上に分布し、それぞれ数基から10基で支群を形成している。舞子丘陵は六甲山系の稜線沿からはすこし外れるが、構成される岩石は六甲花崗岩で横穴式石室の構築に必要な石材が遠方から運ぶ必要なく取得できる条件にある。しかしこのことは近世城郭の築造の際も同様で、西方約5 kmに所在する明石城築造時には丘陵一帯が石垣用材の採石場になっていたようで、丘陵の路頭に石を割り取るための矢穴が確認されている。その際に相当数の古墳も損壊を受けたと考えられ、事実これまでの舞子古墳群での発掘調査でも石室石材に矢穴が穿たれていたり、刻印されていた事例が確認されている。

舞子古墳群は江戸時代中頃以降現在まで郷土の地誌類によく採り上げられ、比較的古くから周知されていたが、昭和50年代以降丘陵西半は宅地化、東半は墓園の造成で残されていた古墳が知られずに被害を受けたものもあったと思われる。昭和52年以降は神戸市教育委員会でも開発の際には事前の発掘調査が実施されるようになり、今回で第18次調査を数えることとなった。現在までに古墳参考地も含めると9支群44基の古墳が確認されているが、丘陵頂部一帯には古墳の下から弥生時代の高地性集落も確認されており、早くから人々の活動の場であったことが判明している。



fig.91
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 今回の調査地点は東石ヶ谷支群に属し、平成11年度に第17次調査を実施した古墳と同じもので、集合住宅の開発計画が立てられているため更に古墳の詳細な資料を得ることを目的として調査が実施された。当該古墳は東石ヶ谷2・3号墳の名称で2つの円墳が隣接するものと考えられていたが、第17次調査の際に改めて測量を実施すると前方後円墳の可能性が指摘されるようになった。従って今回は墳形の確認に重点を置き、併せて横穴式石室の規模の確認を行った。また当該古墳の南約30mに4号古墳参考地が所在するため古墳であるかどうかの確認も行った。調査区の名称は第17次調査を踏襲して呼称した。調査の方法は人力で表土から順次掘削と精査を実施し、終了後埋め戻した。また震災の際に転落したと思われる石室石材も元の位置に復元した。

2・3号墳 調査区の位置はfig.92を参照されたいが、石室から開口部方向に8tr.その更に西側墳端部に8tr.西延長、前方部からくびれ部の墳端部に11～15・17tr.墳頂の後円部から前方部にかけての部分に16tr.を設定した。

8tr.石室 従来から石室の上部石材が露出し、神戸大学考古学研究会によって測量されていたが、今回もう少し掘り下げて石室の規模を確認した。しかし石室の上部はかなり破壊されており、予想以上に石室内に石材が多く転落していた。玄室内に転落した石材の1つと左側壁玄門部の原位置を保つ石材の1つに矢穴が穿たれており、これらの石材は明石城築城時の採石で搬出され残ったものであると推定できる。床面まで掘り下げていないが、石材検出深度での規模は玄室長5.1m、玄室幅1.8m、羨道長5.1m、羨道幅1.1mである。

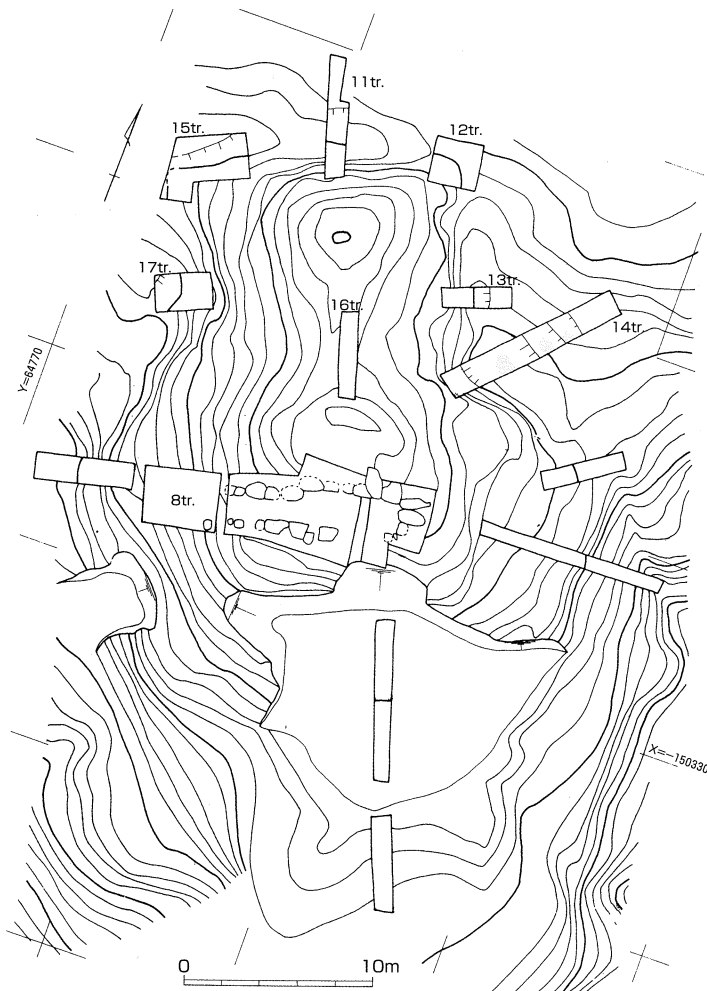


fig.92 調査区配置図

玄室長・玄室幅・羨道幅は床面ではもう少し大きくなると考えられる。開口部右側壁の石材が抜き取られているが、抜き取り坑一杯まで石材があったとすれば羨道長は右側のみ約1.0m長くなる。また高さは開口部で確認した床面が水平に玄室まで続いていた場合、玄室高3.2m以上、羨道高1.7m以上である。石室の主軸方向はW13° Sである。石材はほとんどが六甲花崗岩であるが、主石材の間に咬まされていた小石材のうち2点結晶片岩が使われていた。しかし墳丘中他から弥生土器片に伴って結晶片岩小片が出土しているため、これらは墳丘構築時に本来下層に存在した弥生時代の遺構中に含まれていたものを転用したものと考えられる。遺物は結晶片岩の他に須恵器片・弥生土器片が出土したが、これらはすべて石材が抜き取られた以降の堆積土からの出土である。

閉塞石 石室開口部床面上で人頭大前後の石材の集積を検出した。あまり丁寧には積まれていないため、閉塞石が一部崩されたものの可能性が高い。しかし検出したのみで解体精査を実施していないため、中には排水溝中の石材も含まれている可能性も残る。石材には六甲花崗岩が主で、一部大阪層群中に含まれていたであろう砂岩も含まれていた。遺物は須恵器片が少量出土したが、希少な器種としては小壺の装飾付壺が含まれていた。

墓道 石室開口部から延びる墓道を検出した。調査区外に続くため全長や墳端との接続部分の構造は不明であるが、南西方向に曲がりながら続き、断面は「V」字形である。南西に続くことから、本墳に向かうのは丘陵頂部からではなく尾根筋下方からであることが判明した。埋土から多くの須恵器片が出土したが、底付近ではなく比較的上部からも出土している。従って石室内部から掻き出されたものか開口部の祭祀に使用したものかは判別できない。希少な器種として、小壺の装飾付壺が含まれていた。明確に時期の判明するものはTK209型式の坏・高坏があり、6世紀末の段階にはまだ追葬が行われていたことになる。

墳丘盛土 盛土は部分によって若干色調は異なるが、淡橙褐色系の砂質土で、非常によく締まっていた。弥生土器片が少量出土した。

8tr. 西延長 後円部の西側に設定したトレンチで、墳端を検出した。墳端は地山を成形したもので、盛土はその約0.4m上から行っていた。盛土は淡黄～白黄色で若干砂質が強いものである。周溝は確認できなかった。遺物は多くの須恵器片が出土したが、盛土が攪乱された層からの出土のため、墓道同様に石室内部から掻き出されたものか開口部の祭祀に使用したものかは判別できない。希少な器種としては小壺の装飾付壺・鳥の装飾付壺が含まれていた。

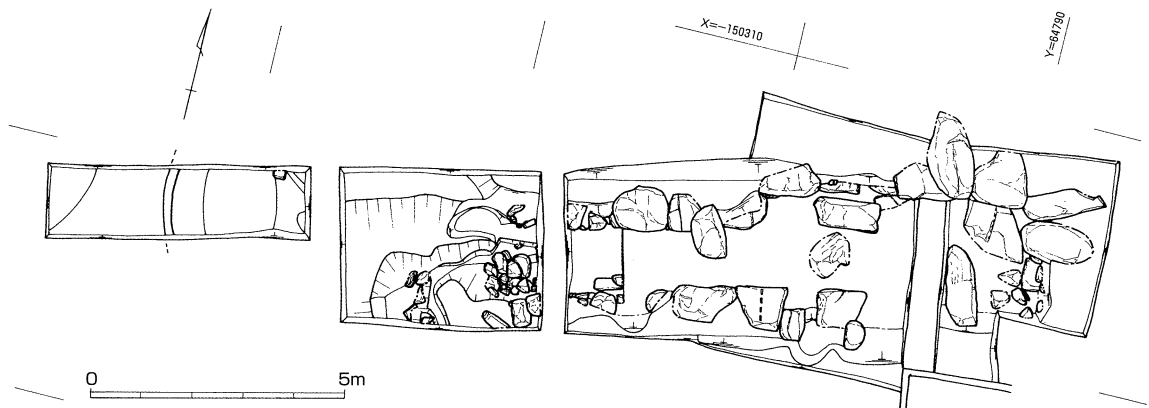


fig.93 8tr. 遺構平面図

明確に時期の判明するものはTK209型式の坏がある。また表土からTK43型式の坏が1点出土した。

- 11tr. 前方部正面中央に設定したトレンチで、周溝を検出した。周溝は地山を掘り込むが、墳丘側の肩は不鮮明で、土層から幅2.8m、深さ0.5mと計測した。周溝底面は自然地形の勾配にそって墳丘側に傾斜していた。遺物は周溝埋土上部から須恵器片・弥生土器片・瓦片が少量出土した。
- 12tr. 前方部北東隅に設定したトレンチで、墳端を検出した。墳端から盛土で、墳端直下では盛土の範囲を表した可能性が考えられる小規模な溝状の窪みを検出した。周溝は確認できなかった。遺物は墳丘中から弥生土器片が出土した。
- 13tr. 前方部東側側面に設定したトレンチで、周溝を検出した。周溝は地山を掘り込むが、他のトレンチ同様に墳丘側の肩は不鮮明で、土層から幅1.1m、深さ0.4mと計測した。しかし、もう少し墳丘側に周溝が広がる可能性も残っている。遺物は周溝から弥生土器片が少量出土した。
- 14tr. 東側くびれ部に設定したトレンチであるが、ここでは後世に地形を改変している状況が確認された。墳丘を削って地山を掘り込み、また墳丘の反対側を底から3段に地山成形していた。トレンチの両側に位置する第17次調査の6tr.と今回の13tr.でも古墳の周溝を検出しているが、周溝は地形改変時に削平されて消滅したのと考えられる。各段の平坦面上では火を焚いており、赤変した地山の上に炭が分布していた。遺物は掘り込みの埋土から須恵器片・弥生土器片が出土したが、須恵器には平安時代頃のものも含まれており、また11・15tr.では瓦片が出土していることから、近隣にその頃の小堂が存在し、この位置で何らかの祭祀が行われていた可能性がある。また墳丘中から弥生土器片と結晶片岩片が少量出土した。



fig.94 8tr.玄室全景

15 tr. 前方部北西隅に設定したトレンチで、周溝を検出した。周溝は地山を掘り込むが、墳丘側の肩は墳丘が崩れているため他のトレンチ以上に不鮮明である。幅1.6~1.9m、深さ0.6mであるが、墳丘隅先端と墳丘西側周溝の大部分は後世の地滑りによって崩れていた。遺物は表土から須恵器片・弥生土器片・瓦片が、周溝埋土および墳丘中から弥生土器片が少量ずつ出土した。

16 tr. 墳頂の後円部から前方部にかけての部分に設定したトレンチである。後円部側は後世の盗掘坑もしくは石材抜き取り坑で攪乱されていたが、他はすべて墳丘盛土で、円墳が2基隣接したような状況は確認できなかった。盛土は後円部側は淡橙褐色で若干砂質が強いものの、前方部側は淡黄色で若干粘質が強いものである。墳丘全体を調査しなければ正確には判らないが、前方部に設定した各トレンチの墳丘盛土はすべて淡黄色系のものであったことからみて盛土の採集場所が同じであった可能性がある。

17 tr. 東側くびれ部に設定したトレンチで、周溝を検出した。周溝は地山を掘り込むが、墳丘側の肩は他のトレンチ同様に不鮮明である。幅2.2m、深さ0.6mで、調査面積が狭いが墳丘くびれ部の形状にほぼ平行して屈曲するようである。遺物は周溝埋土から須恵器片・弥生土器片が出土したが、他のトレンチと比較して須恵器の出土量は多く、近くで祭祀をしていた可能性がある。また墳丘中から弥生土器片が少量出土した。

4号参考地 石材が南北方向に並んでいる部分に9 tr. 少し大きい石材が位置する部分に10 tr. を設定した。

9 tr. かつて神戸大学考古学研究会によって測量され、古墳の可能性が指摘されていた巨石の列石である。調査の結果岩盤の路頭とそこから遊離した石材であることが判明した。また巨石も偶然に南北方向の節理が岩盤に走っており、節理に沿って岩盤から剥がれたものであることが判明した。遺物は出土しなかった。

10 tr. 9 tr. の東隣に比較的大きな石材があり、東西方向に長軸を向けていたために石積の可能性が考えられた。しかし調査の結果すぐに地山となり、石積の可能性は否定された。遺物は出土しなかった。

3. まとめ

東石ヶ谷2・3号墳は従来2基の円墳が隣接していたものと考えられていたが、調査の結果、少し前方部長が短いものの、前方後円墳であることが確認された。その視点で神戸大学考古学研究会の測量図を見ると、やはり前方後円墳と認識するほうが良い状態にある。おそらく舞子古墳群内には円墳しか存在しないといった先入観と、下草が繁茂してよく判らなかったことがその原因であろう。東側くびれ部は後世に改変されているが、全長29.6m、後円部径27.0m、前方部長8.6m、前方部幅15.6m、くびれ部は推定幅15.4mの規模である。高さは傾斜地に築造しているため計測部分によって変動するが、より低い部分から計測すると後円部が3.5m、前方部が3.2mである。古墳群に現存する古墳の中では唯一の前方後円墳となる。

古墳は第17次調査と今回の調査によって、前方部のほぼ全体と後円部の西側と南側には周溝が巡っていることが判明した。しかし後円部の西側と前方部の北東隅には巡っていない。古墳は緩斜面上に構築されているが、前方部北東隅は最も高い部分である。本来

ならば最も深く周溝を掘削すべき位置であるが、古墳への渡り土手のようなものが意識されていた可能性がある。また周溝内からは明確な転石は確認されなかったため、葺石は葺かれていなかったものと推定される。また埴輪片も同様に確認されなかったため、樹立されていなかったと推定される。墳丘の段築の有無については確認できるようなトレンチを設定していないため不明であるが、墳丘の等高線と古墳の現況を見る限りでは段築はなかった公算が高い。

墳丘盛土は後円部が淡橙褐色系の若干砂質が強く、地山に近いもの、前方部は淡黄色系の若干粘質が強い地山の風化土である。墳丘全体を詳細に調査し、大規模に断ち割って盛土の単位や構築方法を解明しなければ正確には判らないが、前方部と後円部では盛土の採集場所が異なっていたか、もしくは意図的に選択されていた可能性がある。また16tr.では前者の盛土の上に後者の盛土が積まれていたことが確認されており、ある程度墳丘の構築順序を表しているものと考えられる。

横穴式石室は舞子古墳群中の未調査墳で規模の不明なものも存在し、また個々の長さ・幅・高さなどでは更に大きい古墳も存在するが、石室全体を見れば古墳群中でもトップクラスである。今回出土した須恵器で最も古い時期のものはTK43型式のものであるが、石室の羨道長や奥壁の配石構成を見ると石室初葬の時期即ち古墳の築造時期はもう一時期古くなる可能性が考えられる。その後TK209型式までは確実に追葬が行われていたことになる。古墳群中では最初に築造された古墳ではないが、東石ヶ谷支群では最初に築造されている。また古墳の立地も尾根の南端で、古墳群内でも南側の明石海峡の眺望が最もよい位置である。別の支群で古墳が築造され始めた頃、最も良い立地条件の位置に前方後円墳が築造されたことは、従来円墳しか存在しないと考えられていた舞子古墳群の評価を再考する上で極めて重要である。また6世紀中ばから後半の時期に築造されていることは、前方後円墳としては周辺一帯を含めても最後に築造されたものの可能性が高く、古墳の評価は舞子古墳群内に留まらず、東播磨地方全体の中で評価されるべきものである。

古墳の名称は2基の古墳が隣接したものと考えられていたため、前方部が東石ヶ谷2号墳、後円部が同3号墳と呼称されていた。今回はそのまま東石ヶ谷2・3号墳としたが、1基の前方後円墳と判明したため今後呼称を変更する必要も生じよう。また東石ヶ谷4号古墳参考地は今回の調査の結果古墳ではないことが判明した。従ってこれに関しては抹消する必要があるだろう。

20. 端谷城 第1次調査

1. はじめに

端谷城は鎌倉時代から戦国時代まで現在の神戸市西区櫛谷町・平野町・押部谷町を領有した衣笠氏の最後の居城として知られ、櫛谷町の谷平野の東端、寺谷地区の中央にあたり、櫛谷川が南に折れて平野部に流れ出る地点の右岸丘陵上に位置している。

現在の端谷城の立地する南北丘陵は丘陵端に衣笠氏の菩提寺である天台宗満福寺が建ち、寺の背後に想定される本丸・二の丸等の曲輪は、山林となっている。この端谷城は昭和38年以来、地元寺谷地区の前山純三氏の研究によって城の構造などが紹介され、戦国時代終わりころの山城の様相をよく残す城跡として周知されてきた。

城跡では、平成12年に寺谷地区里づくり協議会を中心に、地区住民の方々やボランティアの協力により、伐採・清掃などの整備作業が行われ、地域づくりの一環としての、城跡整備へと準備が進められてきた。今回の発掘調査は、地区の整備作業をうけ、端谷城の二の丸、西の壇（曲輪）での遺構確認と構造を明確にする目的で実施した。

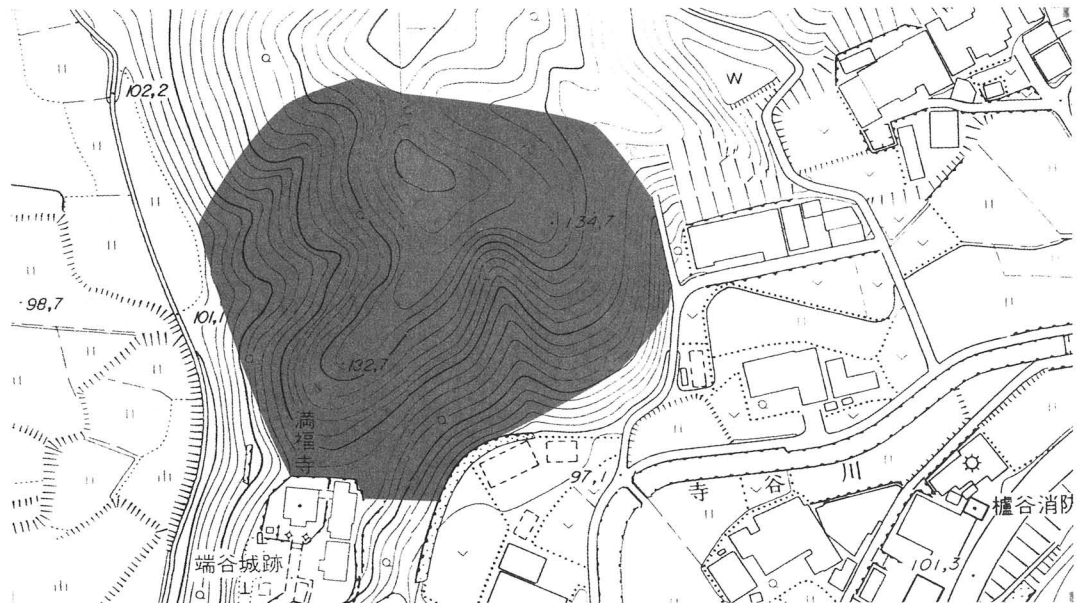


fig.95
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

端谷城は、南北に舌状にのびる丘陵尾根を切って、馬蹄形に深い横堀を掘り、城域全体を前面の櫛谷川と西側の谷を流れていた西の谷川とともに防御している。そして丘陵の高い部分を本丸として造成し、また本丸の北西隅最高所に裁頭方錐形の物見台もしくは天主台を残している。さらに、南側に丘陵の傾斜を利用しつつ二の丸・三の丸（現満福寺）の曲輪をつくり、周囲には帯曲輪と考えられる平坦面もみうけられる。本丸の西に続く尾根には比較的大きな曲輪「西の壇」を設けて、西側谷筋からの攻め手に備える。さらにまた、二の丸と三の丸の間には土塁と堀切を設け、きわめて堅固な城構えを整えている。

なお、本概要では二の丸、西の壇などの通常近世城郭で用いる語で地区名を呼称する。本来は、「二の曲輪」、「西の曲輪」ないしは平坦面と呼ぶのが一般的である。しかしながら、従来から地元で通称される「〇〇丸」と呼称したほうが理解しやすいと考え、従来からの呼称を用いる。

西の壇
建物 1

検出当初幅5.0m、長さ12m前後の平坦面に東西4間（6.8m）、南北2間（2.0m）の細長い建物として検出したが、埋め戻し終了間際、建物の北西崖面で長辺40cm大の扁平な河原石をしたことから、本来の曲輪は幅7.0m以上あり、建物は南北3間以上（3.0m以上）、東西4間（6.8m）の総柱の礎石建物と考えられる。礎石は南側柱で0.4~0.5m前後の扁平な河原石を用いるのに対し、西側の礎石は0.3m大の小型の河原石を用いる。束柱に用いた礎石は検出されず、直径0.5m前後、深さ0.2m程度の礎石掘付痕跡を検出した。また、東側では0.2m大の河原石を集めて礎盤としている。西側は柱間隔が短く下屋状の構造であったと考えられる。なお建物1の敷地は、約0.2m前後の黄褐色粘性砂質土による造成整地が行われたと考えられる。

塀

瓦・河原石を交えた淡黄灰色粘性砂質土を幅2.6m前後、高さ0.4m前後盛って塀の基壇としている。基壇の外側には幅1.0m前後、深さ0.2m前後の溝を巡らせる。基壇の内側は建物1の礎石際に接し、溝などの設備は検出されなかった。基壇外側の溝埋土から瓦類が多量に出土している。

土塁

地表面の観察および調査前の地形測量によって推定されている土塁である。本丸西側尾根中央に尾根方向に沿って「U字形」に設けられている。現状での土塁頂部と「西の壇」南部の平坦面との比高差は約5.0mを計測する。調査は土塁が良好に残る西側と南側にト

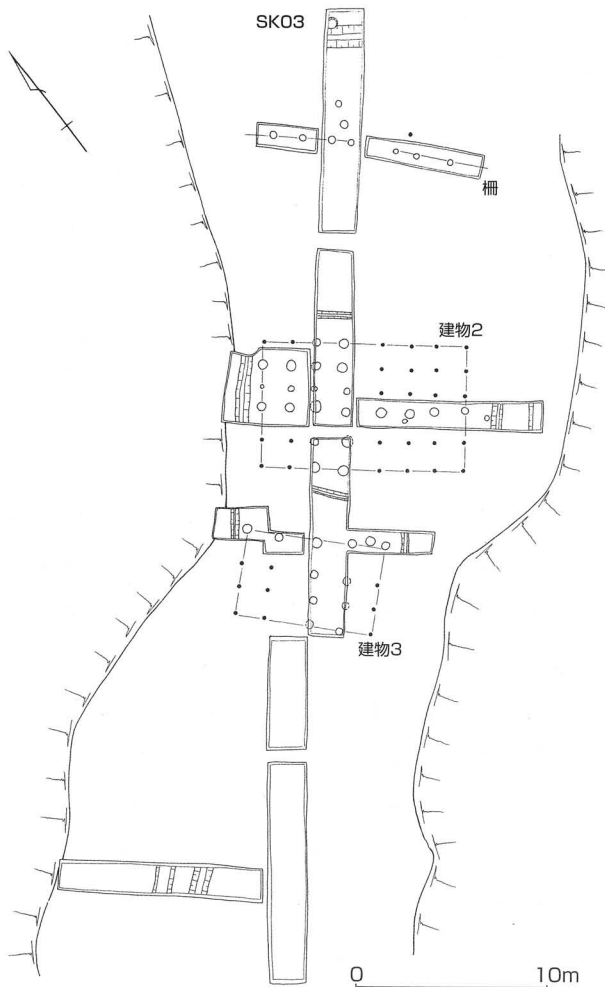


fig.96 遺構平面図



fig.97 二の丸全景



fig.98 塀基底

レンチを設定して実施した。

西側のトレンチでは、土塁外法部で犬走り状の平坦面を土塁頂部より約0.8m下で検出し、平坦面からほりこまれた柱掘形1ヵ所をトレンチ北西隅で検出した。柱掘形は一辺0.4m以上の方形で、深さ0.3mを計測する。土塁の内側には幅1.4m前後の犬走り状の平坦面があり、土塁はこの犬走り状の平坦面まで地山を成形し、さらに上部に蒲鉾形に約0.8m以上盛土して築いている。

空堀

土塁の内側に幅4.2～3.0m前後、深さ1.2m前後の空堀状の落ち込みを検出した。落ち込み埋土上層部からは鬼瓦を含む瓦類、陶器類が多量に出土し、下層部は灰色シルトが堆積した後に、灰・炭化物・焦土を含む流土が土塁側から堆積していた。

土塁の空堀底を含めた推定幅は7.0m前後と考えられる。なお、土塁の東側は犬走り状の平坦面まで削平され、さらに東側は自然崩落によって壊滅している。

二の丸

建物 2

東西7間(10.7m)、南北5間(6.5m)の束柱をもつ総柱建物である。東・西側は塀に接し、塀内側の溝を雨落ち溝としている。北側は幅0.5m、深さ0.25m、上層に拳大の河原石を敷く雨落ち溝を検出した。柱掘形は直径0.5～0.7m、深さ0.2mの円形に掘られているが、北から3列目の柱は直径0.25m、深さ0.15mの小型の掘形に据えられている。柱掘形の埋土は暗黄褐色土で、一部掘形埋土の上層は炭化物の堆積がみられる。柱掘形の埋土からは土師器皿、白磁皿が出土している。建物の方向は北33° 東を採る。

建物 3

東西4間(7.5m)、東西3間(4.5m)の束柱をもつ総柱の掘立柱建物である。北・東側に雨落ち溝を設ける。東側の雨落ち溝は幅0.4m、深さ約0.2mで上層に小円礫を敷く。北側は幅0.5m、深さ約0.2mで、灰色砂質土を埋土としている。雨落ち溝と建物の間隔は東側で1.2m、北側で2.5m、北側では土庇が設けられていたと考えられる。柱掘形は直径0.5～0.6m、深さ約0.2mで、柱痕跡は明瞭で、北東の隅柱は0.3m大の円礫を礎盤としている。柱掘形内からは土師器細片が出土している。建物の方向は、北38° 東を採る。

柵

本丸の切岸裾から南5mで検出した東西方向の柵と考えられる柱列である。西から3・4本目の柱掘形の北側には比較的深い柱掘形が設けられ、3本の柱が間隔0.9mで組まれたように検出された。また、この組まれた柱の西側でも0.9m間隔の2本の柱掘形が検出されていることから、0.9m間隔3本の組柱が1対設けられていたと考えられ、門扉等の施設であった可能性が窺える。柱掘形は直径0.3m、深さ0.2～0.3mを測る。

塀

平行する溝を設け、溝間に瓦・河原石を交えた粘土を積んだ塀基礎と考えられる遺構を建物2の東側と西側、建物3の西側、二の丸南部西側で検出した。

建物2の東側の塀基礎は、内側に幅0.6m、深さ0.2mの溝を設け、外側に幅1.0m以上、深さ0.4m前後の溝をつくり、その間を礫交じりの砂質土と瓦を交えた粘質土を台状に積み上げて塀の基礎としている。塀基礎の上端幅1.2m、下端幅2.1mを計測する。

建物2の西側塀基礎は、内側に幅1.0m、深さ0.5mの断面V字形の溝を掘り、外側に0.4mの前後の礫交じりの砂質土と瓦・小礫混じりの粘質土を蒲鉾形に積み上げて塀の基礎としている。外側に想定される溝は、自然崩壊している。内側の溝内埋土から土師器片・須恵器片・陶器片・瓦片が出土している。

建物3の西側塀基礎は、内側に幅0.6m、深さ0.5mの断面V字形の溝を掘り、外側に礫

混じりの砂質土と瓦・小石混じりの粘質土を蒲鉾形に積み上げて塀の基礎としている。外側に想定される溝は、自然崩壊している。内側の溝内埋土から土師器片・陶器挿り鉢・瓦片が出土している。

二の丸南部西側で検出した塀基礎は、内側に幅1.0m、深さ0.3mの断面U字形の溝を掘り、外側に幅1.1m、深さ0.2m前後の断面U字形の溝を掘り、その間を礫混じりの砂質土と粘質土を積んで塀の基礎としている。内側は炭化物が底に堆積した後焼成を受けた一石五輪塔片を含む岩礫が充填されていた。この塀の方位は北33° 東で建物2と同一方位を採る。

溝 本丸切岸沿いに検出した東西の溝である。幅1.0m、深さ0.2mのU字形の溝で、多量の瓦や天目茶碗を含む陶磁器類が埋土内から出土している。

土坑 1 本丸切岸裾で検出した直径0.9m、深さ0.3mの円形の土坑である。断面形は皿状をしていて、南側は削平されて肩をわずかに残している。土坑埋土内からは軒丸瓦片や陶磁器片などが多数出土した。南側で溝を切って穿たれている。

土坑 2 建物2中央やや南よりに検出した直径1.0m、深さ0.2mの円形土坑である。断面形は皿状をしている。埋土は炭化物・灰を含む淡黄色土である。埋土からの出土遺物はない。

3. まとめ

今回の発掘調査では、西の壇の小規模な曲輪において礎石建物を検出し、建物の背後には大規模な土塁を築造し、空堀状の落ち込みを設けていることが明確になった。これは、いわゆる西の壇が攻め手の本丸接近を防ぐ堅固な備えであったと考えられ、二の丸と西の壇の間に横たわる谷が、城の搦め手的な通路であった可能性を窺わせる。

また、西の壇では空堀内から大量の瓦類が出土している。瓦のなかには鬼瓦、鳥伏間等の大規模な棟を飾る瓦類がみられる。これらの瓦は、本丸乃至は天守台（物見台）からの流入と考えられ、自然崩壊による流入や人為的な投棄が行われた可能性もある。このような状況から本丸乃至は天守台（物見台）には大規模な瓦葺きの建物が建っていたと考えられる。

二の丸では掘立柱建物2棟、柵、塀の基礎等を検出した。掘立柱建物のうち建物2は塀と同一方向を採り、一方、建物3は柵とほぼ同一方位を採っている。また、建物3の西端が、塀の内側の溝とごく接近する点から、塀と建物3は同時に存在しなかったとも考えられる。さらに、建物2の造営は下層断ち割り調査の結果、黄褐色粘質土の整地層上から行われており、整地土の下層には分厚い炭・灰層、その下層には土師器を含む遺物包含層が検出されている。これらの状況から、端谷城は、柵を伴った建物3を陣屋とする時期、規模の大きな造成が行われ、大規模な平坦面をもついわゆる二の丸が築造され、周囲に塀が設けられ、建物2が造営された時期の2時期が考えられる。

これらの時期は、出土遺物の検討が未着手で明確ではないが、概ね十六世紀後半を遡る瓦当、陶磁器は未確認であることなどから、ほぼ羽柴秀吉侵攻による落城の天正八年（1580年）を前後する時期の造営にかかわるものと考えられる。さらに、端谷城の築城は、二次的な史料ながら『衣笠家系図』の範景の段に「築山頂一城移之」と記され、最後の城主衣笠範景によって現在の山上の城「端谷城」が築城されたことを窺わせる記事もある。したがって、端谷城はきわめて短期間に造営、改修が繰り返されたとも考えられる。羽柴秀吉の姫路入城から、別所謀反、三木城落城、そして端谷城落城と羽柴秀吉による播磨城割りにいたる天正年間に端谷城には数度の変遷があったものと思われる。

21. 白水瓢塚古墳 第9次調査

1. はじめに

神戸市西区伊川谷町潤和字シンド山に所在する白水瓢塚古墳は、明石川の支流である伊川の右岸に所在する、前方部を西に向けた古墳時代前期の前方後円墳である。現在の海岸線からは約3.5km離れ、高位段丘の端丘陵上、標高約60mの薬師山山頂に立地し、明石川下流域の平野を見渡すことができる。

当古墳は「白水夫婦（妻）塚古墳」「白水薬師山古墳」とも呼ばれていた古墳で、大正末から昭和初年にかけて直良信夫氏によって踏査および発掘調査が行われ、一部報告がされていた。これによれば、周囲に100基以上の埴輪棺が存在したとのことである。また、後円部の墳頂部には幅1m、長さ4mの粘土が存在し、その周囲に埴輪片が採取されたことから、埋葬施設は埴輪棺と想定されていた。

近年、当古墳周辺で、宅地造成や福祉施設建設等の開発計画があがり、古墳本体および周辺部において、昭和61年以降、8次計9回の試掘調査や本発掘調査がおこなわれてきた。昭和62年度の墳丘規模確認調査によって、墳丘裾の埴輪列や南側くびれ部中段の埴輪列が確認され、全長56m、後円部径31mであることが判明した。またその後の周辺部の調査によって、これまでに8基の埴輪棺およびその抜き取り跡と2基の木棺墓が見つかった。

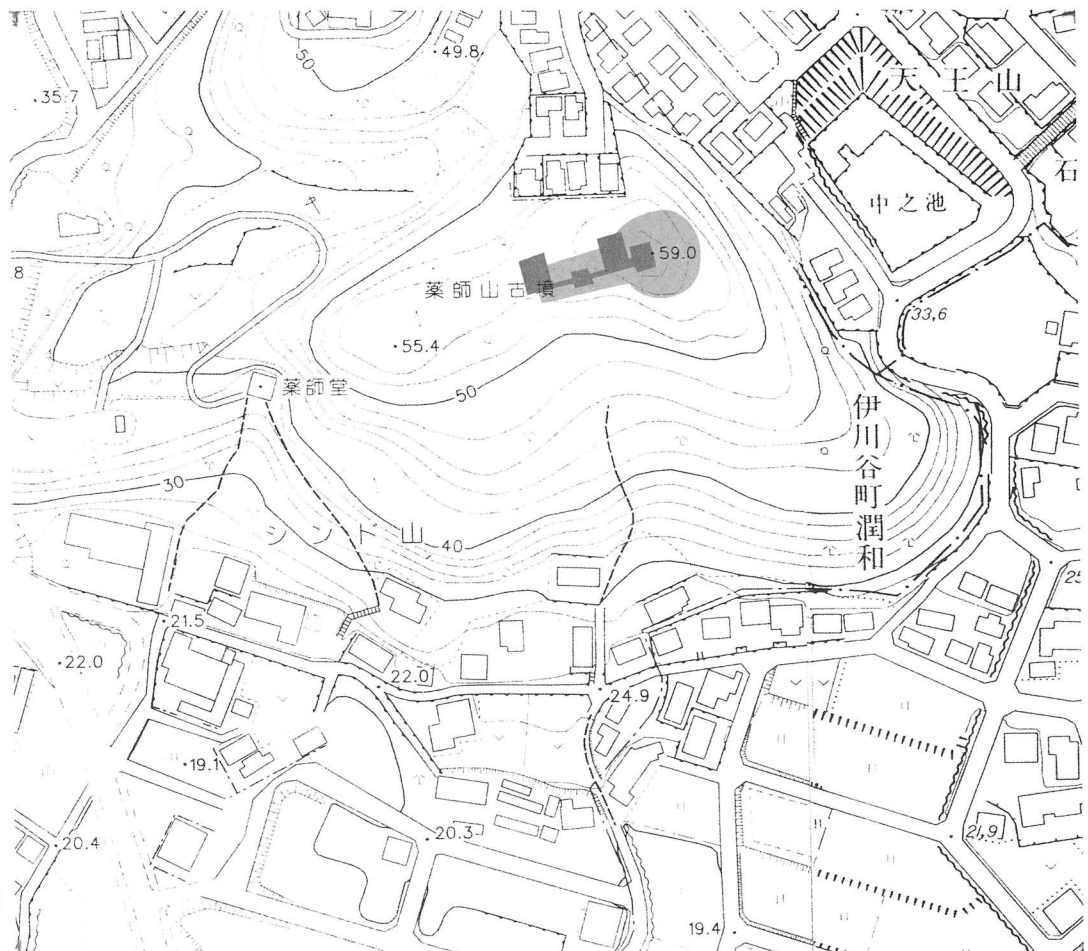


fig.99
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 今回の調査は、後円部埋葬施設の残存状況と、前方部埋葬施設の有無および、墳丘北側の前方部端とくびれ部を確認する目的で実施した。

後円部墳頂部 墳頂部は盛土の流出が激しく、既に地山が顕れており、原況のままで精査をおこなった。その結果、埋葬施設の掘形と考えられる、プランと後世の掘削跡、および昭和51年の盗掘坑が確認された。

埋葬施設掘形は、南北6.3m、東西4.0mで、墳丘主軸にほぼ直交する南北方向に主軸をもつプランが検出された。掘形内の埋め土は、周囲の地山よりもやや粘性を帯びた礫混じりの黄褐色土であり、その中央部には淡黄色砂礫が入っている。盗掘坑はこのプラン内のやや北西寄りに長さ2.5m、幅1.5m、深さ1.2mで掘削されており、その底から青灰色の粘土が検出された。盗掘坑底面で顕れた粘土には鉄製品片と赤色顔料が付着しており、埋葬施設の粘土と考えられる。盗掘坑の断面には厚さ約0.4mの粘土が見られ、割竹形木棺と思われる痕跡が確認される。また、鉄製品は剣または刀と思われ、南北方向にサビとその一部が残っていた。以上のことから、埋葬施設は割

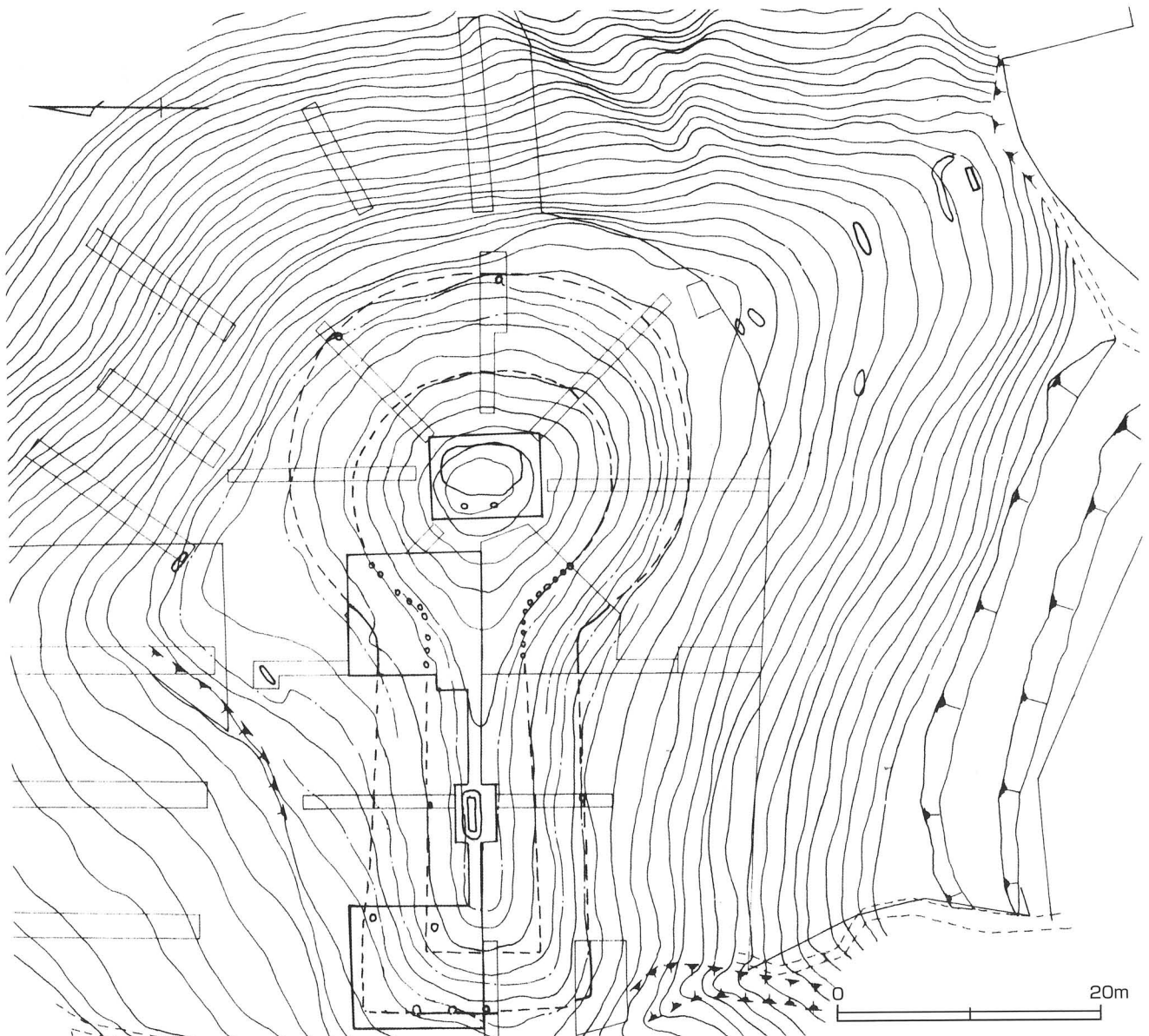


fig.100 調査区配置図

竹形木棺を埋納した墳丘主軸に直交する南北方向の粘土槨と考えられる。盗掘坑の最深部では粘土の下面に拳大の礫が見られることから、墓壇底に礫を敷き、その上に粘土床を造ったものと考えられる。

埋葬施設掘形上面ではその北寄りでは約1×1mの範囲で拳大の円礫が敷かれた部分が存在し、この礫の間から小型丸底壺の破片が出土した。この礫群が墳頂部を覆っていたかどうかは明らかではないが、埋葬施設上面における祭祀の跡と考えられる。

また、掘形の西方では掘形に平行して、中心間の距離が2.2mの間隔で2基のピットを確認した。このピットは後円部の墳頂部から見て前方部主軸を中心に、ほぼ対称的に並んでいる。ピット内は未掘削のため詳細は明らかではないが、埴輪ないしは何らかの構造物が立てられていたものと考えられる。

遺物としては、盗掘坑内から淡い青緑色の管玉1点と、鉄器片1点、銅製品片1点が出土しておりこれらは、埋葬施設内の副葬品と考えられる。またその他に、埋葬施設上面や平安時代の土坑および盗掘坑内から円筒埴輪片が出土している。

前方部墳頂部 前方部墳頂のトレンチでは後円部墳頂部の中心から西へ25m付近の地点で、埋葬施設が1基確認された。埋葬施設の掘形の規模は長さ3.8m、幅1.3m、深さ0.5m以上で、墳丘の主軸上にほぼ沿った東西方向である。その構造は掘形の底に粘土を敷いた粘土床の上に長さ2.6m、直径約0.7mの割竹形木棺を置いていたものである。木棺の小口は外側から蓋をした形状で、小口部分のみには小口板の内外と木棺の上面から粘

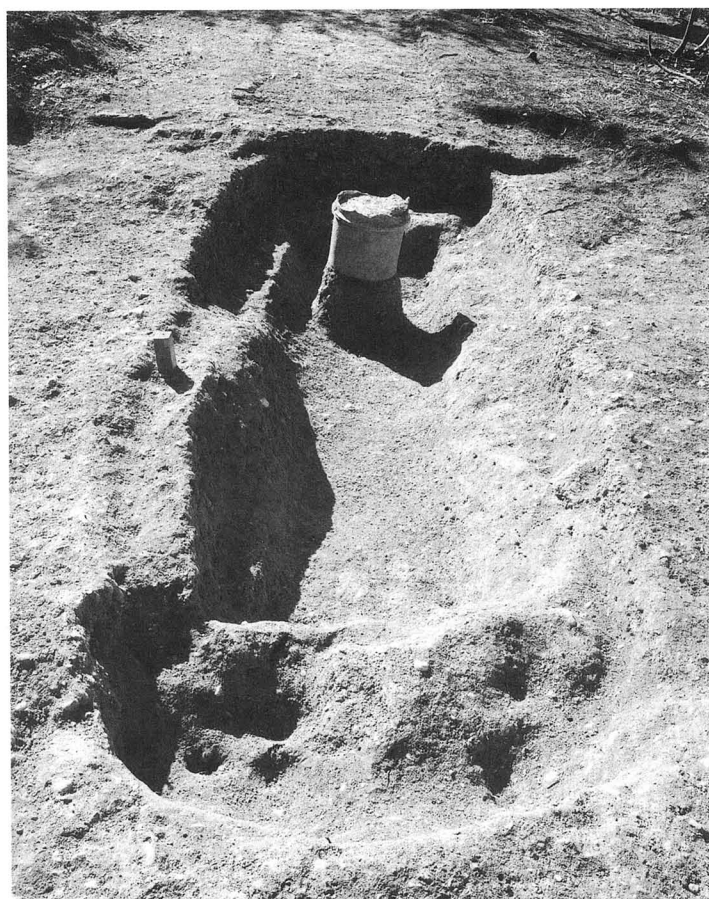


fig.101 前方部墳頂部埋葬施設

土で覆っていたようである。棺内の東小口から0.4mのところでは、直径0.25mの環状に粘土が棺底にあり、枕の可能性もある。棺内は全面に赤色顔料が塗布されており、特に東小口から0.6m付近と、西小口から0.9m付近に厚く塗布されている部分がある。棺内には副葬品は置かれていなかった。

棺内の西小口から0.6mのところには円筒埴輪の基部が立っており、その基底部のレベルは木棺を復元した場合の棺内に入ってしまう。この埴輪の掘形は確認されず、また埋葬施設上半の埋土は棺材が腐朽した際に落ち込んだと思われる土が入っているため、この埴輪は埋葬施設上に立てられていたものが落ち込んだものと考えられる。

北側くびれ部 北側くびれ部では、墳丘裾部と中段の埴輪が検出された。

中段の埴輪列は、抜き取り痕を含め9基確認され、その内、後円部の1基のみ基底部が残っていた。埴輪列の間隔は若干広い部分もあるが、中心間の距離がほぼ1.0m間隔で据えられていた。掘形の直径は0.4m程度である。またこの埴輪列付近の標高55.6mのレベルで幅1.2mの小段が確認された。墳丘裾部は確認されたが、裾部に巡らされていた埴輪列は抜き取り痕を含め、確認されなかった。

前方部北側端 前方部北側端のコーナー部分では墳丘の流出が激しく、コーナー部分は明確ではなかった。裾部の埴輪列は、昭和62年度の調査で前方部端前面の埴輪抜き取り痕が2基確認されているが、その続きは墳丘土が流出しているため確認されなかった。一方、北側裾部については、調査区内の東端で基底部が立った状態で検出された。この埴輪は裾部からやや墳頂部寄りのところに据えられていた。埴輪の直径は45cmを計る。また、北側中段埴輪列の抜き取り痕が、1基のみ確認された。

3. まとめ

これまでの調査成果と合わせると、この古墳は、全長56m、後円部径31m、前方部長28m、くびれ部幅15m、前方部端幅17mで、高さについては、墳丘盛土がほとんど流出しているため、本来の高さは明らかではないが、現況の高さは墳丘の南側からみれば後円部高4.6m、前方部くびれ部高3.6m、前方部端高2.4mを計る。また、埴輪列は、上段の埴輪列はこれまでの調査では確認されなかったが、埴輪片の出土状況から直良氏が報告されているように3段あったものと考えられる。また中段の埴輪列は小段上に並べられていたことが判明した。



fig.102 北側くびれ部



fig.103 前方部北側端

Ⅲ. 平成13年度の通常事業に伴う発掘調査

1. 西岡本遺跡 第4次調査

1. はじめに

西岡本遺跡は、住吉川左岸に位置し六甲山より派生した丘陵の先端に位置する。周辺には岡本遺跡などがあり、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く確認されている他、渦ヶ森銅鐸なども出土している。西岡本遺跡では、古墳時代後期の横穴式石室を中心とする群集墳が確認されており、第3次調査では5世紀代の古墳も確認されている。このことから、西岡本遺跡では、5世紀から7世紀にかけての古墳を中心とした遺跡と考えられてきた。

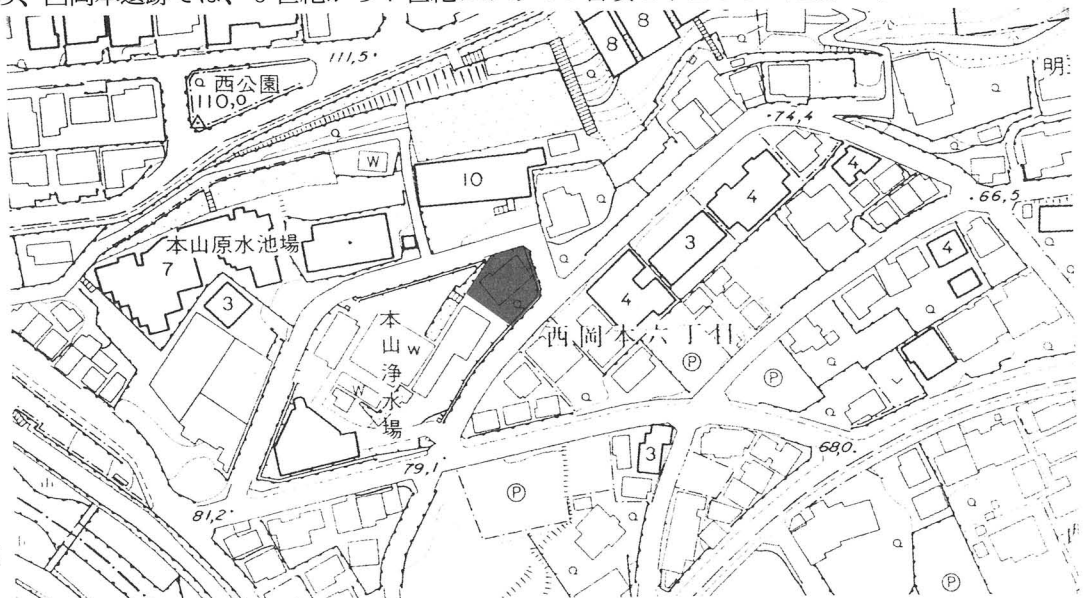


fig.104
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査では、進入路と縦坑建設に関わる部分について調査を実施した。

その結果、表土直下約0.5~0.7mで、遺構を検出した。遺物包含層は約0.1mで、褐色砂混シルトであった。

遺構は、多数の柱穴やピットを検出した。柱掘形は、最大のもので0.5mを測り、多くのは0.3m前後で深さは0.2mのものである。

SG01

規模は、範囲確認のためのトレンチ等により、東西15m以上、南北10m以上、深さ0.3~0.7mを測る。埋土は3層確認されており、石材の用法等の変化から、一度の大きな作り替えと、一度の小さな補修等がおこなわれている。なお、池さらえ等により土層の確認が忠実に表しているかどうか、現実には不安な面もある。また、部分的な補修等は確認しにくい部分もあり、実際には相当数の手が加えられているものと考えられる。

この苑池の時期としては11世紀後半が考えられ、非常に短期間の内に何度も手が加えられたものと考えられる。

1期

自然に露頭した石を巧みに使用し、緩やかな傾斜の池としている。この傾斜の部分には、小型の石を配し、洲浜を形成している。

2期

1期の段階で築かれたものを補修し、大きな石材で東側を新たにせき止め、西に池を拡張した段階のものである。大きな石材は加工され、切り組み等の手法により、しっかりとし

た石組みを築いている。洲浜を築く手法等は同じであるが、池の縁に大型の石材を配しているのが特徴である。この段階でも、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・青磁・白磁・鉄製品等が多数出土している。

3期 池の最終段階である。ほぼ池は埋没したような浅いものと変化している。2期の段階で作られた大型の石材による石組みもほぼ埋没した状態となる。この段階では、2期の段階で洲浜に使用していた石材よりも一回り大きな石材で池の面を覆っていたようである。

この段階でも、遺物は多量に出土している。

3. まとめ

今回の調査では、多数の柱穴と苑池を検出した。柱穴は、建物としては纏まるものはないが、この付近に建物が存在していたことはほぼ確実であろう。また、苑池は、大型の石材を使用し、洲浜をもうける立派なものである。規模も、10m×15m以上の大型のものである。これは、内容的に兵庫区の祇園遺跡で検出された苑池と遜色のないものである。また、時期的にみて、平等院等の建設が開始され、六勝寺などの建立が盛んになる時期に当たり、各地で庭園が築かれる時期に当たる。貴族の間でも別荘等に庭園を築き始めた時期と考えられる。このことから、この地にも別荘等をもった人物が築いたものと考えられるが、この時期に庭園を築き、これほどの苑池を築けるのは貴族の中でもかなり身分の高い人物と考えられ、今後の整理の進展等によっては、歴史上の人物との関連が浮かび上がってくる可能性も考えられる。



fig.105 S G01 1期



fig.106 調査区全景



fig.107 S G01 2期

2. 住吉宮町遺跡 第36次調査

1. はじめに 住吉宮町遺跡は、六甲山南麓の扇状地に立地する弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。これまでの調査で、当該地の北側の国道2号線周辺において古墳時代後期の小型の方墳が多数埋没した状態で確認されている。今回の調査は、共同住宅建設工事に伴うものである。

fig.108
調査地位置図
1:2,500



2. 調査の概要 調査は工事影響深度までの掘削に止めたため、南半部については遺構検出面までの掘削に至らず、また、検出した遺構についても平面形の検出に止めた。

調査の結果、古墳時代後期の遺構を確認した。

基本層序 基本層序は、表土（第1層）、攪乱（第2層）、旧耕土（第3層）、淡灰色粗砂（第4層）、暗茶褐色砂混じりシルト（第5層）、暗灰褐色シルト（第6層）となる。このうち、第6層上面が遺構検出面で、竪穴住居1棟、土坑2基、ピット9基を検出した。

竪穴住居 竪穴住居は南北3.5m、東西4.0mのやや小さな方形で北辺中央部にカマドが設置されている。床面の検出に至らず柱穴等の配置は確認できていない。カマドは袖部のみが残存していた。一方の袖の長さが約0.8mで、すべて黄褐色の粘土で構築されている。焚口部の外側に掻き出した炭が約5cmの厚さで堆積している。須恵器坏身、坏蓋、高坏、土師器甕等が出土している。また、石製品としては紡錘車1点、白玉1点が出土している。竪穴住居より出土した須恵器は、TK47形式（6世紀初頭）の時期が中心である。

3. まとめ 今回の調査地は住吉宮町遺跡の南端にあたる。南端部の様相はまだ不明瞭なこともあったが、今回確認した竪穴住居により、この地に集落が拡がることが明らかになった。このことは、住吉宮町遺跡内の古墳と集落の拡がりを考える上で、その意義は大きいと言えよう。



fig.109 竪穴住居

3. 郡家遺跡 第70次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、六甲山南麓に形成された扇状地上に位置する遺跡である。昭和54年度に大蔵地区で発掘調査が実施され、奈良時代の掘立柱建物が検出されてから都市計画道路山手幹線、同弓場線築造工事、共同住宅、個人住宅建設に伴う発掘調査等、これまでに69次に及ぶ発掘調査が実施されている。検出された遺構、遺物は弥生時代～鎌倉時代にかけてのもので、六甲山南麓における複合大集落遺跡のひとつである。

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事による掘削影響範囲について、発掘調査を実施した。(1区)

1区の調査完了後、未調査部分において、本体工事に伴うクレーン基礎工事を実施する範囲について工事立会を実施した。(2区)

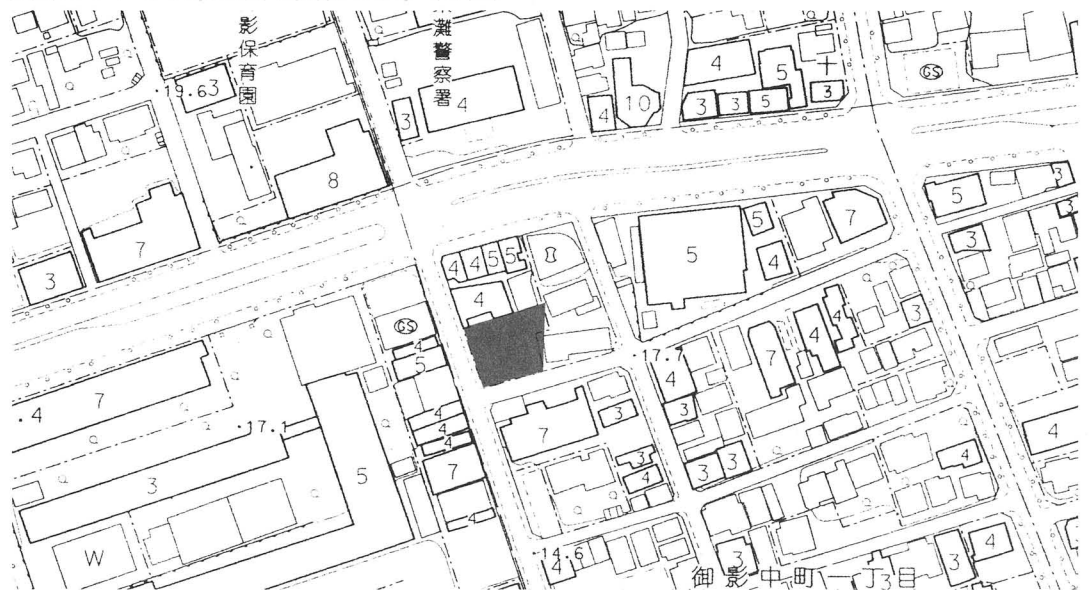


fig.110
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 基本層序

調査区内の基本土層は近代～現代の盛土、旧耕土、床土層の下に洪水砂層が存在し、これに切り込む奈良時代～中世の遺構が存在する。茶褐色極細砂(13層)の下層、淡褐色細砂(21層)上では古墳時代と考えられる遺構が検出された。これより下層は上から順に水田面である暗黒灰色砂質シルト(25層)である。この層は古墳時代初頭の遺物包含層である。この下層に一部で淡黒灰色砂質シルト(27層)が存在するが、第3遺構面である淡褐色細砂(30層)が存在する。地形は基本的には北から南へ緩やかに傾斜する。奈良時代～中世の遺構が検出された茶褐色極細砂(13層)までの深さは、現況の地表面から約0.95mである。

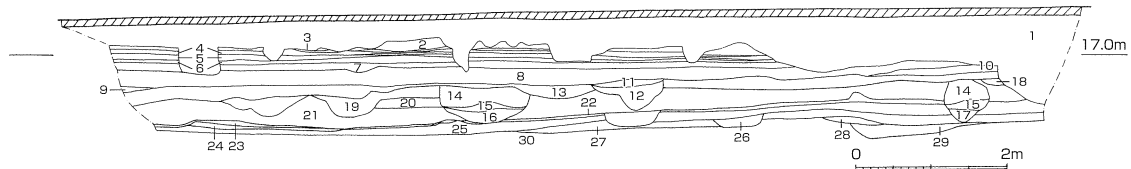
1区

掘立柱建物2棟、溝1条の他、ピット6基、土坑1基を検出した。検出された遺構は洪水砂層に切り込んでおり、本来存在したものと推定される遺構面が、後世の水田造成等により削平したものと考えられる。この様な状況であったため、洪水砂層上面での検出ではなく、水田畦畔検出時に確認されたため、検出面からの深さは0.1m前後である。

S B 101

調査区北東側で検出した総柱の掘立柱建物である。東西4間、南北1間を検出したが調査区の北側へと続くため、全体の規模は不明である。

柱間はほぼ2mで、柱穴掘形の直径は0.9～1.2m、円形が主であるが方形のものもある。



- 1. 盛土 2. 灰色シルト 3. 灰色シルト 4. 淡茶灰色砂質シルト 5. 茶灰色砂質シルト 6. 灰褐色砂質シルト 7. 茶褐色砂質シルト
- 8. 褐色シルト質極細砂 9. 暗灰褐色極細砂 10. 黄褐色極細砂 11. 暗茶褐色極細砂 12. 暗灰色極細砂 13. 茶褐色極細砂
- 14. 暗紫灰褐色極細砂 15. 淡褐色極細砂 16. 暗灰褐色極細砂 17. 黒灰色砂質シルト 18. 暗茶褐色極細砂 19. 暗褐色細砂+淡褐色細砂
- 20. 淡褐色極細砂 21. 淡褐色細砂 22. 灰色砂混粘質土 23. 黒灰色砂混粘質土 24. 茶褐色細砂 25. 暗黒灰色砂質シルト
- 26. 暗灰色シルト質極細砂 27. 淡黒灰色砂質シルト 28. 暗灰色砂質シルト 29. 暗灰色粘質土 30. 淡褐色砂

fig.111 調査区西壁土層断面図

柱痕は直径0.3~0.6mであり、大型の掘立柱建物である。時期については、出土遺物が微細な小片であり、また極めて少量であるため特定は困難であるが、柱穴掘形の状況、近隣地のデータから奈良~平安時代であると推定される。

S B 102 調査区北西側で検出した掘立柱建物である。東西1間、南北3間を検出した。西側は調査区外へ続くため、全体の規模は不明である。

柱間は最大1.5m、最小で1.0mと均一ではない。柱穴掘形の直径は0.6~0.8mの円形である。出土遺物は微細な小片であるため、時期の特定は困難であるが、出土遺物から古墳時代であると考えられる。

S D 101 調査区中央部西側で検出した幅0.5m前後の東西方向の溝である。中世の遺物が出土した。

ピット 7基のピットを検出した。直径0.4~1.0mで円形である。微細な須恵器、土師器片が出土している。

水田 22枚の水田を検出した。平面形は東西方向に長い長方形で、短辺2.0~3.2m、長辺4.0~6.5mである。南へ向かって下降する自然地形を利用している。小規模な区画は利水性を高めるためと考えられる。

検出状況から、洪水により短時間で埋没したものと考えられ、水田区画は良好な状況で検出されたが、稲株や足跡等は確認されなかった。検出した畦畔は、下部で幅0.4mであるが、上部は洪水の影響を受けており、元来の形状を保っておらず、洪水砂により寸断されたと思われる箇所も存在した。調査区の南東部では、水田畦畔に直交する南北方向の畦畔状の高まりが検出されたが、西側が洪水砂により大きく抉られており、洪水の勢いの激

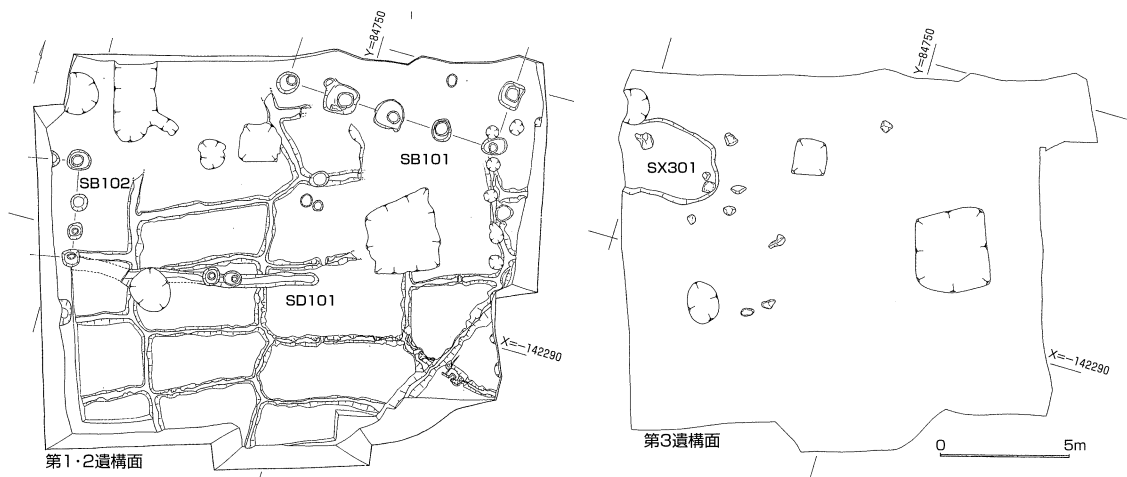


fig.112 遺構平面図

しさを物語っている。尚、この南北方向の畦畔上の高まりは、他の部分では検出されておらず、性格は不明である。

水田の造成時期及び埋没時期については、遺物の出土がわずかであるため、時期の特定は困難であるが、洪水砂中には古墳時代中期頃と考えられる須恵器甕が出土しており、S B 102との切り合いから、古墳時代中期頃の洪水により埋没したものと考えられる。

第3 遺構面 遺物包含層から古墳時代初頭頃の土師器が出土した。

調査区北西角付近で、落ち込み状遺構1基を検出した。出土遺物はなく、時期については不明である。

2 区 クレーン基礎工事範囲部分である。本調査区では、洪水砂層は後世の攪乱により、確認されなかった。水田面は検出されたが、畦畔は確認されなかった。

下層の遺物包含層から、わずかに土師器片が出土した。遺構は検出されなかった。

3. まとめ 今回の調査では、古墳時代、奈良～平安時代の掘立柱建物、洪水砂により埋没した水田畦畔が良好な状態で検出された。

今回確認された掘立柱建物の中でも、奈良～平安時代のものと考えられる掘立柱建物(S B 101)は柱穴、規模共に大きなものである。柱穴掘形の直径が1 mを越える大型の掘立柱建物は、これまで昭和53・54年度に実施された大蔵地区の調査でも確認されているが、今回の調査で確認されたS B 101も非常に大型の掘形を有するものである。郡家遺跡全体の様相を考える上で貴重なデータとなった。

水田については、今回の調査地の西方の御影中学校構内において、昭和63年度に実施された体育館改築に伴う発掘調査で、洪水砂により埋没した古墳時代中期頃の水田が検出されている。今回の調査において検出された水田でも古墳時代中期頃の遺物が洪水砂中より出土しており、ほぼ同時期の水田であると考えられる。水田の区画は昭和63年度調査に比べ、ほぼ等しい区画であり、地形の制約をあまり受けていない為と考えられる。

六甲山麓を繰り返し襲った洪水による被害を示す貴重なデータを得る事ができたのは、大きな成果である。



fig.113 第1・2遺構面全景



fig.114 水田検出状況

4. 熊内遺跡 第3次調査

1. はじめに

熊内遺跡は神戸市中央区熊内橋通5・6・7丁目及び旗塚通6・7丁目に所在する。今回の調査地は山陽新幹線新神戸駅の南東に位置し、商業施設や住宅等が密集する地域である。

この遺跡は、生田川が六甲山系の山間部から平野部に流れ出した地点付近の左岸扇状地上に立地し、すぐ北側には弥生時代中期後半の布引丸山遺跡のある「砂山（いさごやま）」が存在する。

当遺跡は平成元年度に共同住宅建設に伴う調査で発見された遺跡で、同年度に2度の調査が行われている。今回の調査地の東に隣接する第1次調査地点では、弥生時代後期の方形竪穴住居が2ないし3棟検出されている。また、調査地南東側に隣接する第2次調査地点でも、同時期の方形竪穴住居3棟、円形竪穴住居1棟、大溝1条等の遺構と、弥生土器や銅鏃などの遺物が発見されている。

今回の調査は、神戸市バス旧布引車庫地の整備に伴う発掘調査で、昨年度から継続して実施した。

2. 調査の概要

今回の調査では、縄文時代早期初頭、縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期の計5時期の遺構が検出された。遺構・遺物の詳細については、『熊内遺跡第3次調査 発掘調査報告書』に記載されている。

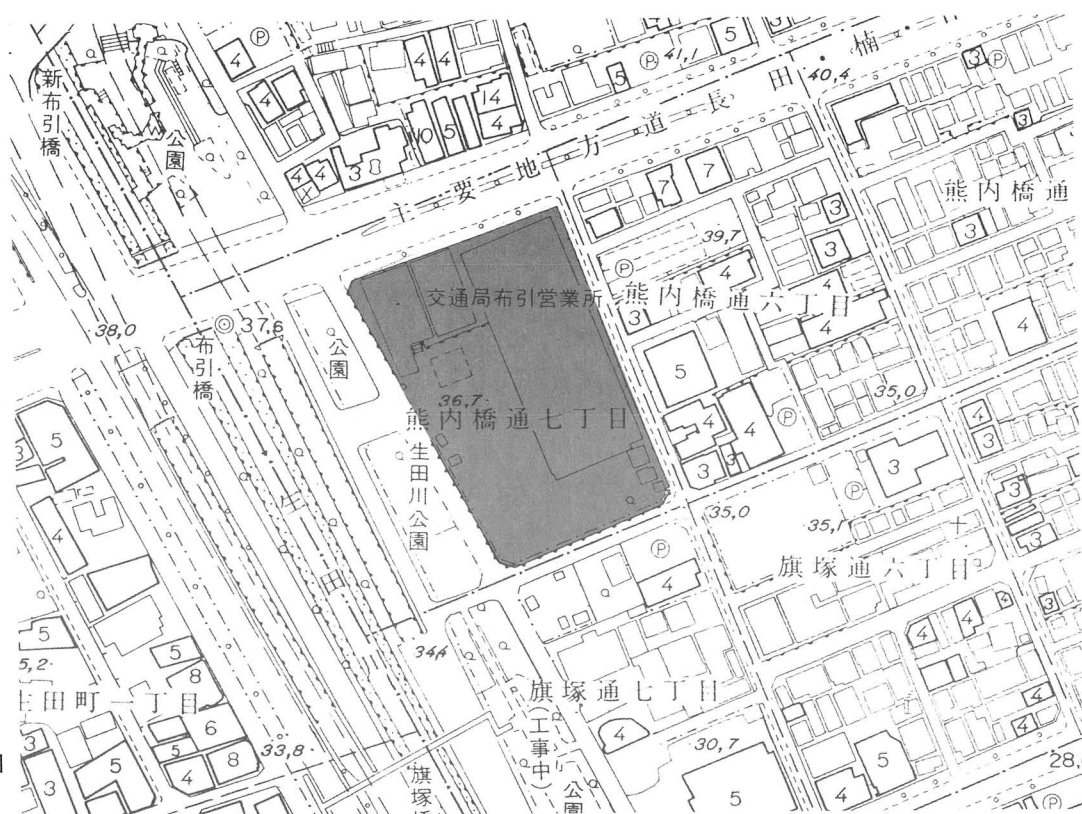


fig.115
調査地位置図
1:2,500

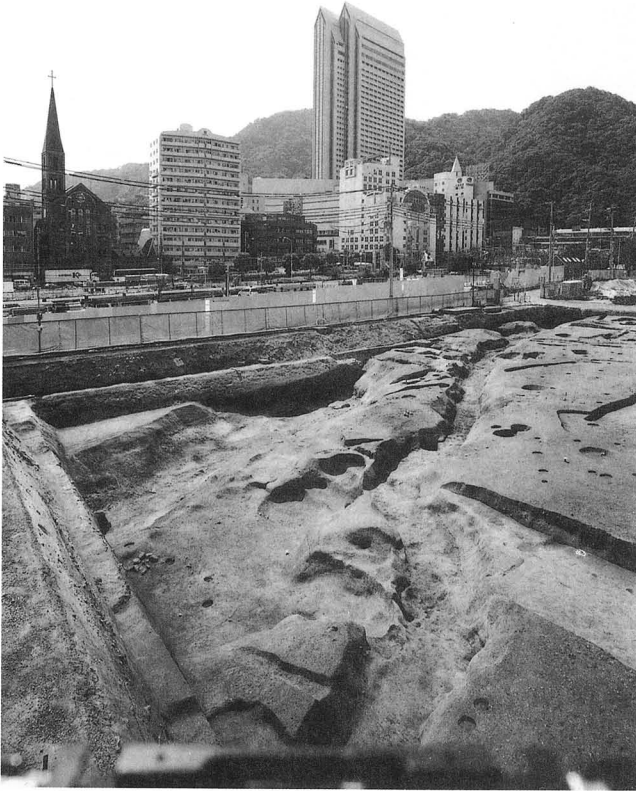


fig.116 第1遺構面全景

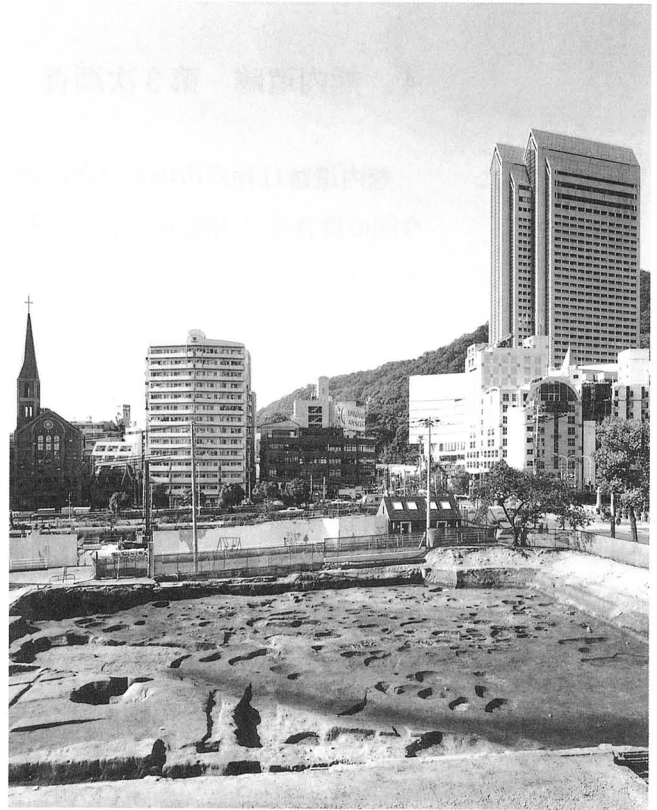


fig.117 第2遺構面全景



fig.118 S D01

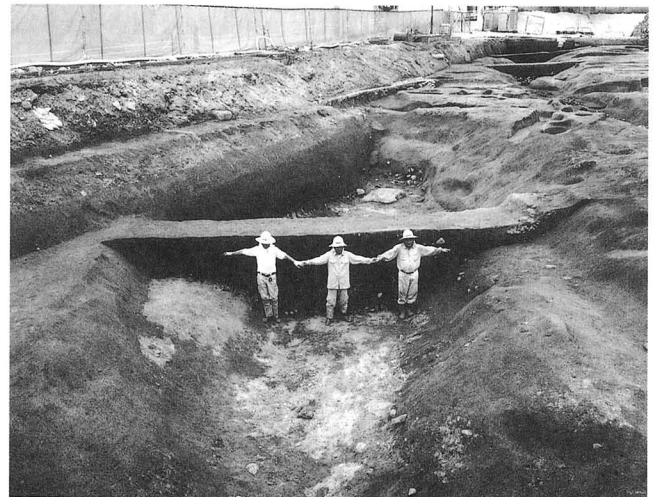


fig.119 S D05

5. 雲井遺跡 第13次調査

1. はじめに

雲井遺跡は六甲山系から南に流出する生田川が形成した扇状地の先端部付近に位置する遺跡である。昭和62年度に再開発ビル建設に伴う試掘調査により、初めてその存在が明らかとなった。同年度に実施された第1次調査では、縄文時代前期の炉、集石遺構、縄文時代早期末～後期の遺物、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構、遺物、弥生時代中期の周溝墓、木棺墓、溝等の遺構、供献土器等の多量の遺物が確認され、大きな成果となった。以来12次にわたる発掘調査が実施され、遺跡全体の様相も次第に明らかになりつつある。

今回の調査は、共同住宅建設に伴い、工事掘削により影響の及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。



fig.120
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要
基本層序

調査区内の基本土層は、盛土及び攪乱土の下層に旧耕土及び旧床土層が数層存在し、その下層が古墳時代の遺物包含層である暗灰色シルト層（8層）である。この下層が遺構面を構成する暗黒褐色シルト（9層）である。この暗黒褐色シルト層は調査地の近隣においては弥生時代の遺物包含層であるが、今回の調査ではわずかな土器片が確認されたのみで、遺構も確認されなかった。

調査地の地形は基本的に北西から南西に緩やかに下る。

検出遺構

溝4条、土坑3基、ピット17基を検出した。

S D03

調査区西半部で検出したやや西に振る南北方向の溝である。中央部は後世の攪乱により消滅している。幅は北側が広く、南へ行く程狭くなっており、最大幅が1.3m、最小幅が0.3mである。深さは北側で検出面から0.44m、南側で同じく0.4mで、断面はU字形である。南側で、TK10型式頃と考えられる、ほぼ完形の須恵器甕が出土した他、須恵器、土師器が出土した。

S D04

調査区西半部で検出した北西から南東方向の溝である。東側は後世の攪乱の影響を大きく受けている。幅は2.6m前後で、深さは中央部で検出面から0.56mである。埋土の状況から溝として機能していた後に、洪水により、細砂が流入したものと考えられ、北側の岸

の底部が抉られた状況から、流れの勢いは激しかったものと推定される。

古墳時代初頭頃のものと考えられる土師器片が比較的まとまって出土したが、多くはローリングを受けており、上方から流入したものと考えられる。

調査区の東半部では2条の溝を検出したが、微細な土師器片が出土したのみであった。

土坑

いずれも、調査区の西半部で検出した。長径0.6~0.9m、短径0.55~0.8mの土坑である。深さは検出面から0.25m前後である。S K01から微細な土師器片が出土した。

ピット

建物を構成するものであるかは確認することはできなかった。出土遺物もなかった。

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代の遺構、遺物が検出された。検出された遺構は西側に多く分布しており、周辺地におけるこれまでの調査成果や、S D04の遺物の出土状況からも今回の調査区の西側に古墳時代の集落の中心が存在するものと推定される。

下層については、周辺地では弥生時代中期の遺物包含層が確認されていたが、今回の調査では、同じ土層が確認されたものの、断割りの結果、わずかに微細な弥生土器片が出土したのみで、遺構も確認されなかった。

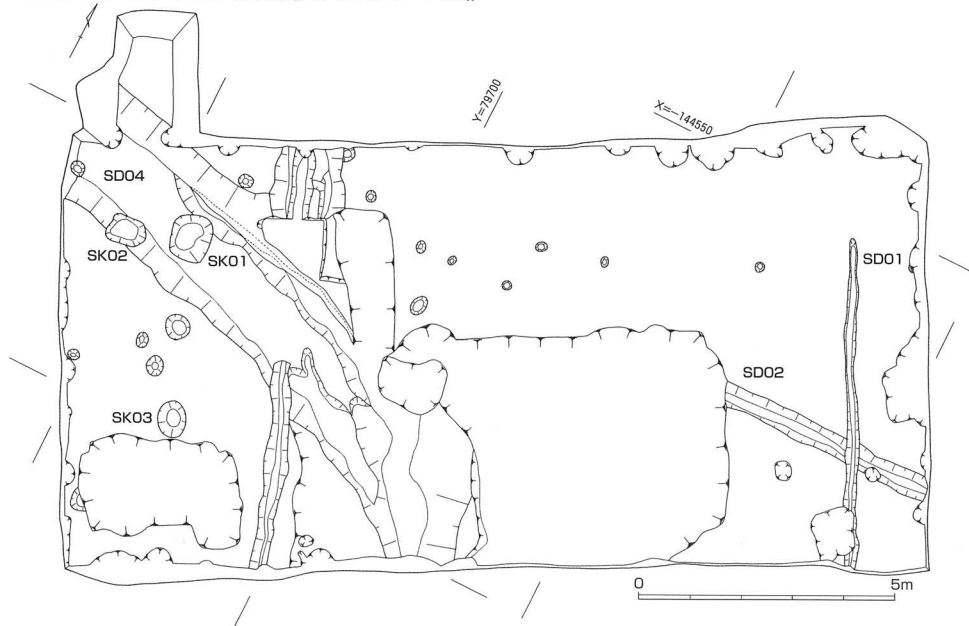


fig.121 遺構平面図



fig.122 調査区全景

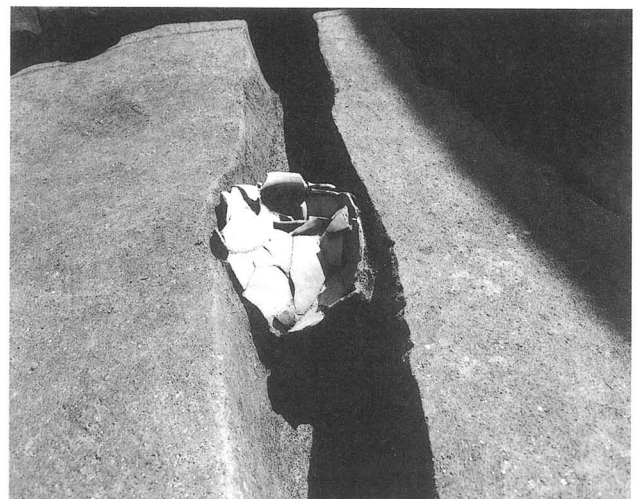


fig.123 S D03

6. 大開遺跡 第9次調査

1. はじめに

大開遺跡は六甲山系西寄を流れる旧湊川右岸の沖積地に立地する遺跡である。現在の地形は、南方海岸線方向へ緩く傾斜する以外はほぼ平坦であるが、集落が営まれていたことから、遺跡一帯は周囲よりわずかに高い微高地であったと思われる。

遺跡は昭和63年の兵庫大開小学校建設に先立つ試掘調査ではじめて発見された遺跡で、以後調査事例を重ね、現在までに計8回の発掘調査が実施されている。これまでの調査で縄文時代後期から晩期・弥生時代前期・中世の遺構・遺物が確認され、大規模な複合遺跡であることが判明している。中でも兵庫大開小学校の第1次調査では弥生時代前期前半の環濠集落のほぼ全体が調査され、六甲山系南麓平野部での弥生時代の開始を物語る遺跡であることが明らかとなっている。また第5・8次調査では第1次調査とは別の環濠と考えられる規模の大きい溝も確認されていた。

今回の調査は共同住宅の新築工事に伴うもので、調査地は第1次調査地の市道を挟んで南隣に位置している。敷地の西側隅約180㎡に関しては従前の建物基礎によって既に遺跡が破壊されていることを試掘調査で確認しており、その部分は調査を実施しなかった。

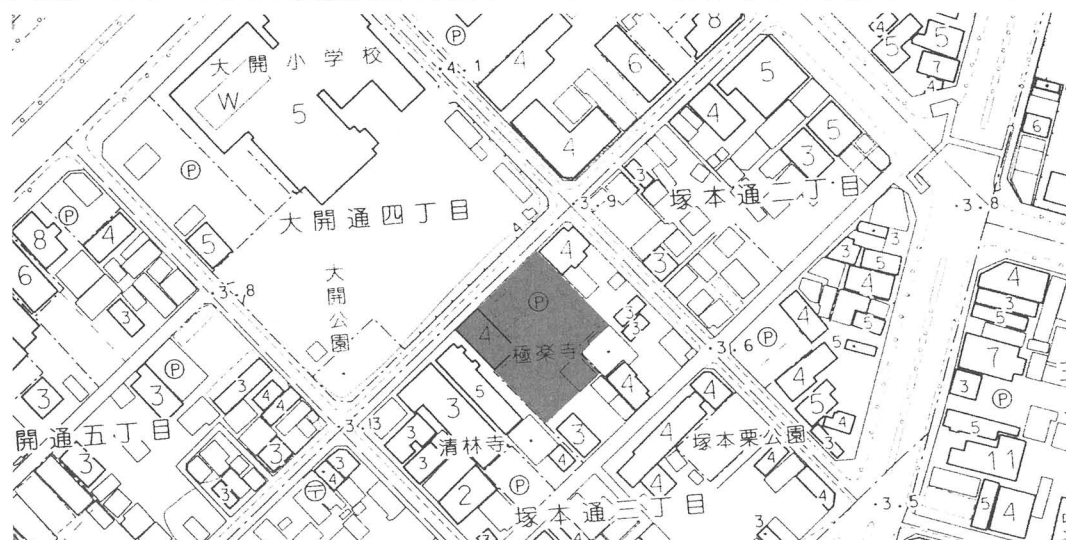


fig.124
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 基本層序

場所によって堆積状況が微妙に異なる部分が存在するものの、基本的には上から順に近現代の整地土、宅地化直前の耕作土、旧耕作土、弥生時代遺物包含層、縄文時代以前の旧河道もしくは湿地状堆積と続く。旧河道の堆積層中には自然堤防状の堆積も含まれている。第1遺構面は弥生時代遺物包含層上層の黄褐色粘質土の上面、第2遺構面は弥生時代遺物包含層下層の暗黄灰色～暗褐色灰色砂質土の上面、第3遺構面は自然堤防状堆積の黄褐色シルトの上面であるが、第2遺構面の遺構は極めて不鮮明であったため、本来の遺構面から約0.2m削り込んで検出した。第1次調査では弥生時代の遺構面の下から縄文時代の旧河道を検出し、多くの縄文土器が出土している。今回数ヶ所を断割して遺物の含有状況を確認したが、縄文土器小片が数点出土したのみであった。堆積層の状態から見て確かに敷地のほぼ全面が縄文時代およびそれ以前の旧河道ではあるが、遺物量が極めて少量であるため、今回調査はこれにとどめた。

第1遺構面 平安時代から鎌倉時代の遺構面で、土坑7基・木棺墓1基・採土坑1基・ピット16基の他、多数の溝群を検出した。

土坑 SK101は、不整な三角形の土坑である。長さ5.4m、幅4.5m、底面は凹凸が極めて著しく、深さは0.5~0.8mで一定していない。埋土は上から順に灰褐色土、灰色砂質土、灰色砂混じりシルト、灰色シルト・灰色砂質土・淡黄緑色微砂が混和したものである。須恵器片・土師器片・瓦器片等鎌倉時代の遺物が出土したが、溝群を切り込むことから本来の時期はさらに新しくなる可能性が高い。ここでは土坑としたが、埋土や底面の凹凸の共通点から見て基盤の灰茶色シルト~粘土と黄茶色シルトを対象とした、採土坑の小規模なもの可能性が高い。

SK102は、隅丸方形の土坑である。長さ0.6m、幅0.5m、深さ約0.15mで、断面は不整な皿状、埋土は暗褐色砂塊混じり暗灰褐色土である。須恵器片・土師器片等鎌倉時代の遺物が出土したが、溝群を切り込む採土坑SX101の上面で検出したことから本来の時期はさらに新しくなる可能性が高い。

SK103は、楕円形の土坑である。長径1.1m、短径0.8m、深さ約0.2mで、断面は椀状、埋土は褐色砂塊混じり灰色土である。須恵器片・土師器片・瓦器片等鎌倉時代の遺物が出土したが、SK102同様に溝群を切り込む採土坑SX101の上面で検出したことから本来の時期はさらに新しくなる可能性が高い。

SK104は、不整な方形の土坑である。長さ1.2m、幅1.0m、深さ約0.55mであるが、内部は徐々に円形になり断面は深い椀状になる。埋土は上から順に黄褐灰色粘質土、淡灰色粘質土、淡灰褐色砂質土、淡褐灰色砂質土であるが、一度掘り直されていて、上2層が掘り直された以降の埋土である。またその上2層には多くの炭化物が含まれていた。遺物は平安時代の須恵器片・土師器片も多く出土した。

SK105は、円形の土坑である。直径0.6m、深さ約0.35mで、断面は最深部が少し偏った深い椀状である。埋土は上から順に淡褐灰色粘質土、淡灰褐色砂質土である。淡褐灰色粘質土には多くの炭化物が含まれていた。平安時代の須恵器片・土師器片が出土した。

SK106は、不整な卵形の土坑である。長径0.7m、短径0.5m、深さ約0.2mで、断面は最深部が少し偏った漏斗状である。埋土は淡褐灰色砂混じりシルトで、鎌倉時代の須恵器片・土師器片・瓦器片が出土した。

SK107は、不整な楕円形の土坑である。

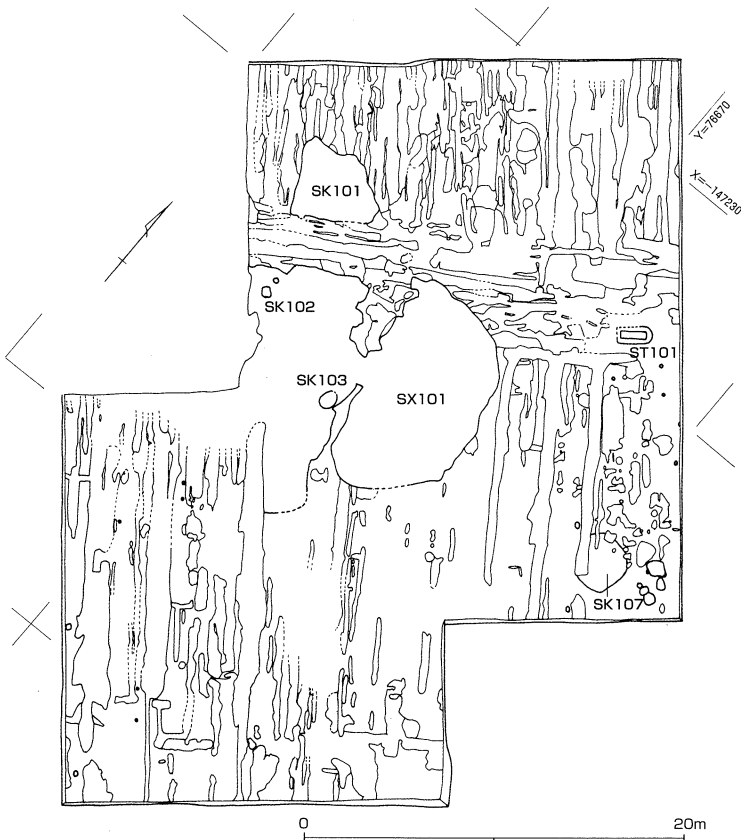


fig.125 第1遺構面平面図

長径3.1m、短径2.6m、深さ約0.95mである。斜面下方に最深部を取り囲む形状でテラスが2段存在する。埋土は上から順に、暗褐灰色粘質土・黄褐色シルト・灰褐色砂質土の混和したもの、暗褐灰色シルト混じり褐色砂、灰色～褐灰色砂混じりシルト、淡褐灰色砂、淡褐色砂である。形状や埋土から水溜として使用されていたと推定される。鎌倉時代の須恵器片・土師器片が出土した。

S T 101 調査区の北東辺で検出した木棺墓である。掘形は片側の隅が丸い長方形で長さ1.8m、幅1.0m、深さ約0.35m、方向はほぼ現在の街割りの方向と一致している。木棺は組み合わせの箱型で長さ1.4m、幅0.4～0.45mであるが、高さは不明である。棺材は底板の多くと側板の下部が遺存していたが、ほとんど完全に腐食する直前であった。小口板は腐食して遺存していなかったが、棺材の遺存状況から側板で底板を挟み込み、両端に小口板を立てる構造であったと考えられる。また断面観察では蓋板の可能性のある木質も確認できたが、面的に検出することはできなかった。底板下の北東側で長さ約30cm、幅約5cmの土色が異なる部分を検出したが、これは横棧の痕跡と考えられる。木棺の大きさから子供と思われるが、人骨は遺存していなかった。

遺物は木棺北東隅で鎌倉時代の須恵器椀1点・土師器小皿3点と鉄釘1点、木棺南西隅で鉄釘1点が出土したが、北東隅の須恵器と土師器は底板に密着していなかったため、遺体もしくは蓋板の上に副葬されたものが転落したものと推定できる。溝群は掘形と切り合わないことと溝群の配置から、周囲が耕地化した際にも墓の存在が伝えられており、耕地内に取り込まなかったと推定できる。

S X 101 調査区のほぼ中央で検出した、巨大な採土坑である。方形と楕円形を繋げたような形状で、調査区外に続くため全体の規模は不明であるが、現状は長さ13.5m以上、幅13.0mである。底面は凹凸が極めて著しく、深さは0.4～0.6mで一定していない。埋土は上から順に褐灰色土、淡黄褐色シルト・暗褐色砂質土・褐灰色土が混和したものである。須恵器片・土師器片・瓦器片等鎌倉時代の遺物が出土したが、溝群を切り込むことから本来の時期はさらに新しくなる可能性が高い。あまり精良な粘土ではないが、基盤の淡黄褐色シルトを採土したと考えられ、さらに下層の淡黄緑色微砂になると掘削を止めている。肩も基盤が淡黄褐色シルトの部分は抉るように掘削し、砂質が強くなると掘削を止めている。



fig.126 S T 101

ピット ピットは直径あるいは長径0.1～0.35m、深さ0.05～0.2mの規模である。いずれも散在して検出されており、掘立柱建物を構成するにはまとまらなかった。遺物はそれぞれのピットから土師器片・弥生土器片が少量ずつ出土したがいずれも量は乏しく、出土しなかったピットも存在した。かつてはもっと多くのピットが存在していたであろうが、溝群で消滅したものも多かったと思われる。

溝群 調査区のはほぼ全面で検出した溝群で、方向はわずかにずれるが概ね現在の街割り方向と一致している。調査区北西寄の部分で方向を90° 変える部分がある。幅約0.2m、深さ0.2m前後のものが多いが、中には幅1.0m、深さ0.5mを超えるものもある。分布密度は基盤が粘土質の部分には多く、砂質の部分には少ない傾向にある。須恵器片・土師器片・瓦器片等鎌倉時代の遺物が出土したが、本来の時期はもう少し新しくなると思われる。このような溝群は通常幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.15mのものも多く、耕作の際に犁で掘り込まれたものと考えられている。だが検出したものは幅や深さに通常の規模を遙かに超えるもので、同様の溝群を検出した第1次調査でも耕作溝とは断定していない。しかし今回は街割り方向と一致しながらも方向を90° 変える部分が直線的に続くこと、幅・深さの規模が大きいものが約2.0mの間隔で平行する部分があること、農耕作業に伴うものと考えられている牛の足跡も検出していることから、耕作に関係して掘削されたものと考えられる。方向を90° 変える部分は畦畔が存在していたものと推定できる。

第2遺構面 弥生時代前期の遺構面で、集落の環濠2条の他、ピットを2基検出した。

S D 201 調査区のはほぼ中央で検出した二重環濠の外濠である。南東半分は直線的に伸び、そこから北側は大きく東へ曲がっている。北東約100mで実施された第10次調査でも延長部分を検出している。幅2.8～3.9m、深さ約1.0m、断面は台形で底面は比較的平坦である。埋土は大別すると上半が洪水による褐色系の砂と灰黄色系の微砂、下半が徐々に堆積した粘質土で、中には一時の水の淀みを物語る粘土も存在した。遺物は弥生土器が多く出土したが、上半の洪水層からは出土量が少なかった。

S D 202 調査区の北東寄、外濠の内側6.0～8.0mの間隔でほぼ平行して検出した二重環濠の内濠である。外濠同様に南東半分は直線的に伸び、そこから北側は大きく東へ曲がっている。

やはり第10次調査でも延長部分を検出している。幅1.7～2.4m、深さ約1.0m、断面は台形で底面は比較的平坦である点も外濠と共通するが、外濠より少し幅が狭い。埋土は徐々に堆積した粘質土で、一時の水の淀みを物語る粘土も存在したが、外濠上半のような洪水層は存在しなかった。遺物は弥生土器が多く出土したが、外濠よりも出土量は多く、完形に近いものもあった。

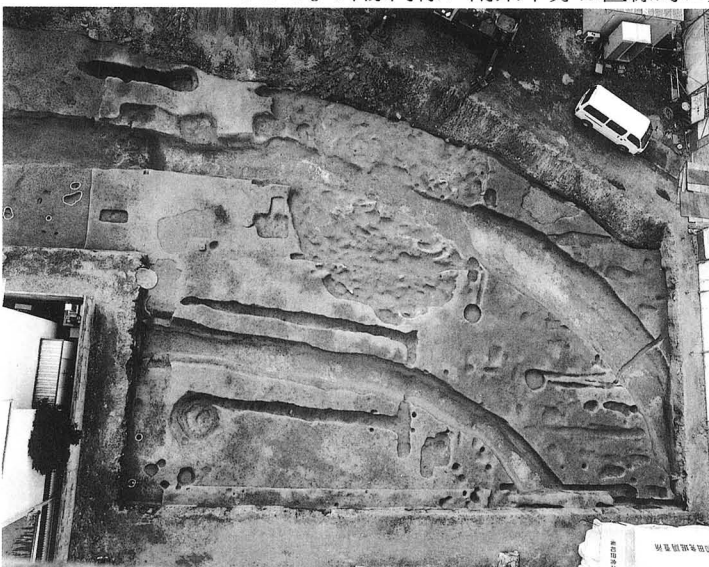


fig.127 第2遺構面全景

第3遺構面 弥生時代前期から縄文時代晩期の遺構面で、土坑4基、ピット19基を検出したが、遺構は調査区の北隅と南寄のみで検出した。これらの他、浅い自然流路1条を検出した。

S K 301 調査区の南寄で検出した、不整な方形の土坑である。長さ0.7m、幅0.6m、深さ約0.15m、断面は深い皿状であるが、底面には3ヶ所5～10cm窪む部分がある。埋土は褐灰色砂質土で、遺物は出土しなかった。

S K 302 調査区の南東辺で検出した、長円形の土坑である。長径0.9m、短径0.3m、深さ約0.15mであるが南端は少し膨らみ、深さも少し深くなる。断面は椀状、埋土は暗黄灰色砂混じりシルトである。遺物は出土しなかった。

S K 303 調査区の南東寄で検出した、不整な楕円形の土坑である。長径0.9m、短径0.5m、深さ約0.1mで、断面は底が少し偏った浅い椀状である。遺物は出土しなかった。

S K 304 調査区の北隅で検出した、不整な楕円形の土坑である。調査区外に続くため規模は不明であるが、現状で長さ2.4m以上、幅1.6m以上、深さ約0.4mである。肩からほぼ垂直に掘り込まれた後急になだらかとなり、平坦な底面に移行する。埋土は上が灰褐色シルトに淡黄褐色シルトが混和したもの、下が暗灰色粘質土に淡黄色シルトが大量に混和したものである。遺物は出土しなかった。

自然流路 調査区の中央南寄を貫いて北東から南西に方向に流れる浅い自然流路である。調査区外に続くため長さは不明であるが、現状で34.4m以上、幅は攪乱や上層の遺構で破壊されている部分が多く、唯一計測できる部分では8.6mである。深さは0.6mで、埋土は褐色系の砂である。縄文土器の微細片やサヌカイト片が極少量出土したのみであった。

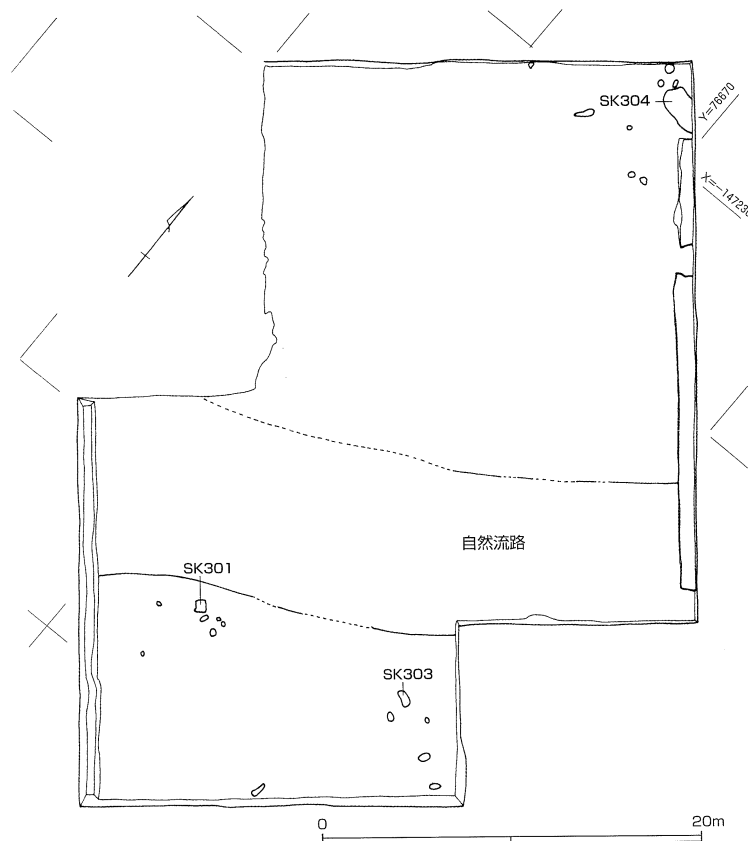


fig.128 第3遺構面平面図

3. まとめ

大開遺跡はこれまでの調査によって縄文時代・弥生時代・平安時代・鎌倉時代の遺構面を持つ複合遺跡であることが解明されているが、特に第1次調査で弥生時代前期前半の環濠集落のほぼ全体を調査することができたことで著名である。今回の発掘調査は当初南西隣接地で実施された第2次調査の結果からあまり弥生時代の遺構はなく、第1次調査で確認した縄文時代の旧河道が続いているものと思われていた。しかし調査の結果第1次調査とは別の環濠集落の存在を確定した一方、確かに縄文時代以前の旧河道を確認したもののほとんど遺物が含まれていない状況であることが明らかとなった。

今回の調査では平安時代と鎌倉時代の遺構面は同一面化して検出されたが、多くの溝群や巨大な採土坑のために遺構が消滅してしまったものも多いと考えられる。そのような中でも平安時代の土坑と鎌倉時代の木棺墓を検出したことは注目される。今回掘立柱建物は確認できなかったが、土坑は調査区の東隅、木棺墓は調査区の北東辺で検出したため、同じ時期の掘立柱建物はさらに東方に存在するものと考えられる。また木棺墓は後に周辺が耕地化した際にもその存在が伝えられていたようで、意識的に耕地から避けられていることが判明した。

第5・8次調査の成果によって第1次調査で確認したものは別の環濠集落の存在が推定されていたが、今回の調査とほぼ同じ時期に実施された第10次調査によってその存在が明らかとなった。検出した二重の環濠は第10次調査の環濠に繋がり、さらに内濠は第5次に繋がっていく。環濠の南東側の状況が明らかではないが、仮に円形に回っていったとすると内濠内側は直径約120mになる。この第2の環濠集落の時期は遺構面の下からまだ弥生土器が出土することや出土遺物の様相から見て弥生時代前期の後半頃と考えられ、居住していた集団が同じであった場合、第1次調査での環濠集落を拡張せず新たな環濠集落を営んだことになる。この時に第8次調査で確認された環濠の評価であるが、外濠以西には第2次調査地点をも含めて弥生時代の遺構は確認されていない。従って全周するものとは考えられないため、現時点ではこれは環濠集落の張り出し部分か、もしくはこの部分にのみさらに別の環濠が掘られていたかのどちらかと判断される。また第2の環濠集落の規模がほぼ確定したことによって遺跡の範囲も大きくなっていく。現在遺跡の範囲は今回の調査地点を含む街区南東辺までであるが、環濠の方向から見て調査区外で直ちに東方へ曲がっていくとは考え難い。従って集落はまだ南東に続くと推定され、同時に遺跡の範囲も南東方向に拡大するものと考えられる。

今回は環濠以外にはピットを2基検出したのみであるが、検出面までの深さが浅いため遺構は削平されて消滅した可能性もある。ただし集落外になるが南西隣での第2次調査でも弥生時代の遺構は確認されていないことから、本来遺構密度が低かったものとも考えられる。このことは今後集落内である東側隣接地一帯での調査成果を待って集落内の土地利用の方法が明らかとなる。

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構面で検出した遺構は少ない。しかしこの面が第1次調査の環濠集落と同じ時期の遺構面に相当しよう。集落外部の南方低地部になるが、水田のような土壌は確認されなかった。従って調査地点は縄文時代以前の埋没旧河道上ではあるが当時の水田はもっと別の場所に営まれていた公算が高い。

7. 兵庫津遺跡 第24次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区の海岸部に位置する古代から近世にかけての複合遺跡である。これまでの調査で中世後半から近世にかけての町屋の様子が明らかになってきている。なお、今回の調査地は平成10年度に実施された第15次調査地の道路を挟んですぐ北に立地しており、『元禄兵庫津絵図』（元禄9年）では宮内町にあたる。

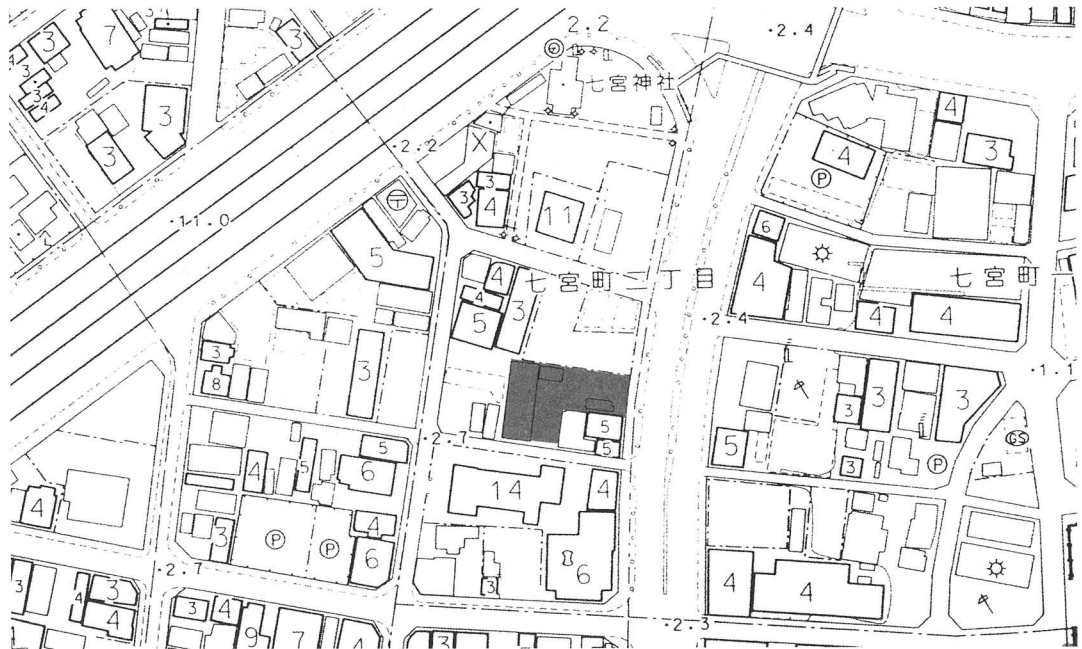


fig.129
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

建設予定の建物面積は約800㎡程度あるが、既存の建物の基礎等によりその大部分が攪乱となっていたため、実際の調査面積は約250㎡である。調査区は北と南に分断されるような形状をしており、便宜上北側の調査区をI区、南側の調査区をII区と呼ぶ。

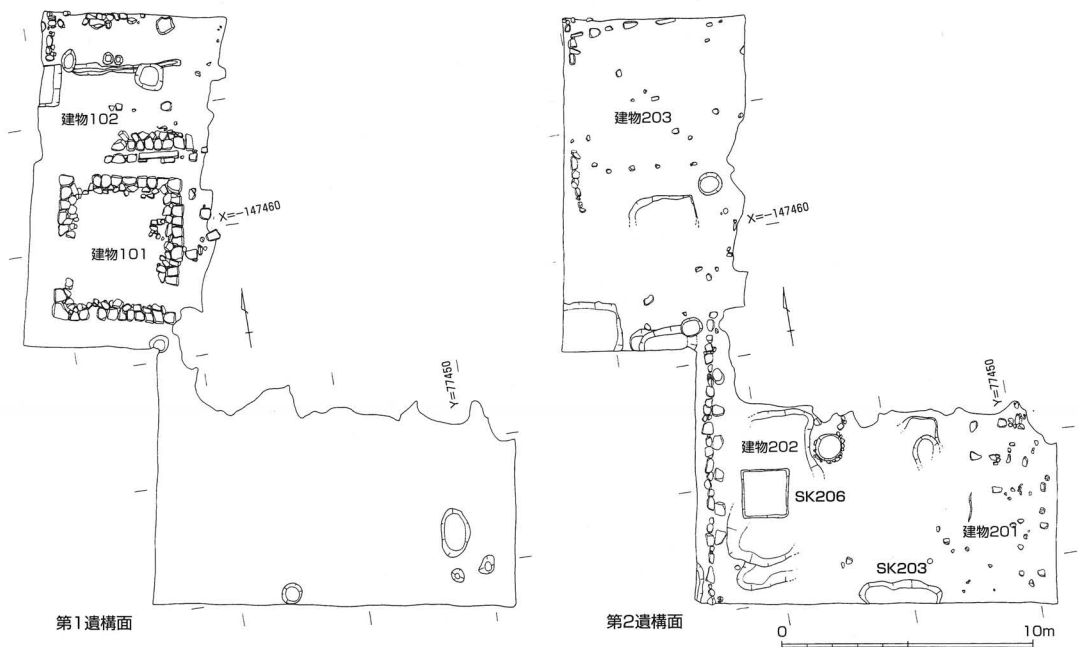


fig.130 遺構平面図

基本層序 第1遺構面はT.P.2.0m付近で検出され、以下、焼土層・粗砂層を間層として第6遺構面（T.P.1.0m前後）まで全面調査を実施した。第7遺構面以降については工事影響深度の関係上、トレンチによる調査を行っている。T.P.0.0m付近の黄色粗砂層上面を最終の遺構面とし、以下の層には遺物は含まれなかった。また、黄色粗砂層は潮の干満の影響か、時間によって水量の変化する湧水が確認された。

第1遺構面 II区は上層の攪乱の影響をうけていたため、遺構面全体が削平されており、焼土面の上層で土坑が数基確認できただけに留まる。I区は蔵と考えられる切石をもつ石組の建物が2棟確認できた。時期は幕末頃と考えられる。陶磁器、鉄・銅製品、銭貨（鉄銭を含む）などが出土している。

建物101 蔵と考えられるこの建物は、東西5.0m、南北6.0m、約0.3~0.5mの切石の花崗岩を四周に巡らし、裏込めにはやや小さい石を使用している。切石の上面には黄白色粘土が帯状に見られたことから、漆喰壁を石の上から直接立ち上げていたと考えられる。

建物102 I区北側で検出したこの建物は南北5.0mを測り、建物の南半に土間を備えている。土間からは胞衣壺が1個体出土している。建物101・102の石列の境は、幾層にも重なる固い盛土からなる路地状になっている。

第2遺構面 第2遺構面は焼土面を除去した段階で確認できた遺構面である。この焼土層は第15次調査でも確認されている「宝永の大火（1708年）」と考えられる。I区では焼土層が確認されていないが、上層の建物等により削平されているものと考えられる。この遺構面の土坑のほとんどは埋土に焼土を含んでいる。少なくとも3棟の建物が確認できる。陶磁器、土師器、鉄・銅製品、銭貨などが出土している。

建物201 II区東端で検出したこの建物は、東西3.0m以上、南北10m以上を測る。約0.2m程度の焼土層がこの建物の上面に厚く堆積しており、この層を除去中には屋根材を押さえていたと考えられる石が多数出土している。いずれも被熱した状態であった。床面からは壁材や屋根材と考えられる木片や桶状の木製品が炭化した状態で検出している。また、建物の礎石と考えられる石も被熱した状態であった。

建物202 II区西端で検出したこの建物は南北12m以上を測り、約0.6m程度のやや大きい礎石列とその西側に雨落ち溝状に並ぶ石列から成る。攪乱により東西方向の石列が検出できていないため、建物の規模は不明である。建物内には建物より新しい焼土坑・土坑が4基存在しており、建物に伴うと考えられる土坑にはS K 206があげられる。この土坑は上層を欠

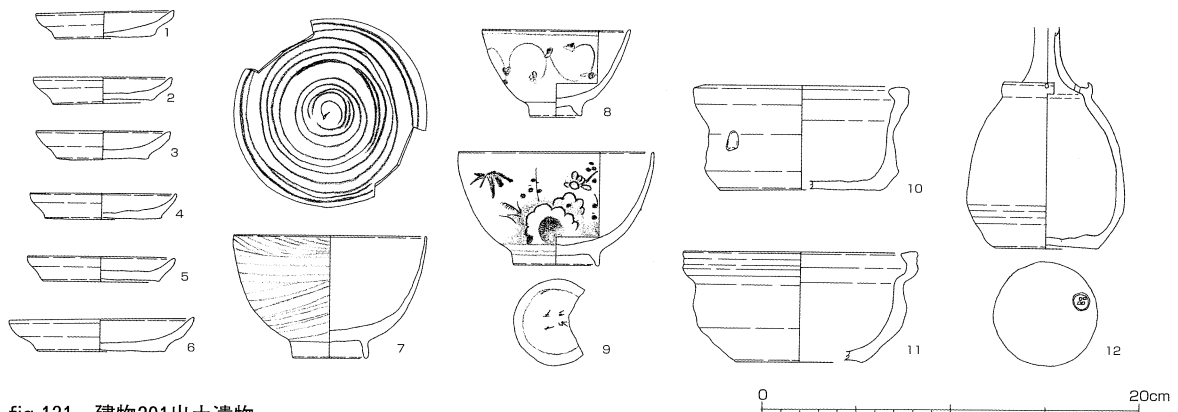


fig.131 建物201出土遺物
(1~6:土師器 7・10~12:陶器 8・9:磁器)

損しているが、木製桁形穴蔵の地下室遺構と考えられる。隅柱は炭化しており、底面には薄い板材を敷いている。

建物203 I区北側で検出したこの建物は、一辺5.5m南半に土間を備え、建物の西側には約0.5m程度の石を使用した石列がみられる。

S K 203 II区南辺で検出したこの土坑は、埋土に焼土を含み小型の管状土錘が大量に出土している。漁網が焼失したものと考えられる。

第3遺構面 第3遺構面は、第2遺構面の直下ではほぼ同規模の礎石の配置を示す町屋が検出され、I区の西辺では道路状遺構と考えられる石列が確認できた。建物の土間は、I区は東西方向、II区は南北方向に備えており、I区の建物は西方形状を呈し、II区は長方形状を呈している。建物は少なくとも4棟確認できる。陶磁器、土師器、鉄・銅製品、銭貨などが出土している。

建物301 I区中央で検出したこの建物は、南半に土間を備え、カマドを有する。カマドは規模が小さく、焼土・炭はほとんど含まれていないことから、未使用と考えられる。この建物の北側礎石列は溝状の掘形が認められ、溝内からは、土師器・陶磁器等がまとまって出土している。陶磁器の高台に「宣明年製」と書かれた碗が出土していることから、この建物の時期は17世紀中頃から後半と考えられる。

なお、西側の道路状石列の張り出しが一箇所しか確認できないことや、I区北側には土間が検出されていないことから、建物301・306は1軒であった可能性が考えられる。

建物304 II区西側で検出したこの建物は、東西5.0mを測り、東半に土間を備えカマドをもつ。カマドは4連から成るが、造り替えた形跡が確認できる。土間からは胞衣壺が2個体出土している。

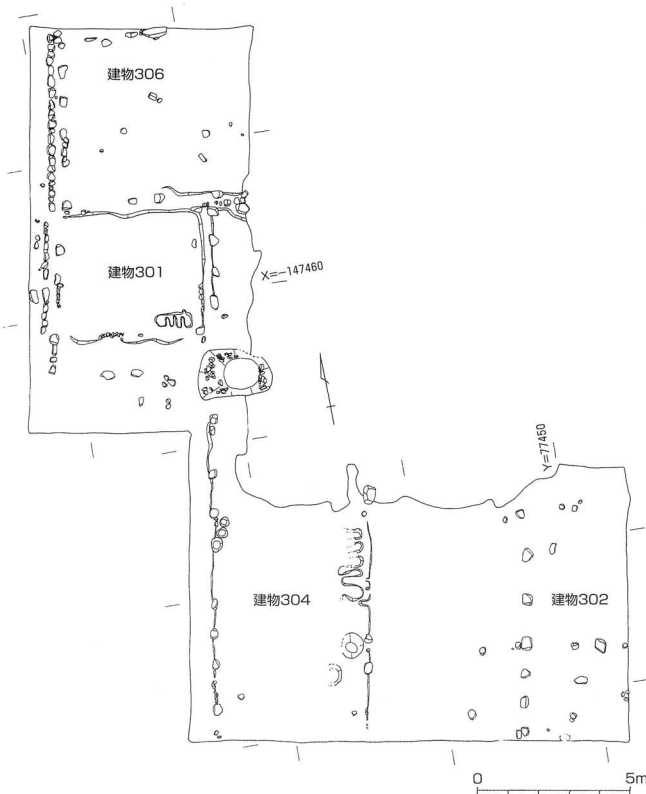


fig.132 第3遺構面平面図



fig.133 第4遺構面全景

第4遺構面 第4遺構面は、第3遺構面のベースである約0.4m程度の黄色粗砂・黄色粘土層を除去した後の遺構面である。第3遺構面と比べて遺存状況が悪い。少なくとも5棟の建物が確認できる。陶磁器、土師器、鉄・銅製品、銭貨などが出土している。

建物401 上層の建物とほぼ同規模・同方向で検出できたこの建物は、土間が一部突出している。また、土間と居室部の境には礎石とともに、壁土が検出された。

建物の北側に東西方向の石列が確認されていることから、建物の奥行がやや縮小していると考えられる。土間からは胞衣壺が1個体出土している。

建物405 I区で検出したこの建物は、北辺礎石列の北側に雨落ち溝状に石を配列している。建物は東西5.0m、南北4.0mを測る。土間は建物の南半に備える。

第5遺構面 I区では建物以外の場所が確認でき、建物の形状も上層と異なる傾向がみられた。II区においては北側に東西方向の礎石列が確認でき、建物の奥行が縮小していると考えられる。また、遺物には唐津皿（砂目・胎土目）が出土していることから、17世紀初頭頃の遺構面と考えられる。陶磁器、土師器、鉄・銅製品、銭貨などが出土している。

建物502 東西4.5m、南北7.0m以上を測るこの建物は、東半に土間を備え、3連のカマドをもつ。建物の北側は礎石と比較してやや小さい石列が確認できた。建物501との境の壁土は明瞭に残存しており、部分的には二重に確認された。壁付近からは地鎮と考えられる完形の土師皿が3枚出土している。建物内からは合計7個体の胞衣壺が出土している。

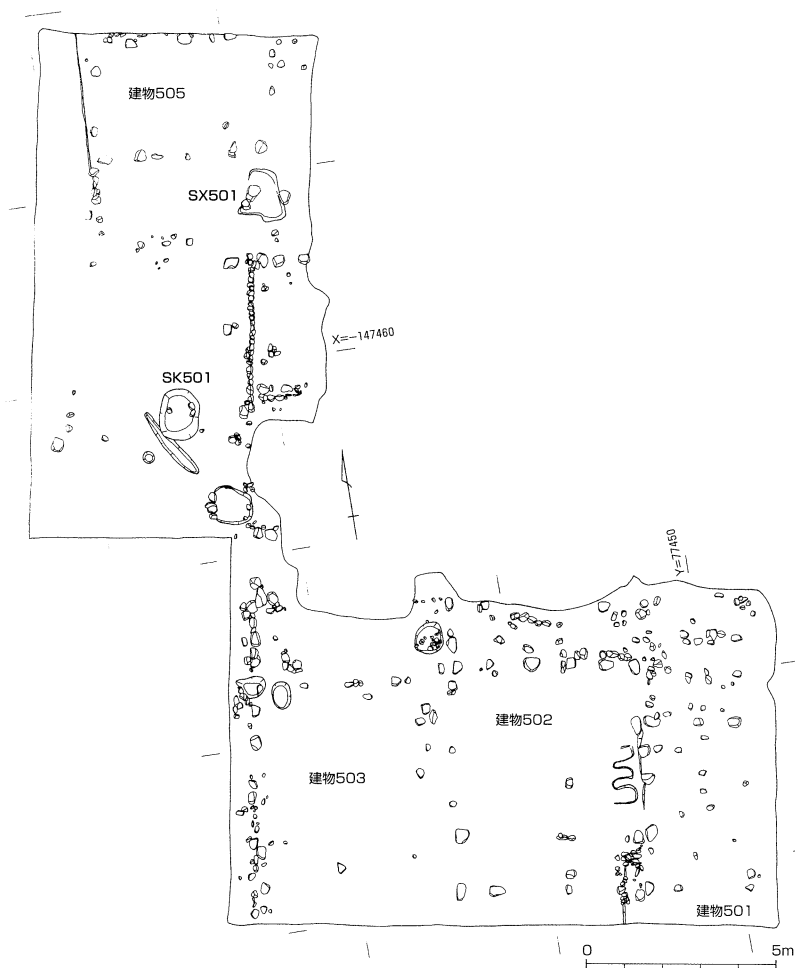


fig.134 第5遺構面平面図

建物505 南北5.5mを測るこの建物は、L字状に土間を備えていると考えられる。土間の南東には土間を形成する際の集石・唐津皿埋納遺構（S X501）がみられる。東辺の土間からは朶衣壺が3個体出土している。また、建物505の南には南北方向に石列が検出され、石列の東側には礎石が確認できることから、攪乱側に広がる建物が1棟存在したと考えられる。

S K501 長径1.3m、深さ0.5mを測る。唐津皿が5枚ほぼ完形の状態で出土している（砂目4枚、胎土目1枚）。

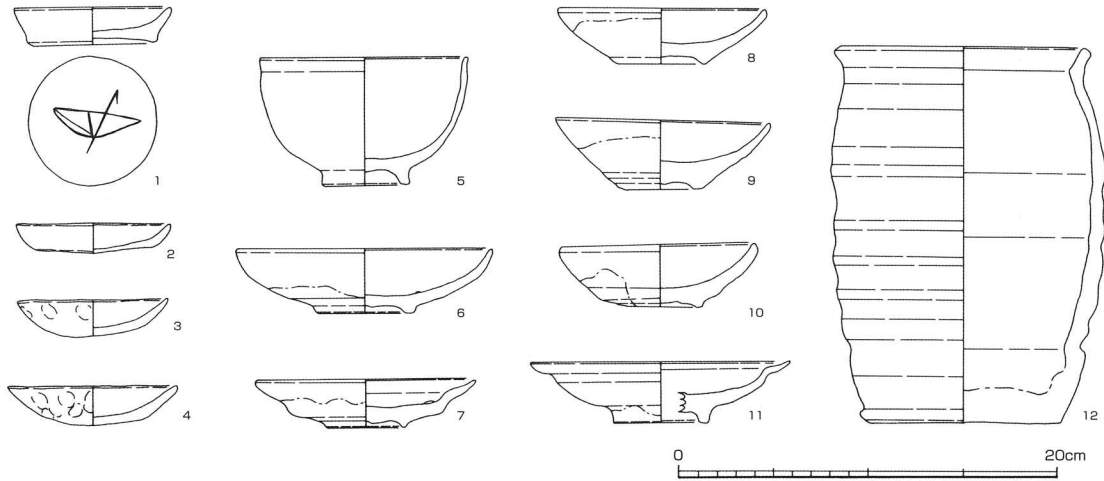


fig.135 第5遺構面出土遺物
(1~4:土師器 5~10:陶器 11:磁器)

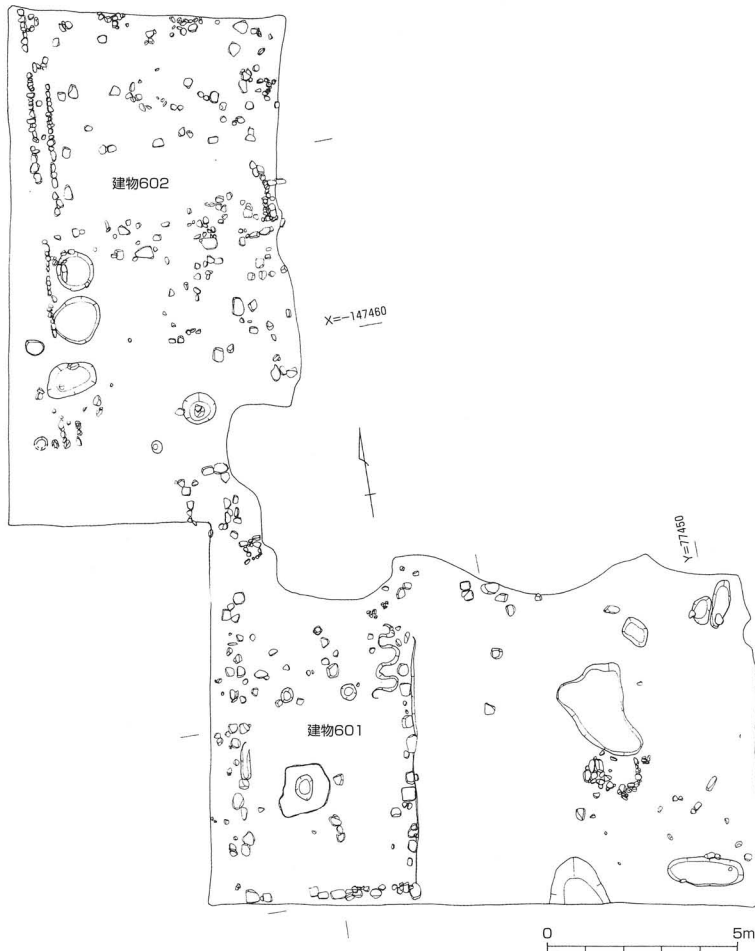


fig.136 第6遺構面平面図

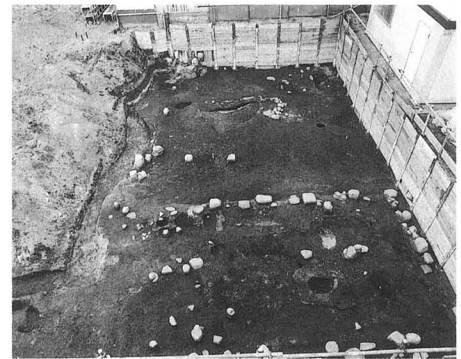


fig.137 第6遺構面全景

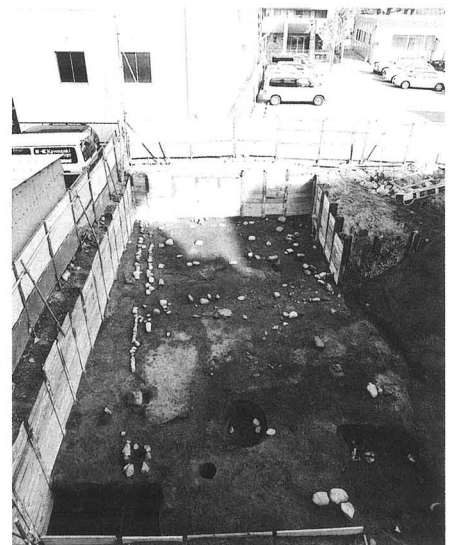


fig.138 第6遺構面全景

第6遺構面 第6遺構面は、I区上層とII区との比高差が約0.2mで、I区では上層と下層に遺構面が存在する形で調査を実施した。したがってI区の下層がII区の第6面と同レベルである。

また、II区の東半には礎石が見られず、遺構面のベース土には玉石のような石を含み、黄色粗砂だけを埋土にもつ遺構がみられたことから、東半は整地した層である可能性が考えられる。土師器、鉄・銅製品などが出土している。

建物601 II区の西側で検出したこの建物は東西4.5m、南北8.0mを測る。建物の東半にカマドを備え、炉状の遺構を中央で検出した。炉の埋土には炭が充填されており、土錘・銭貨が出土している。礎石からは二時期の建物が考えられるが、上層建物の礎石の方がやや大きい石を使用している。また、礎石には宝塔の笠部を転用しているものがあつた。建物の南辺に東西方向の石列を確認できたのはI区ではこの建物だけである。

建物602 I区北半に位置するこの建物は一辺5.0mを測り、1間分の土間を南辺に備え、2間分の居室部をもつ。建物の西側には側溝状に2列の石列がならぶことから、道路に面していると考えられる。

第7遺構面 第7遺構面を含む以下の層は影響深度の関係上、トレンチ調査を実施している。第7遺構面は灰茶色砂質土の上面で検出され、土坑・石列等がみられたが、掘削範囲が狭いため礎石建物の規模が判明するものはなかつた。中世後半頃の土師器、須恵器等が出土している。

第8遺構面 第8遺構面は淡灰色シルトの上面で土坑・溝等が検出された。時期は中世後半頃と考えられる。

第9遺構面 第9遺構面は黄色粗砂の上面で検出された。T.P.0.0m付近に達するため湧水が激しく、II区については遺構も確認されていない。黄色粗砂を除去中に遺物は若干含まれるものの、以下の層に遺構・遺物は確認されていない。

3. まとめ 今回の調査は、従前の建物による損壊のため、敷地面積からすると調査面積は少ないものであつたが、中世後半から幕末までの合計9面もの遺構面を検出することができた。中世の遺構面はトレンチ調査であつたため、掘立柱建物の可能性も含めて、建物の規模等は明らかにできなかつたが、中世後半以降連綿と続く近世町屋の様子が一部明らかになつた。

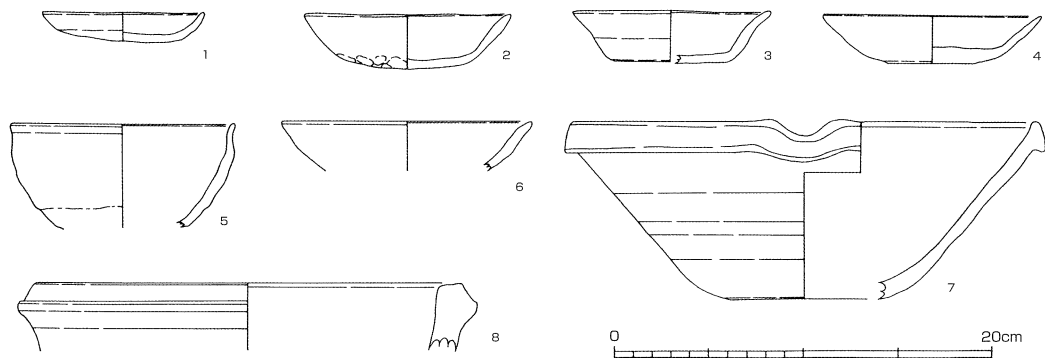


fig.139 第9遺構面出土遺物
(1~3:土師器 4・7:須恵器 5・6:陶器 8:石埴)

8. オキダ古墳群 第2次調査

1. はじめに

オキダ古墳群は、六甲山系北麓を流れる有野川右岸の段丘上に位置する。当古墳群は、昭和58年の圃場整備事業によって、調査地の北西約40mに位置するオキダ古墳周辺で、墳丘を削平され、床面が残存した横穴式石室（オキダ2号墳）が発見・発掘調査されたことによって明らかになった。周辺には、まだ他に複数の古墳が存在するようである。今回の調査地は、道場八多地区の区画整理事業の進捗に伴い、当該施工区域から神戸・三田線にアクセスする道路（道場南線）の接続部分にあたる。

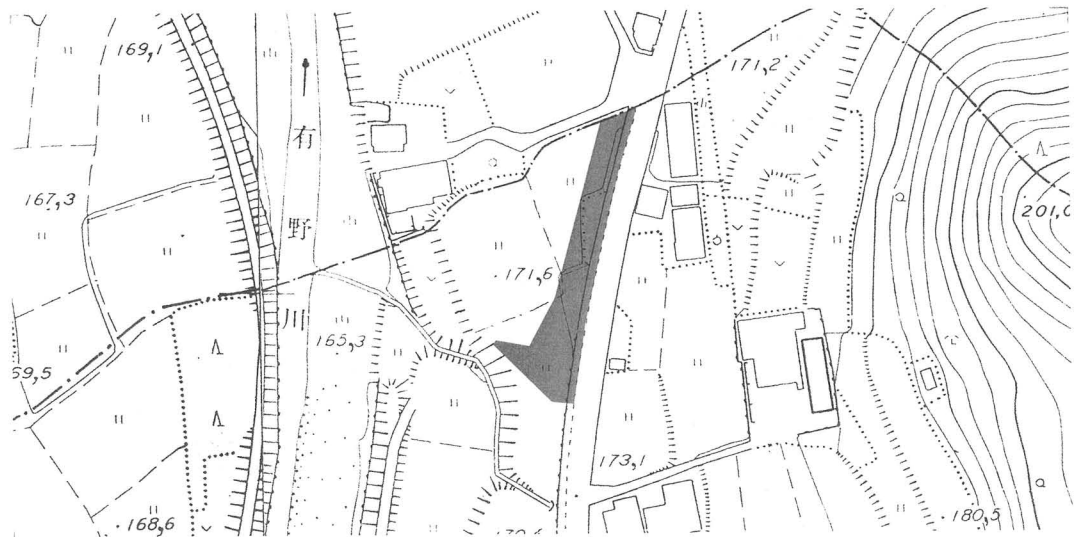


fig.140
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

現況水田の区画形状に合わせて、北から1～4区の地区割りを行った。

1・2区

掘立柱建物、溝、ピット、自然流路を確認した。

基本層序

①黒色粘質土（耕作土）②茶褐色砂質シルト（床土）③黄褐色混じり灰褐色砂質シルト④灰褐色砂質シルト（古墳～鎌倉時代の土器を含む）⑤黄灰褐色砂質シルト（遺構検出面）
北半分では灰褐色砂質シルトが厚いが、南半分ではほとんど見られないところもある。

S B02

梁行2間（3.8m）、桁行2間（3.8m）以上の円形または隅円方形の柱掘形を持つ側柱建物であるが、西側が調査範囲外であるため精確な建物規模は不明である。柱間の距離は梁行・桁行方向共に1.8～2.0mである。建物方位は、N86°～87°Wである。この建物の周囲を取り囲むように、3本単位で柱穴が巡っている。その間は2.0～2.7mの間隔が開いている。その状況から建物を塀または柵が取り囲み、しかも出入りをするための開口部が3個所以上あったという構造が窺える。柱掘形からは遺物が出土しなかったため、建物の精確な年代は不明であるが、およそ古墳～奈良時代の時期に納まるものと思われる。

S D02

検出長約16m、幅約1.0m、深さ約0.25mの溝で、須恵器・土師器の破片が出土した。

S D03

S D02の北端と交わり、北東方向に延びて北東隅のU字形に蛇行する自然流路に接する溝である。遺物は出土しなかった。

礫敷

S D03の北側には拳大の小礫を薄く敷いた個所があった。当初、横穴式石室の床面と考えて精査にあたったが、周辺から出土する土器がすべて平安時代以降のものであること、石室の石材を据える掘形が見当たらないことなどから、石室床面でないと判断した。

3～5区

掘立柱建物、柵列、溝、土坑、ピットを確認した。

基本層序

①黒色粘質土（耕作土）②茶褐色砂質シルト（床土）③灰褐色砂質シルト（古墳～鎌倉時代の土器を含む）④黄灰褐色砂質シルト（遺構検出面）遺物包含層である灰褐色砂質シルトは3区のみが存在する。

S B01

梁行2間（4.7m）、桁行2間（6.6m）以上の、円形の柱掘形を持つ総柱建物であるが、東側が調査範囲外であるため正確な建物規模は不明である。柱間の距離は梁行方向が2.3～2.4mであるのに対して、桁行方向2.0～2.4mと不揃いである。建物方位は、N17° Wである。柱穴の一つから土師器の小皿が出土した。

S A01

S B01の北側に位置する。柵列としたが、柱列の方向がS B01と一致するため、柱間が3.0mと広いことを可とすれば、掘立柱建物の一部と考えることも可能であろう。

S D01

検出長約22m、幅約1.0m、深さ約0.2～0.3mの溝で、南北方向に流れる。堆積土の下層はシルト、上層は細砂となっている。上層には拳～人頭大の礫が投棄されている個所があった。また、上層からは平安時代末期の土器が出土している。

S K01

2.3m×1.6mの隅円方形を呈する土坑である。深さは0.15mほどで北半分に拳～人頭大の礫を投入してあった。須恵器・土師器の小片が出土した。

3. まとめ

今回の調査では、古墳～平安時代の掘立柱建物、ピット、溝、土坑等を検出した。特に注目されるのは、2間×2間以上の側柱建物を取り囲むように、扉または柵で囲み、出入口を3個所以上設けている遺構（S B02）である。調査区外に延びているため、全容は明らかでないが、特殊な用途に用いられた建物の可能性がある。調査地の北西約40mにはオキダ古墳他数基が存在していることを勘案すれば、喪屋（もがりや）等の葬送儀礼に係わる建物という見方もできる。また、2区の遺物包含層から、6世紀後半の須恵器が2個体、ほぼ完形で出土したことは、古墳周辺で葬送儀礼が行われたことを示唆するものといえよう。

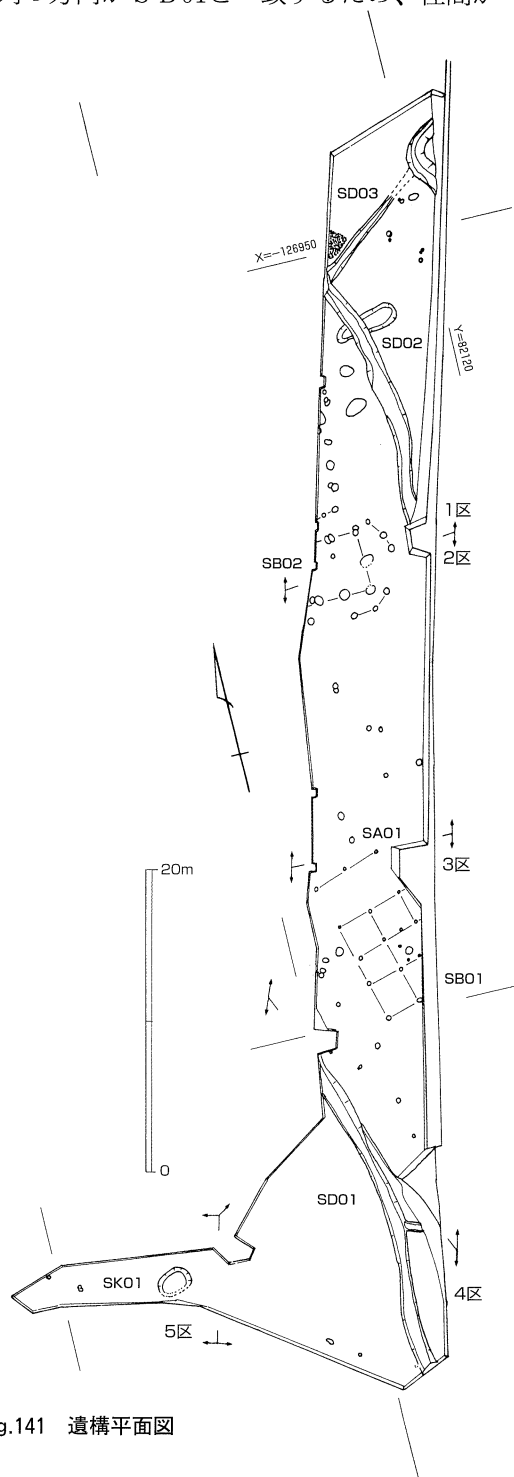


fig.141 遺構平面図

9. 五番町遺跡 第11次調査

1. はじめに

五番町遺跡は六甲山系西寄に源を発し、長田神社の北方から平野部へ流れ出る苅藻川が形成した扇状地扇央付近に立地する遺跡である。湊川の付け替えに伴って開削された新湊川はほぼ直線的に南西流した後に苅藻川と合流し、苅藻川の流路を踏襲して海に流れ込むが、五番町遺跡の西側を流れる新湊川は苅藻川の流路を踏襲した部分であるため、現在の地形は近代以降に改変されたものではなく、概ね自然地形を留めていると考えられる。調査地点周辺の微地形を見ると、西から東へと徐々に低くなる緩傾斜地である。

五番町遺跡は市営地下鉄建設に先立つ路面電車軌道撤去・埋設管確認試掘調査に並行して実施した立合・試掘調査ではじめて発見された遺跡である。以後市営住宅建設や山手幹線の拡幅等で調査事例を重ね、現在までに計10回の発掘調査が実施されている。これまでの調査で縄文時代後期～晩期・古墳時代前期・平安時代・鎌倉時代の遺構・遺物が確認され、大規模複合遺跡であることが判明している。中でも六甲山系南麓平野部での縄文時代の遺跡の確認事例はそう多くはなく、竪穴住居等の居住を直接証明する遺構は未確認であるが重要な遺跡である。

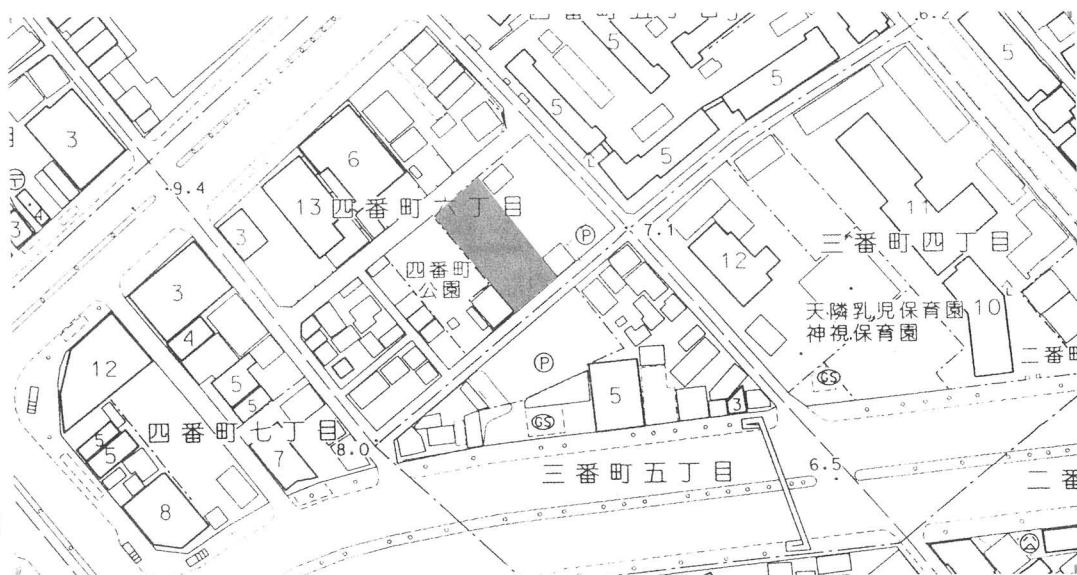


fig.142
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は専門学校の女子寮新築工事に伴うもので、北側約半分は先年度に第10次調査として調査が終了しており、今年度は南側約半分調査する運びとなった。

基本層序

少し複雑な堆積状況であるが、基本的には上から順にアスファルト・近現代の整地土、都市化直前の耕作土、旧耕作土、湿地状堆積、湿地基盤層、地山と続く。第1遺構面は湿地状堆積上層の暗灰茶色シルトから湿地基盤層の上面、第2遺構面は湿地状堆積下層の暗黄灰褐色砂混じりシルトから湿地基盤層の上面、第3遺構面地山の淡黄色微砂～シルトの上面である。

第1遺構面

鎌倉時代の遺構面で、掘立柱建物1棟・溝2条・土坑4基の他、ピットを27基検出したが、遺構はすべて調査区の南半で検出し、北半には遺構は存在しなかった。調査区南半は後述する第2遺構面と同一面化しているが、遺構面直上は近世頃と思われる旧耕作土であ

るため耕作によって削平され、結果的に同一面化したものと考えられる。さらにまた調査区南隅は同じく近世頃の水田の段差で遺構面自体が削平されている。

S B 101 調査区の南隅で検出した、北東から南西方向の掘立柱建物である。北東方向は2間、北西方向は1間分を確認したが、北側にはさらに続く柱穴は存在しないため建物の北端部分に相当すると考えられる。しかし南東・南西両側は調査区外に続くため建物全体の規模や建物の方向は不明である。柱穴には隣接して掘られているものが多く、建物の建替もしくは柱の立替えが行われたと考えられる。そのために柱列の方向を正確には計測し難いが、N45~50° Eである。掘形の直径は0.2~0.35m、深さは0.2~0.6m、柱痕の直径は確認できた柱穴では約0.1mである。柱間の規模は北東方向が1.9~2.2m、南北方向が1.7~2.3mである。それぞれの柱穴からは土師器片・須恵器片・瓦器・黒色土器片が出土した。

S D 101 調査区南東辺中央で検出した弧状の溝である。S D 102と切り合っており、S D 101の方が古い。長さ3.1mを検出したが南東側は調査区外に続き、南西側は攪乱で破壊されているため全長は不明である。幅0.3~0.6m、深さは0.05~0.1mである。断面は皿もしくは碗状、埋土は淡灰茶色粘質土である。遺物は土師器片・須恵器片・瓦器片が出土した他、石鍋の破片が出土した。

S D 102 S D 101と切り合っており、S D 102の方が新しい。長さ3.6m、幅0.2~0.4m、深さは0.05mである。断面は皿状、埋土は淡茶色粘質土である。遺物は土師器片が出土した。

土坑 S K 101は、直径1.6mで、断面は2段に丸く深くなり、北東側が深い。最深部の深さは約0.3mである。埋土は上から順に淡褐灰色土、淡褐灰色微砂である。

S K 102は、長径0.8m、短径0.5m、断面は2段に丸く深くなり、東側が深い。最深部の深さは約0.2mである。埋土は上から順に淡黄茶色砂混じりシルト、茶色粘質土である。

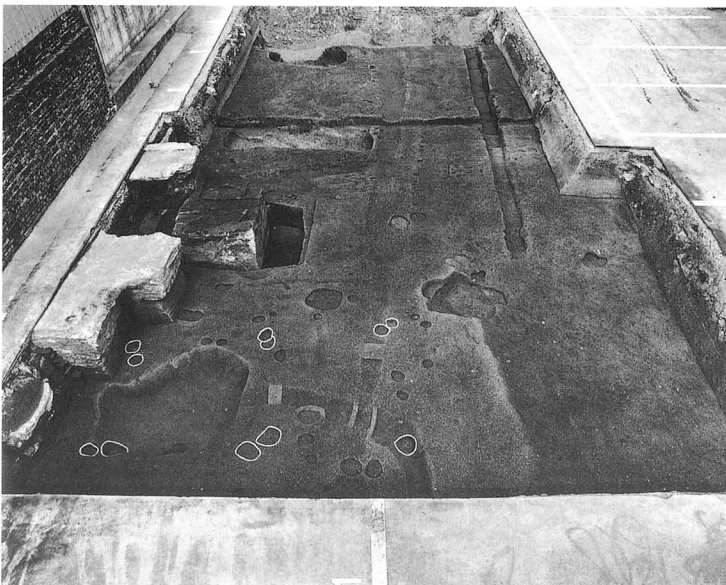


fig.143 第1遺構面全景

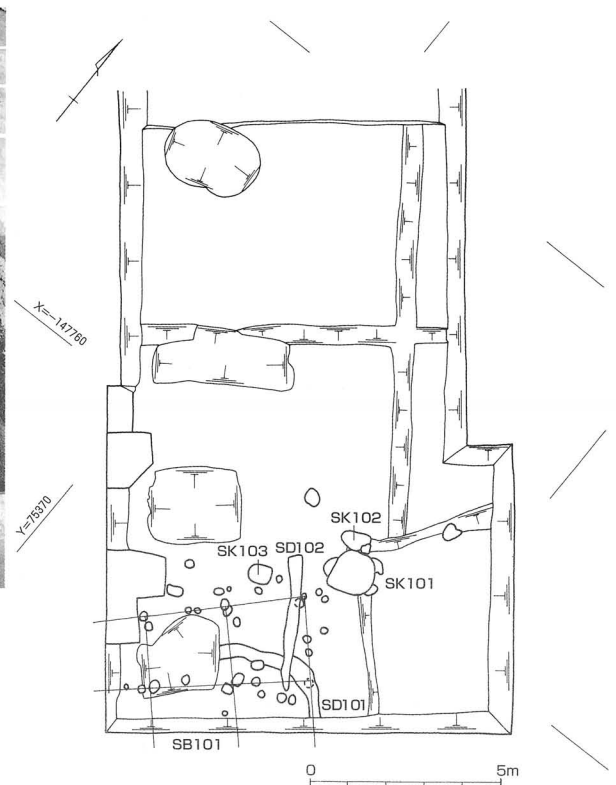


fig.144 第1遺構面平面図

S K103は、ほぼ楕円形の土坑である。長径0.7m、短径0.6mで、断面は椀状であるが底が尖っており、深さ約0.3mである。埋土は上から順に暗茶色砂質土塊混じり灰茶色粘質土、暗灰茶色粘質土である。S K104は、直径0.6mで、断面は深い椀状で底がほぼ平らになっており、深さ約0.35mである。埋土は上から順に淡灰黄色砂混じりシルト、暗茶色粘質土である。いずれの土坑からも土師器片・瓦器片が出土している。

ピット ピットの規模は直径あるいは長径0.1~0.4m、深さ0.05~0.45mである。ピットの中にはかなり深く立派なものや小さく浅いものなどが混在していた。掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかったが、これらの内3基からは明らかに柱痕が確認された。遺物はそれぞれのピットから土師器片・須恵器片・瓦器片が出土した。

第2遺構面 北隣の第10次調査の成果から縄文時代晩期頃と推定される遺構面であるが、今回、遺物は全く出土しなかった。調査区の北半で落ち込み2基を検出した。また南半は第1遺構面がそのまま同時に第2遺構面の基盤層となっていたが、埋土の類似性から遺物が出土していない小ピットもすべて第1遺構面の時期に属すると考えられ、第2遺構面に属すると思われる遺構は検出されなかった。

S X201 調査区の北隅で検出した浅い落ち込みである。北東側は調査区外に続くが現状では長径2.5m以上、短径1.7m以上の楕円形である。断面は浅い皿状で、深さは約0.15mである。埋土は上から順に灰茶色シルト、黄灰茶色シルトである。遺物は出土しなかった。

S X202 調査区の西隅近くで検出した不整形な浅い落ち込みである。溝状に細くなる西側の一部が攪乱で破壊されているが、現状では大きさ長径2.9m以上、幅2.1mである。断面は中心が1段深くなる皿状で、深さは約0.25mである。埋土は上から順に暗褐灰色粘土、暗灰色粘土、暗褐灰色シルト、褐灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

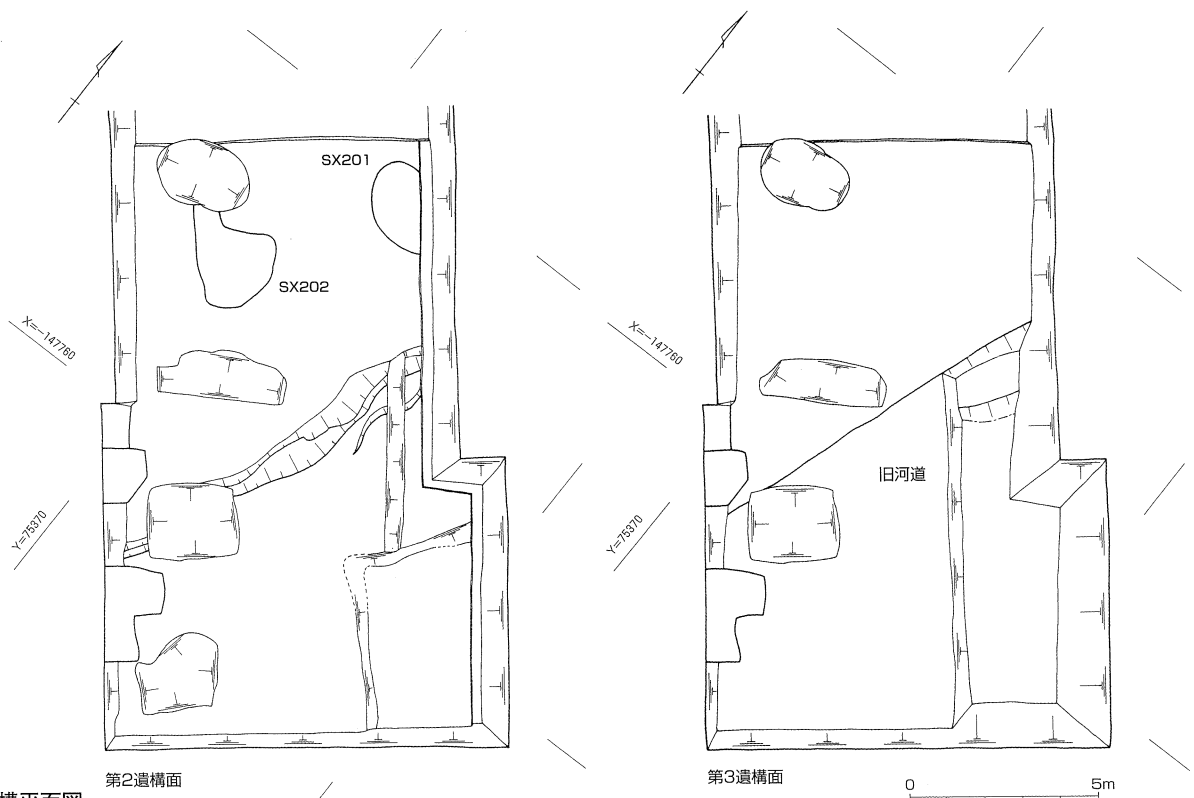


fig.145 遺構平面図

第3 遺構面 縄文時代晩期以前と推定される遺構面であるが、出土した遺物は磨滅が著しいため詳細な時期は不明である。調査区の南半で旧河道を1条検出したが、北半には遺構は存在しなかった。

旧河道 北北東から南南西に流れる旧河道である。西側の岸はほぼ直線に9.7m分を検出したが、東側の岸は調査区に位置しているため検出されなかった。現状では幅は9.0m以上である。ただ西側の岸のすぐ内側で岸の土である地山の淡黄色微砂～シルトや淡灰青色微砂が水流に洗われ崩れて二次堆積している状況が確認されており、同様の堆積状況が調査区東隅でも視認されている。従って東側の岸は調査区外でも比較的近い位置にある可能性が考えられる。深さは北東壁沿いに1.4mまで掘削したが、湧水が著しくなったため調査の安全性を考慮してこれ以上掘削しなかった。従って本来の深さは不明である。

遺物は縄文土器片・サヌカイト剥片の他、石鏃が1点出土したが、土器片は水流に洗われ磨滅が著しい。しかし1点のみ貝殻条痕と思われる調整が確認できた他、無文の土器片ばかりであったため、旧河道全てを掘削したわけではないが縄文時代晩期から大きく遡る時期にはならないと考えられる。

3. まとめ

五番町遺跡はこれまでの調査によって縄文時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代の遺構面を持つ複合遺跡であることが解明されているが、特に平野部では少ない縄文時代の遺跡として周知されている。今回の調査地点は遺跡範囲内でも南端に近く、調査開始前には北隣の第10次調査の成果から同様に遺構分布が希薄になっていくと考えられていた。しかし調査の結果、縄文時代の遺構は想定どおり希薄になっていったが、調査区南端で鎌倉時代の掘立柱建物の他に溝・土坑・ピットを検出した。遺跡内部では北端近くの第2次調査で同じ頃の掘立柱建物が検出されている他、第2次調査北東隣の第3・4次調査、今回の調査地点の西隣の第5次調査遺跡西端近くの第6次調査で遺構が確認されている。一方で遺跡東端の第7～9次調査ではその頃の遺構は検出されていない。遺跡中心部の内容はよく判っていないが、試掘調査では鎌倉時代の土器が出土している。従って当時は遺跡の東端を除いて集落が存在していたことになる。また調査区内の南端で掘立柱建物が検出されたことから判断し、遺跡は南側の三番町五丁目の方向に拡がる可能性も考えられるようになった。当該地で実施される土木工事等には今後注意していく必要がある。

縄文時代晩期の遺構密度は低く、しかも湿地状堆積が遺構の基盤層となっている。さらに別の湿地状堆積がその上面を覆っている。このことから当時北隣の第10次調査地点を含めて一帯は低湿地であったことが窺える。しかし今回調査区の中央で西北西に面した湿地東岸となる段差を検出している。周辺一帯は地形的には西から東へと徐々に低くなる緩傾斜地であるが、微地形的には当時は逆に湿地に向かって東から西へと低くなる状況であったことが判明した。

縄文時代晩期以前の旧河道は北北東から南南西に流れている。この方向は荻藻川の流下方向と一致しないが、遺跡は荻藻川が形成した扇状地上に立地しているため他の河川由来の旧河道とは考え難い。扇状地上を蛇行して流れていた旧荻藻川の一部を検出したものと考えられる。

10. 戎町遺跡 第33次調査

1. はじめに

戎町遺跡は、妙法寺川により形成された扇状地上に立地する遺跡である。平成2・7年度に実施された山陽電鉄板宿駅の地下化工事、山下線街路築造工事に伴う発掘調査では弥生時代前期、後期を中心として、縄文時代晩期～中世にかけての多くの遺構・遺物が検出された。今回の調査は、共同住宅建設に伴い発掘調査を実施した。

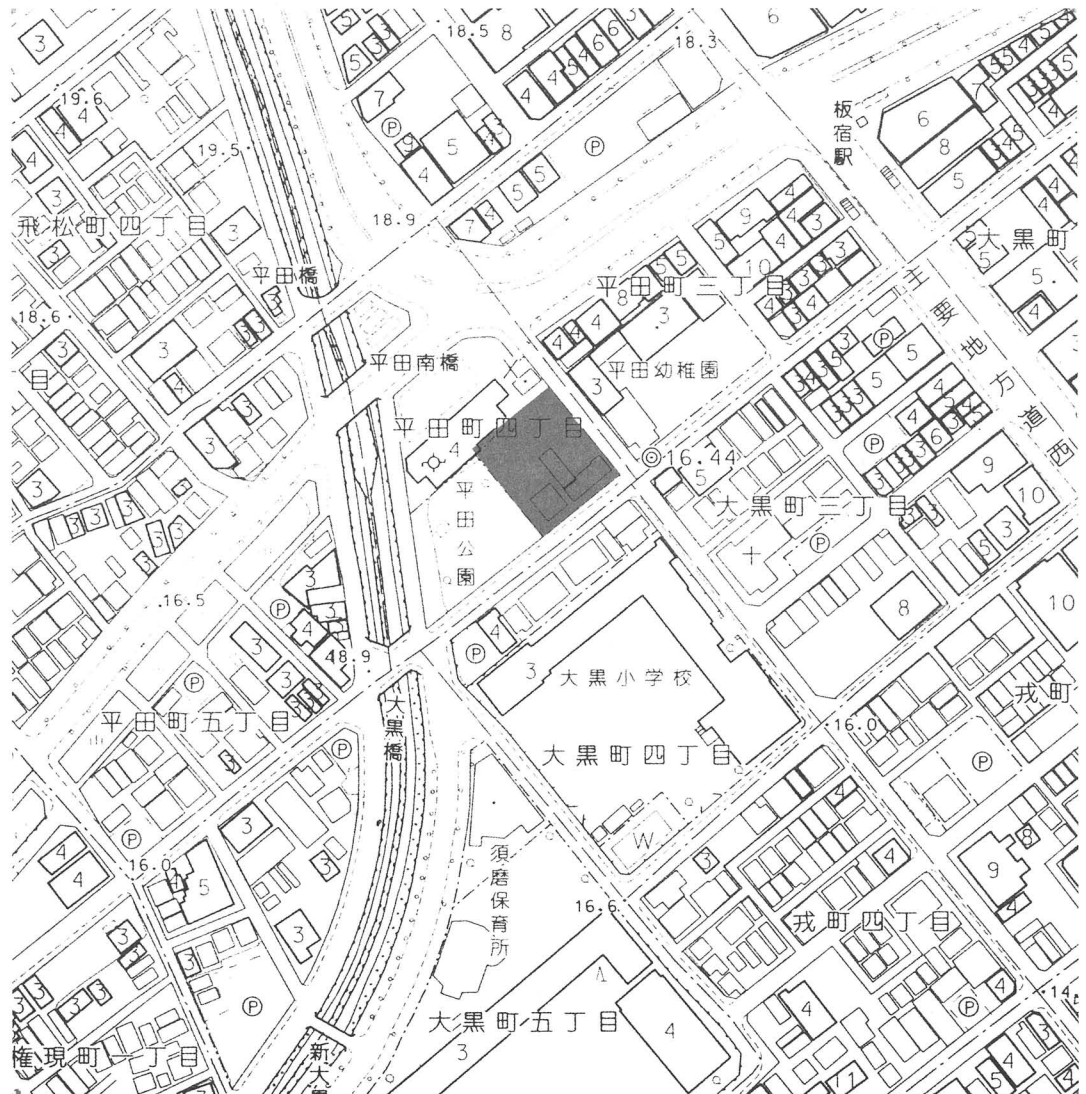


fig.146
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査範囲の内、当初遺構の広がり予想された西半部は湿地状の堆積であることが確認されたため、遺構面の存在が確認された東側部分について調査を実施した。

基本層序

調査区内の基本土層は、GL-1.0m以上まで厚く堆積する盛土のしたに旧耕土層が存在し、その下層に中世後半の遺物を含む灰褐色砂質シルト（14層）、第1遺構面を構成し、中世の遺物を含む灰褐色砂質シルト（16層）、第2遺構面を構成し、弥生時代後期～古墳時代後期の遺物を含む淡灰色シルト（17層）と続き、これより下層は河川による流路堆積である。

尚、調査区の西側は近代以降に埋め立てが行なわれたと推定される池の埋土層である。

第1遺構面 溝8条、大型土坑1基、土坑11基、ピット約40基を検出した。

SD01 SD01は調査区北半部で検出した溝で、大型土坑であるSK01に接続し、これから流れ出る溝である。北西方向から南東方向に主軸を取るが、途中から南西方向へと向きを変えている。

規模は北側が1.3mと幅が広く、南へ行く程幅は狭くなり0.3mである。深さは検出面から0.05~0.1mである。埋土中から土師質の羽釜を含む土師器、須恵器の小片が出土している。時期は中世後半と考えられる。

SD02~ SD02~08は南半部で検出された。規模はSD03が幅0.6~1.2mである以外は、いずれ

SD08 も幅0.15~0.3m前後、深さは0.05m前後である。SD02・04・05・06が北西・南東方向、SD03・07・08が南西・北東方向である。SD02・03・05から微細な瓦質の羽釜、土師器片が出土している。時期は中世後半と考えられる。

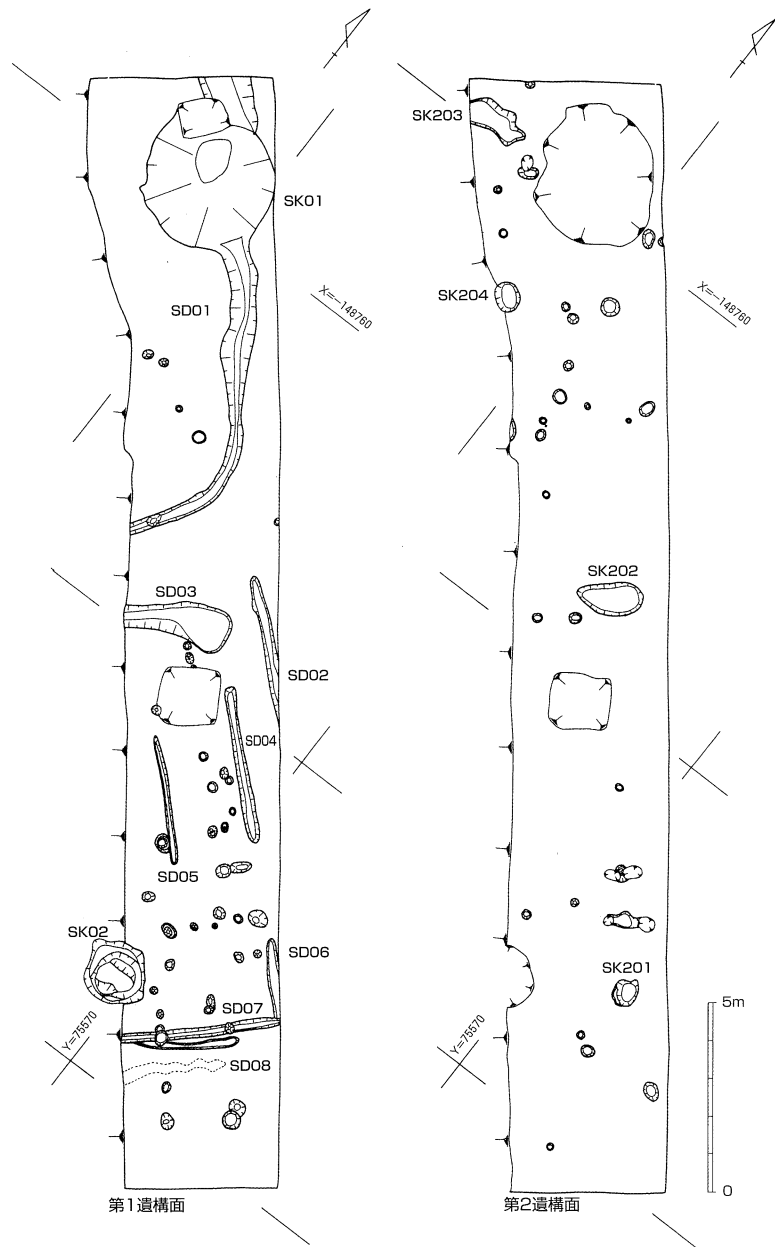


fig.147 遺構平面図

S K 01 S K 01は調査区の北半部北端で検出した大型土坑で、直径3.5m前後、検出面からの深さ0.65mの規模である。北西側と南東側がS D 01と接続する。

掘形内に人頭大の意思が多量に存在する。規則性などは見出せないものの、比較的大型の石が西側に集中している状況が確認された。

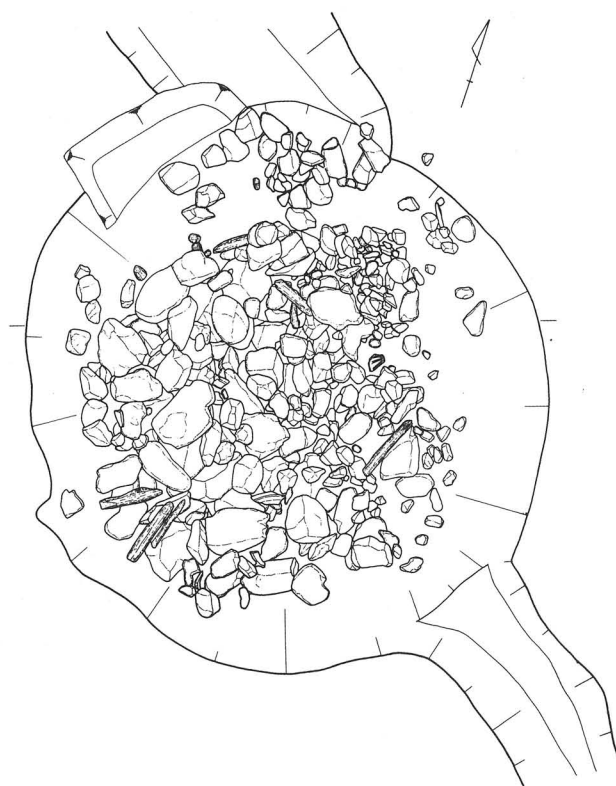
掘形内の北西側、S D 01との接続部には杭列が存在している。埋土の堆積状況等も合わせて、水利施設と考えられ、一度水を帯水させ、オーバーフローさせて南側へ流出させるものであったと考えられる。西側に比較的大型の石が集中しているのは水流を受ける護岸的な性格も考えられるが、石と混入するような状況で遺物が出土しており、破壊後に埋め戻した状況によるものと推定され、元来の形状は不明であると言わざるを得ない。

S K 02 調査区の南半部で検出した土坑で、西側が池の掘形による削平を受けていたが、底部は残存しており、全体の形状を明らかにすることができた。

規模は直径1.6m前後、検出面からの深さは0.68mである。底部は中央部が高く、深さは一律ではない。中世のものと考えられる須恵器、土師器が出土している。

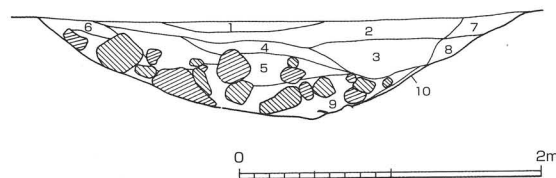


fig.148 S K 01



16.0m

1. 茶灰色砂質土 2. 淡灰黒色砂質土
3. 淡灰黒青色シルト質細砂 4. 灰黒色粘質土
5. 淡灰褐色シルト質極細砂 6. 淡灰色細砂
7. 暗灰色シルト 8. 灰青色シルト
9. 灰色粘土 10. 灰黒色粘土



0 2m

fig.149 S K 01

ピット 南半部を中心に約40基のピットを検出したが、建物を構成するものであるかを確認するには至らなかった。直径0.2～0.6m、深さは検出面から0.05～0.65mである。須恵器、土師器の小片が出土したピットも確認された。

遺物が微細なため、時期の特定は困難であるが、中世のものであると考えられる。

地割れ 調査区南半部南端で細砂が帯状に集積しているものを検出した。断割を行なった結果、通常の溝の堆積ではないことが判明した。産業技術総合研究所寒川旭氏の所見では、地震により派生した地割れに、地震直後に発生した洪水により細砂層が堆積したものである可能性が高いとのことであり、地割れの方向、洪水の堆積から慶長元（1596）年の〔慶長の大地震〕によるものであるとの所見を得た。

第2遺構面 土坑4基、ピット約30基を検出した。

S K 201 調査区南半部で検出した長径0.7m、短径0.62m、検出面からの深さ0.08mの土坑である。埋土は褐灰色シルト質細砂で、出土遺物はなかった。

S K 202 調査区南半部北端で検出した長径1.8m、短径0.9m、検出面からの深さ0.13mの土坑である。埋土は2層に分かれ、上から明灰色砂質シルト、明灰色シルトである。埋土中から土師器片が出土している。

S K 203 調査区北半部北端で検出した幅0.7mの浅い落ち込み状遺構である。西側は削平により失われており、全体の形状、規模は不明である。深さは検出面から0.03mで、埋土は暗灰色砂質シルトである。出土遺物はなかった。

S K 204 調査区北半部で検出した土坑である。西側が池の掘形による削平を受けていたが、底部は残存しており、全体の形状を明らかにすることができた。

規模は長径0.8m、短径0.65m、検出面からの深さは0.1mである。埋土は灰色シルト質細砂で、出土遺物はなかった。

ピット 約30基のピットを検出した。検出したピットは直径0.15～0.5m、深さは検出面から0.1～0.25mである。須恵器、土師器の小片が出土したのものもある。これらの遺物はいずれも微細であり、時期の特定は困難であるが、中世のものと考えられる。

建物等を構成するものであるかを確認することはできなかった。

3. まとめ 今回の調査では、2面の遺構面を確認することができた。

第1遺構面で検出したS K 01では比較的まとまった量の遺物が出土したが、全体として遺構の時期を特定させる遺物の出土はごく少量であり、時期の特定は困難である。S K 01出土遺物とそのほか出土遺物から第1遺構面の遺構は概ね中世後半（14世紀後半～15世紀前葉）、第2遺構面の遺構は中世前半（12世紀後半～13世紀前葉）と考えられる。また、第2遺構面の下層の淡灰色砂質シルトから弥生時代後期後半～古墳時代後期（6世紀末）の遺物が比較的多く出土した。遺物は磨滅を受けており、洪水等により流入したものと推定される。これより下層は自然河道による堆積層であり遺物の出土は確認されなかった。

今回の調査区は戎町遺跡の西端部に位置しており、これより西は旧妙法寺川の流路にあたるものと考えられ、戎町遺跡全体を復元する上で貴重なデータを得ることができた。

11. 白水瓢塚古墳 第8次調査

1. はじめに

白水瓢塚古墳は明石川の支流伊川の右岸丘陵上にあり、丘陵の東西に小支谷が刻まれ、北側も小さな谷状地形となっていて、独立した丘陵の頂部に位置している。この独立丘陵東側の丘陵上には天王山古墳群、西側の丘陵上には延命寺古墳、高津橋大塚古墳などがあり、伊川中流域においてもっとも古墳が集中する地域で、白水瓢塚古墳はその中心を占めているといえる。

今回の調査は、白水瓢塚古墳と所謂「夫塚」との間の丘陵鞍部、白水瓢塚古墳前方部西側について全面調査を実施した。

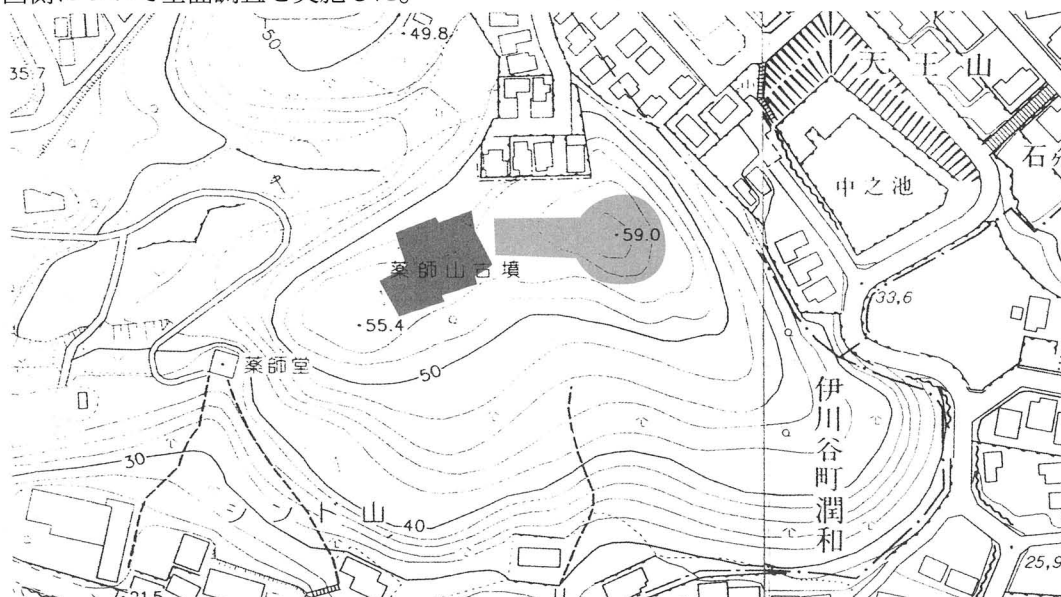


fig.150
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

調査は、平成10年度に実施した精細測量調査と直良氏作成の埴輪棺出土地見取り図から想定される1号小棺出土推定地点を含み、試掘調査の結果を受けて実施した。

今回の調査で、白水瓢塚古墳の西側丘陵尾根には所謂「夫塚」を含めて3基の古墳と1基の埴輪棺墓が存在することが明らかになったが、その名称は未確定であった。第6次調査で確認されている木棺直葬墳はただ2号墳とされているため、大字を採って所謂「夫塚」を白水1号墳とし、今回調査実施した古墳を西側から白水3号墳、4号墳とし、白水瓢塚古墳は現行のままとして検出状況を記述する。また、東側調査区で検出した埴輪棺は第6次調査までの埴輪棺番号を踏襲して8号埴輪棺とした。

白水3号墳

尾根頂部やや南よりに築造された方形墳と考えられるが、南側周溝が不整形であるため明確でない。墳丘は丘陵高位にあたる北側で厚さ0.25~0.3m前後残してはいるものの、南側を中心に古墳全体で丘陵土を流出させていると考えられる。幅0.8m、深さ0.25m前後の周溝をめぐらせ、周溝の状況から方形墳として考えられる古墳の規模は、東西7.2m、南北5.4mの長方形で、高さは南側墳丘裾から1.1m以上、北側墳丘裾から0.4m以上である。周溝の東側と南西側に溝の途切れが検出され、陸橋状の墓道痕跡の存在も窺える。

墳丘中央よりやや北よりに木棺を直葬して埋葬施設としている。墓壇は東西5.5m、

南北2.5m、深さ0.3m以上の長楕円形堀形を掘り、墓壙の中央に組合せ木棺を据えている。組合せ木棺は、底板となる長さ2.8m、幅0.7m、厚さ5cm前後の板材を敷き、これに沿って長さ3.6m、厚さ8cm前後の板材を長側板に据え、小口板は両小口とも側板端より40cm内側に据えて井桁に組んでいる。棺の固定には東側では淡黄白色の粘土を側・小口に用いている。西側では、赤褐色土（小礫混）を棺の固定に用いている。棺の内法は長さ2.9m、幅0.7mを計測し、深さ0.15m残存させている。

出土遺物は、試掘調査の際に淡黄白色粘土上面で鉄鏃が出土している以外は、棺内では東側北側板に接して20cm大の板石が出土している。この板石は棺上に置かれていた可能性がある。埋土内からは土師器碎片出土しているが、棺底では副葬品は検出されなかった。一方、東辺の周溝埋土内では、埋没土の上層で土師器小型器台1個体分が周溝内肩に沿って出土しており、古墳周溝が埋まり始めて間もない頃、墓前祭祀後に墳丘上から転落後埋没したものと考えられる。

土坑3 3号墳東端で検出した土坑状の落ち込みである。3号墳丘上から掘り込まれた直径0.5m、深さ0.24mの断面台形をしている。埋土上層部から土師器片が少量出土している。埋土は3層に分かれるものの水平堆積していて、掘った後埋められたと考えられるが、木材等の据付痕跡は検出されなかった。

土坑2 3号墳の南西斜面で検出した集石土坑である。斜面流土上面から掘り込まれた長径0.9m、短径0.45m、深さ0.25m前後、断面舟底状をした楕円形の土坑である。土坑中央部に落ち込むように河原石が埋まり、河原石の間に土師器高坏が破碎された状態で出土した。

白水4号墳 白水瓢塚古墳の前方部裾から南西へ15mの地点、尾根頂部に築造された方形墳である。墳丘盛土は、削平・流失を受けながら墳丘全体に0.1~0.3m前後残している。周溝は、北西部と北東部の浅い陸橋部状部分を除いてほぼ全周し、東側で幅1.0m、深さ0.3m、西側で幅1.4m、深さ0.4m、北側で幅1.2m、深さ0.3m、南側で幅0.6m、深さ0.2mを計測する。

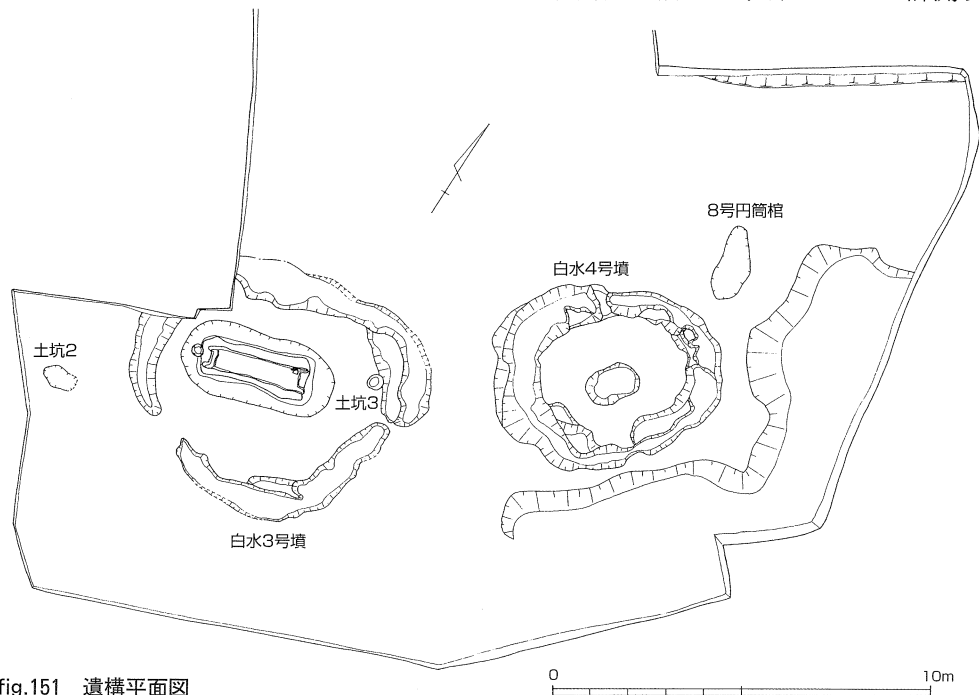


fig.151 遺構平面図

このような周溝の状況から考えられる古墳の規模は、東西4.5m、南北4.0mのほぼ方形で、高さは北側で溝底から0.35m、西側で0.5m、南側で0.4mを残している。

出土遺物は、墳丘盛土内から土師器細片が出土した以外は、周溝内から出土した。北西側周溝の埋土上層からは横倒しになった土師器甕が出土し、西側周溝の埋土上層で、土師器高坏坏部が周溝内肩に沿ってほぼ正位で出土した。古墳周溝の埋まり始めて間もない時期に墳丘上から転落したものか、周溝内で墓前祭祀を行った可能性がある。なお土師器高坏の下に埴輪片が据えられていた。

土坑 1 白水4号墳墳丘中央に長径1.5m、短径1.0m、深さ約0.5m、断面皿状の土坑を検出した。土坑の埋土は腐植土を含む褐灰色礫混じり土で、土坑上層で埴輪片が集中して出土しており、土坑内埋没土の状況から、埴輪棺埋納墳であった可能性がある。

8号埴輪棺 白水4号墳の北東側、瓢塚古墳前方部裾から西へ12mの地点で検出した埴輪棺墓である。検出した地点は丘陵尾根北斜面のやや北東に張り出す隆起部であるが、周溝等の墳丘を画する施設は検出されなかった。

埴輪棺埋納墳は東北に緩やかに傾斜する斜面に穿たれている。埴輪棺埋納墳はほぼ南北に長軸を採る長さ2.4m、幅0.75mの規模で、若干の肩崩れを受けながらも南側で幅広く、北端部で狭まる長楕円形を呈する。埴輪棺埋納墳の断面形は、中央南より最深部で深さ0.2m前後を測り、長軸では南側・北側で浅く掘り窪めた断面「く」字状をしている。短軸では底幅のやや狭い舟底状になっている。埴輪棺は、この埋納墳を掘ったあと一旦土砂を入れて平坦面を造った後、埋納墳のやや東北よりに埴輪棺を据えている。

埴輪棺は、楕円形円筒埴輪を2本使用し、口縁部を合わせ口とするものである。合わせ口部の重なりはなく、粘土等による閉塞もみられない。また、楕円形円筒埴輪には三角形の透孔がつくられているが、この透孔を塞ぐ粘土貼り付けも行なわれていない。小口部の閉塞は、南側の小口では、別個体の一枚の楕円形円筒埴輪片を立てて行うのに対し、北側小口では、検出時に抜き取ったため明確ではないが、「U字」形に囲むように埴輪片を立てに据えて1つの空間を造っている。埴輪棺は、南棺が南から北

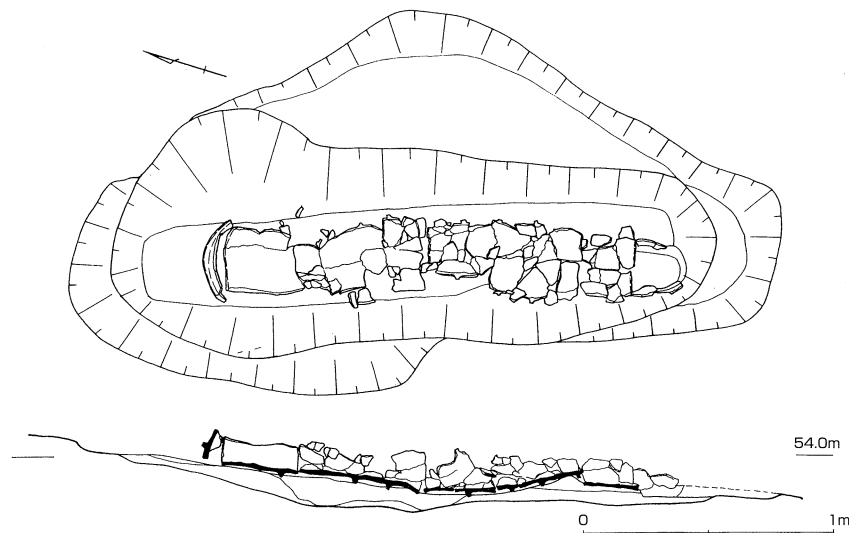


fig.152 8号円筒棺

にやや傾斜して据えられているのに対し、北棺は植物の根によって起こされてはいるものの、ほぼ水平に据えられていることから、遺体の頭の位置は南にあったと考えられる。

以上の検討から復原される埴輪棺は、長軸長1.95m、現存幅0.3mで、北棺に使用された楕円形円筒埴輪の長さは約87cm、復原直径45cm前後、南棺に使用された楕円形円筒埴輪の長さは約90cm、復原直径45cm前後で、楕円形円筒埴輪の長軸を下にして据えられていた。

3. まとめ

今回の調査で検出した2基の方形墳は、白水瓢塚古墳に相前後して築造された小古墳と考えられる。

4号墳頂検出の不明土坑は、その位置から、昭和初年に直良信夫氏によって調査検出された1号小棺に相当すると考えられ、現筑波大学所蔵の1号小棺と埴輪棺埋納墳出土埴輪片との同定が必要と考えられる。今回の調査ではこの推定1号小棺出土の周囲に溝がめぐり、墳丘も築造されていた状況で検出した。埴輪棺を主体部とし、墳丘・周溝を備える方形墳は、白水瓢塚古墳周辺では今まで検出例はない。周溝を備える例は、神戸市内では舞子円筒棺群中に例があり、また、大阪府藤井寺市土師の里8号墳もその1例である。今回の白水4号墳も含め、いずれも周囲に埴輪棺群があり、埴輪棺被葬者の中でも特別な取扱を受けた被葬者像を想定できる。先に述べた現筑波大学所蔵の1号小棺と不明土坑出土の埴輪片の同定を踏まえ、各地における埴輪棺の検出状況を精査する中で今後検討が必要であろう。

3号墳は、副葬品の出土が鉄鏃1点で時期等を明確にできないが、白水瓢塚古墳周辺の小古墳のうち白水1号墳では測量調査の際五世紀後半の須恵器が出土している。また2号墳は六世紀代の木棺直葬墳であることが判っている。これらから3号墳は、白水瓢塚古墳を中心とする集団の系譜のなかで、瓢塚-1号墳-2号墳の間を埋める古墳であると考えられる。

今回調査で出土した遺物は、整理検討は未着手であり、主墳白水瓢塚古墳の性格も明確でない点などから白水3・4号墳の詳細な時期等は今後の検討課題としたい。



fig.153 調査区全景

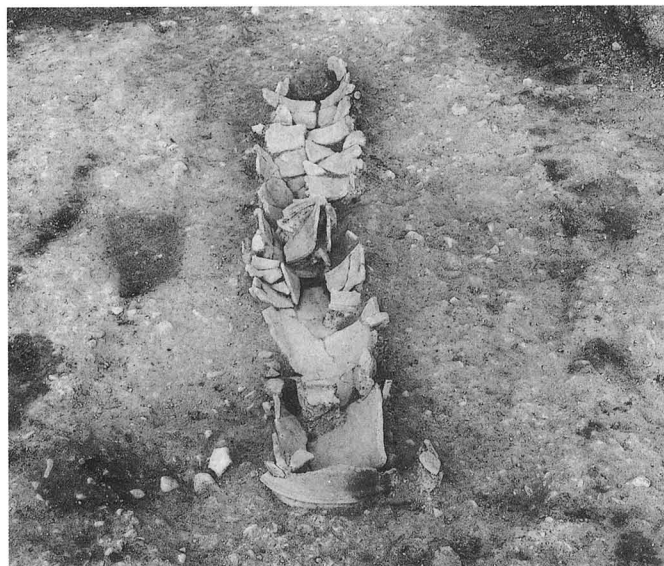


fig.154 8号円筒棺

12. 高津橋・岡遺跡 第7次調査

1. はじめに 高津橋・岡遺跡は、櫛谷川と天井川に挟まれた南北に長い丘陵上に立地しており、過去の調査で弥生時代～中世の複合遺跡であることが明らかになっている。主な遺構としては弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居、掘立柱建物、奈良時代・平安時代・中世の掘立柱建物を検出している。今回の調査は宅地造成工事に伴うもので、工事により遺跡に影響を及ぼす範囲について発掘調査を実施した。

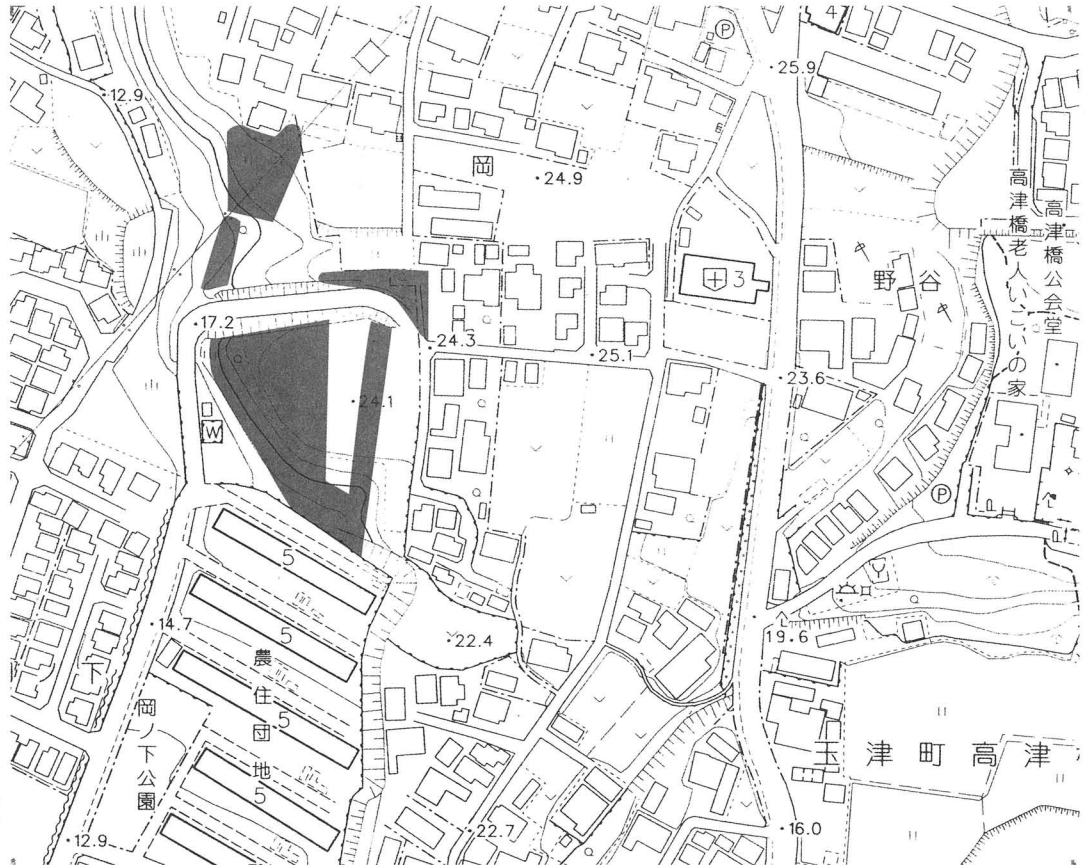


fig.155
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 便宜上調査区を1～3区に分けて調査を実施した。遺構検出面は地山面であり、水田造成時の削平が著しく、表土・耕土直下が地山面となる部分が大半であり、斜面および谷部分に地山の上に流土層が存在している。調査は表土・耕土については重機によって掘削し、流土層は人力にて掘削し、遺構の検出に努めた。調査の結果、弥生時代後期の段状遺構・土坑、古墳時代後期の溝・土坑、中世のピット・溝・土坑・土壘状遺構を検出した。

- 1区 中央部分については削平が著しく、遺構面となる黄褐色シルト層が存在せず、遺構・遺物を検出できなかった。南側の谷部については、流土中に弥生土器、古墳時代～飛鳥時代の須恵器、中世の須恵器・土師器を含んでいるが、遺構は検出できなかった。

遺構を検出したのは東側部分と西側の斜面部分である。東側部分は若干の削平を受けてはいるが、黄褐色シルト層上面でピット、溝等の遺構を検出した。ピットは多数検出したがいずれも建物としてはまとまらなかった。西側の斜面部分は削平を受けておらず、流土層を除去したところ段状遺構1基と土坑4基を検出した。

段状遺構 緩やかな斜面を加工し、現状で長さ約9.0m、幅約2.0mの平坦面を削り出している。本来は幅がもっと広がったが、かなり流失しているものと思われる。なお、平坦面には遺構は確認しなかった。

S K 01 長径2.0m、短径1.4m、深さ0.4mの楕円形の土坑で、埋土より古墳時代後期の須恵器坏蓋の完形品が出土している。

S K 02 長径2.0m、短径1.6m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。

S K 03 直径1.2m、深さ0.2mの円形の土坑である。

S K 04 長辺2.2m、短辺0.8m、深さ0.5mの長方形の土坑である。S K 02～S K 04の3基については、いずれも埋土に弥生時代後期の土器の細片を含んでいる。

2区 2区については黄褐色シルト層上面でピット、溝、土坑等の遺構を検出した。また当初古墳と考えられていた盛土の調査も実施した。盛土については調査の結果、土塁の残欠と判断するに至った。

S D 01 幅約2.0m、深さ約0.7mの規模で、盛土の南東部付近から南へ伸びている溝である。埋土より14～15世紀代の土器が出土している。

S K 201 直径約1.0m、深さ約0.7mの土坑で、底付近の埋土から青銅製の鉦が出土した。

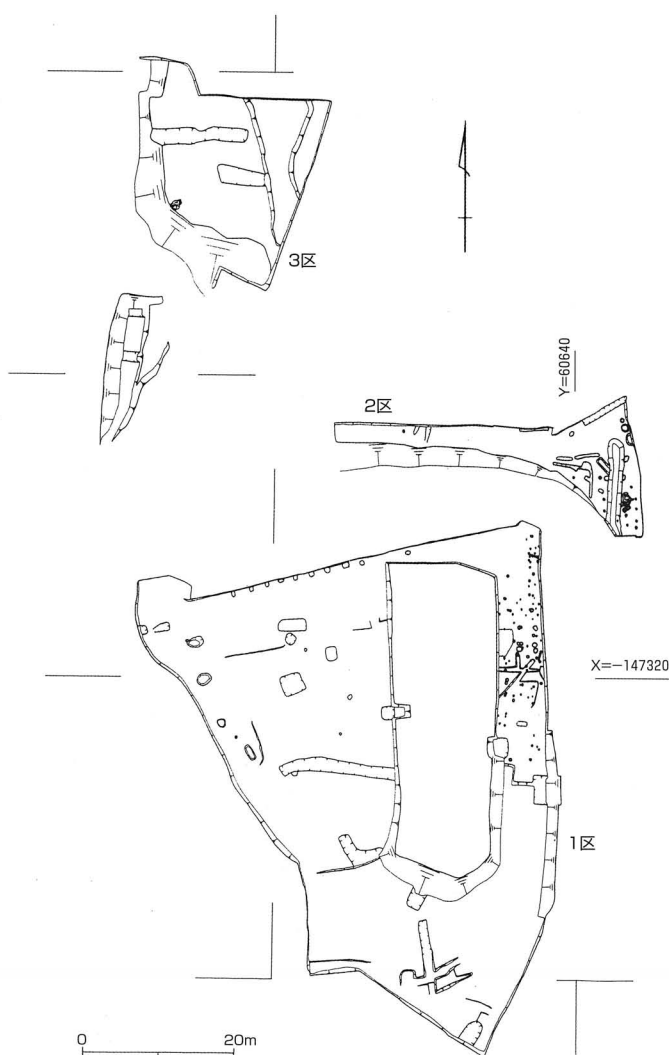


fig.156 遺構平面図



fig.157 2区全景



fig.158 1区全景

土塁状遺構 調査前の現況で東西約8.0m、南北約6.0mの楕円形の盛土であったが、近現代の盛土を除去した結果、東西約5.5mの長さについてのみ当初の盛土であると確認した。なお隣地境界に位置しているため、安全管理上南北の規模についての確認はできなかった。

盛土上面について精査を実施したが、埋葬施設等遺構は確認しなかったため断ち割り調査を実施した。その結果、盛土の築造過程について明らかになった。まず黄褐色シルトの地山面を平坦に整え、黒褐色砂質シルトを水平に20cm程度盛り、その後「もっこ」一杯分の黒褐色砂質シルトを外側から先に、内側に向かって順に積んでいく状況が確認できる。さらにその後黄褐色シルトを盛っている。盛土の状況から推察して古墳の盛土であるとは考えにくく、中世の土塁盛土の可能性が高いと考えられる。なお、盛土中の黒褐色砂質シルト層には弥生時代後期の土器が多量に含まれており、周辺の遺物包含層の土を盛っていることがわかる。また、近現代の盛土より円筒埴輪片が数片出土しており、付近にかつて古墳が存在していたことが窺える。なお、S D01と土塁状遺構はほぼ直角の位置関係にある。

3区 水田造成による削平が著しく、わずかに西側斜面部分において溝を1条検出したのみである。なお3区南側に東西方向の谷が存在しており、堀切のような人工的な施設の可能性も考えられたので、谷に直交するようにトレンチを設定し調査を実施したが、明確な遺構を検出できなかった。

溝 東側部分は削平を受け、西側部分は流失しているが、現存幅約0.8m、長さ1.6m以上、深さ0.3mの規模で、埋土中より須恵器坏身、坏蓋、高坏、壺、壺の蓋、はそう、韓式系土器の甕が出土している。当初木棺墓の可能性も考えたが、木棺の痕跡が確認できず、底も平らでないことから、古墳の周溝の一部と考えるほうが妥当であろうと思われる。なお、須恵器の時期は陶邑編年のTK10型式に相当し、6世紀中頃のものである。韓式系土器については5世紀末頃の時期に当てはまり、伝世していたものが6世紀中頃の時期に古墳築造の祭祀に使用されたものと考えられる。

3. まとめ 今回の調査と平成8年度に同じ事業地内で実施した調査をあわせて、この地の遺跡の変遷を整理してみると、まず削平が著しく竪穴住居は検出できなかったが、弥生時代後期の段状遺構と土坑が存在することから、当該地に集落が形成されていたことが明らかになっ



fig.159 3区溝

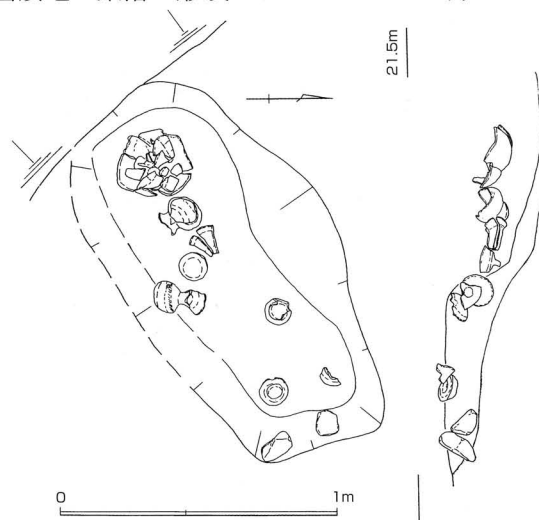


fig.160 3区溝

た。その後古墳時代後期に古墳が築造されていたことが推測される。さらに室町時代に至り、平成8年度の調査で検出した掘立柱建物や備前焼大甕の埋甕遺構、及び今回の調査の2区で検出した幅約2.0mの溝や土塁状遺構などから、この地に溝と土塁で区画された居館が存在した可能性が高いと考えられる。今回の調査の溝と土塁状遺構が交わるコーナー部分では溝が切れており、あるいは居館への入口部分に当たる可能性も考えられる。

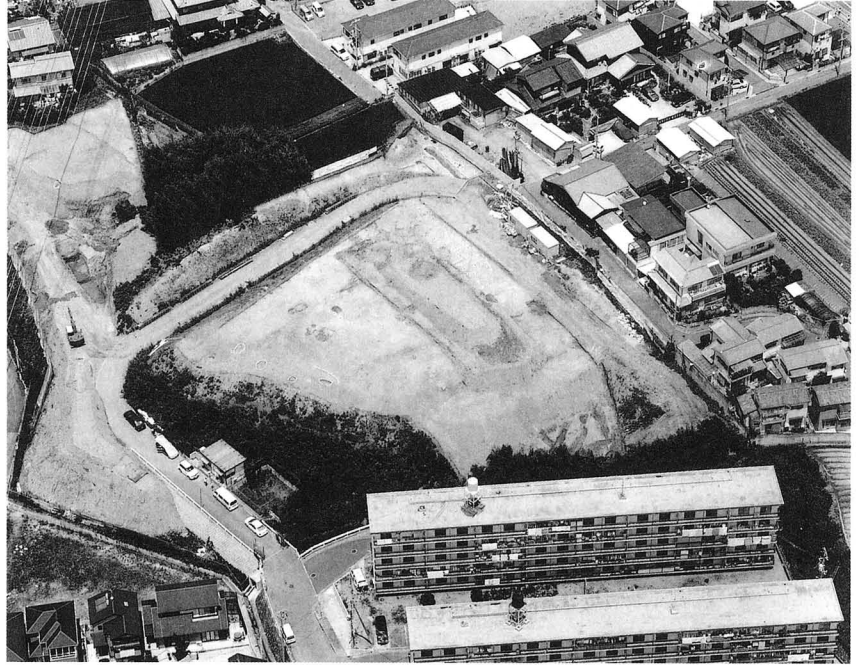


fig.161 調査区全景

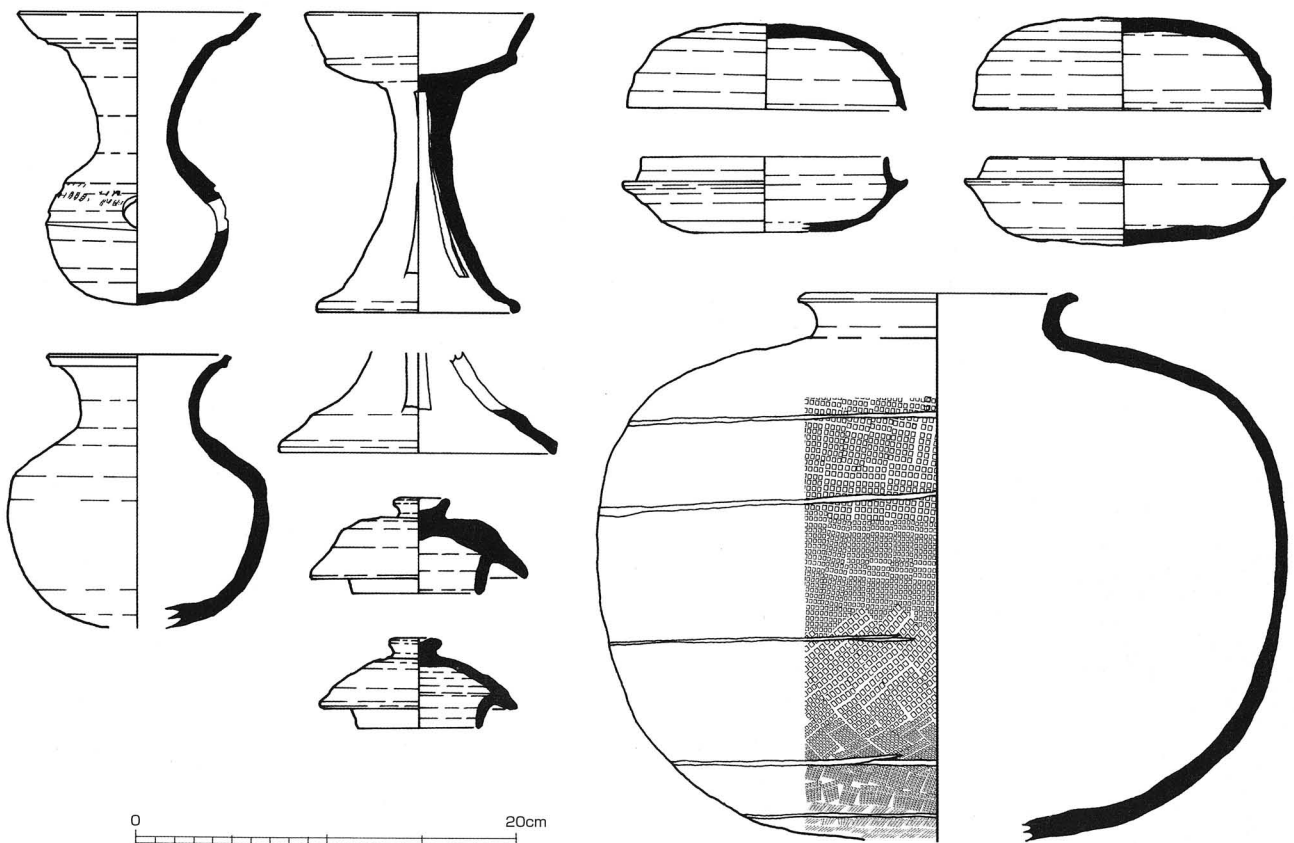


fig.162 3区溝出土遺物

13. 今池尻遺跡 第3次調査

1. はじめに

今池尻遺跡は、伊川右岸の標高約12~15mの沖積地に立地する。南を新方遺跡と接し、東を潤和遺跡、北を白水遺跡と接する。海岸線からの直線距離は約3kmである。民間の倉庫建設に先立って平成4年度に初めて発掘調査が実施され、弥生時代後期後半の土坑や平安時代後期の流路が確認され、その内容の一部が明らかとなった遺跡である。

さて、都市計画道路出合新方線の街路築造に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成9年度、平成12年度に次いで3回目となる。計画路線が新方遺跡と今池尻遺跡を南北に縦断することから、これまでもさまざまな成果が収められてきている。

今回の調査も、都市計画道路出合新方線の街路築造に伴うもので、平成8年度に試掘調査が実施できていなかった範囲にあたる。このため、まず埋蔵文化財の存在の有無とその範囲について試掘調査を実施した。この結果、路線敷延長約40mについて遺跡が存在することが判明し、この範囲を対象として全面調査を実施した。

2. 調査の概要

今回の調査では、弥生時代後期、古墳時代後期後半の遺構面が確認でき、竪穴住居をはじめとする多くの遺構と、まとまった量の遺物が出土した。詳細については、平成14年度刊行の『今池尻遺跡 新方遺跡平松地点 発掘調査報告書』に詳しく記載されている。

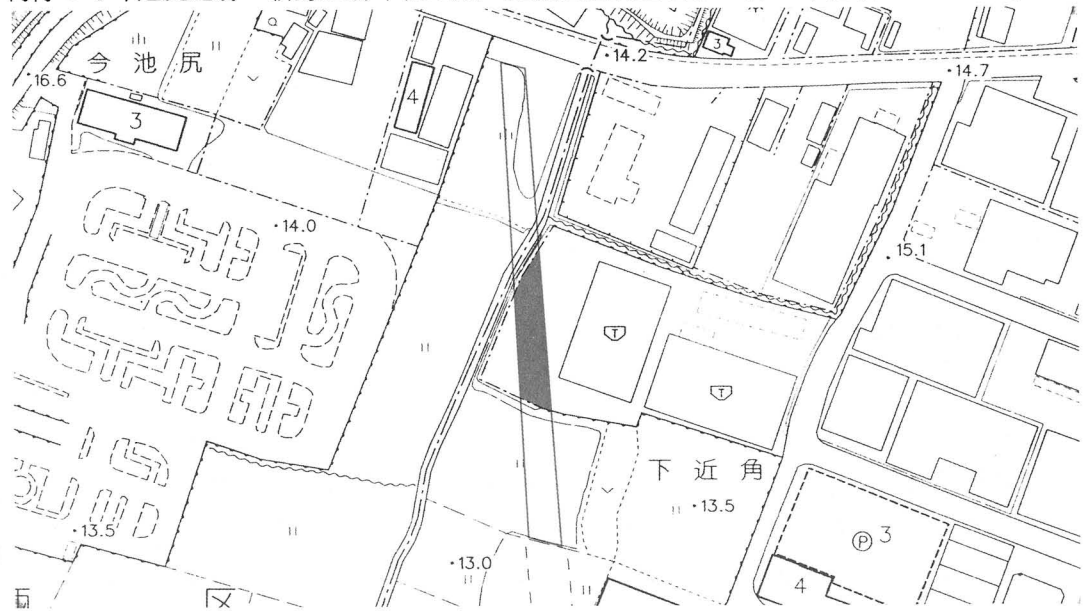


fig.163
調査地位置図
1:2,500



fig.164 第1遺構面全景



fig.165 第2遺構面全景

14. 新方遺跡 第43次調査

1. はじめに

新方遺跡は明石川東岸に位置し、玉津町新方、西河原を中心に広範囲に広がる複合大集落遺跡である。野手地区では、南側に隣接する西方地区と共に区画整理事業に伴い、平成8年度から発掘調査が実施され、これまでに弥生時代前期から中世にかけての遺構、遺物が検出されている。特に平成9年度に実施された発掘調査では、弥生時代前期前半の人骨が検出され、縄文時代人の特徴を持つ骨格、抜歯等の風習。また全身に石鏃が射られている状況から近畿地方最古の弥生時代人で、戦いによる犠牲者として注目された。また、平成11年度の発掘調査においても、弥生時代前期後半、古墳時代中期の人骨が検出され、その調査成果が注目されている地域である。

今回の調査は、擁壁工事に伴うもので、工事による掘削影響範囲について発掘調査を実施した。

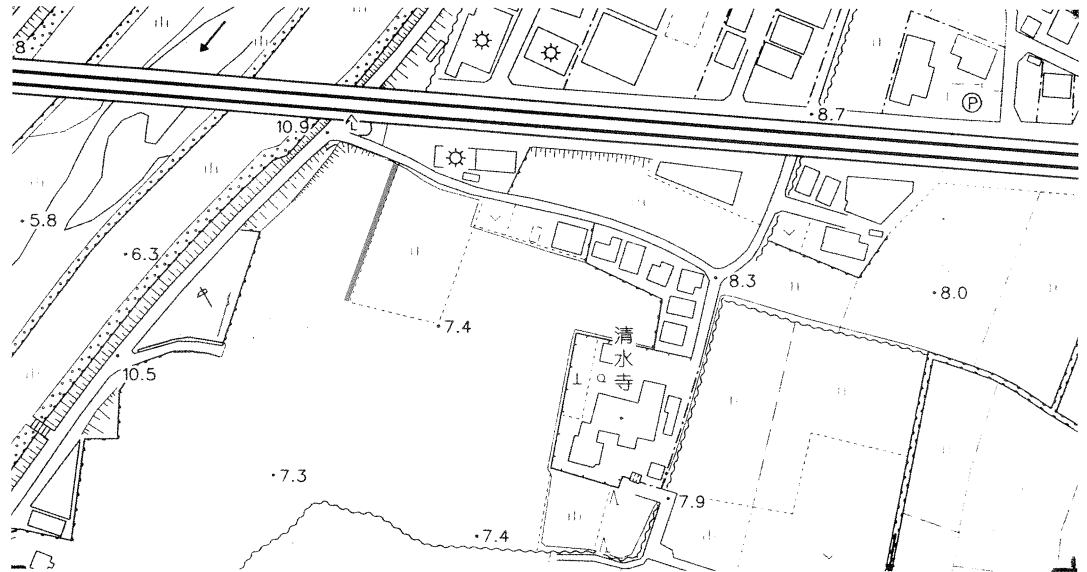


fig.166
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

調査区内の基本土層は耕土層と床土層の下層に旧耕土層、旧床土層が重なる。この下層に古墳時代の遺物包含層である灰色シルト（9層）が存在し、この下層に第1遺構面が存在する。これより下に場所によっては数枚の間層を挟み、弥生時代の遺物包含層である、灰褐色砂質シルト（30層）及び暗茶褐灰色砂質シルトが存在し、この下層に第2遺構面が存在する。調査区の北半部は微高地に位置し、南半部は湿地状に南へ落ち込んでいる。

第1遺構面

第1遺構面は、北半部と南半部で様相が異なる、北側は微高地であり、南側へ行くのに従い、緩やかに下り、流路状の落ち込みが存在し、湿地状の様相を呈している。この埋土下層から古墳時代の遺構を検出した。この部分に関しては、北半部との関連から第1遺構面下層とした。全体として、溝3条、土坑5基、ピット41基を検出した。

S D101

調査区南半部北側で検出した幅9.0m前後、深さ0.35m前後の東西方向にのびる流路状の落ち込みである。埋土中に炭を多く含む。古墳時代中期後半から後期前半の須恵器、土師器が出土している。南側に隣接するS D102も同様の状況である。どちらも埋土の状況から、湿地状の状況を呈していたと考えられる。

ピット 北側の微高地上で検出したピットは、いずれも建物等を構成するものは確認されなかった。古墳時代中期後半から後期前半のものと考えられる須恵器、土師器が出土しているが、そのほとんどは、微細な小片である。S P 110からは滑石製の石製品が1点出土した。

第1遺構面 調査区南半部では、S D 101、102の下層からも遺構が確認された。S D 101の下層では

下層

土坑(S K 104)は長径0.5m、短径0.35m、検出面からの深さ0.07mの楕円形を呈する。古墳時代中期後半から後期前半のものと考えられる土師器の椀が出土した。

ピット群は東西、南北共にまとまりはもつものの、建物とするには方向、間隔が揃わない。埋土中に炭を多く含む点が特徴であり、付近の遺構面上にも炭が点在する。

出土遺物は古墳時代中期後半～後期前半のものと考えられる須恵器、土師器が出土しているが、特にS P 121が注目される。



fig.167 第2遺構面全景

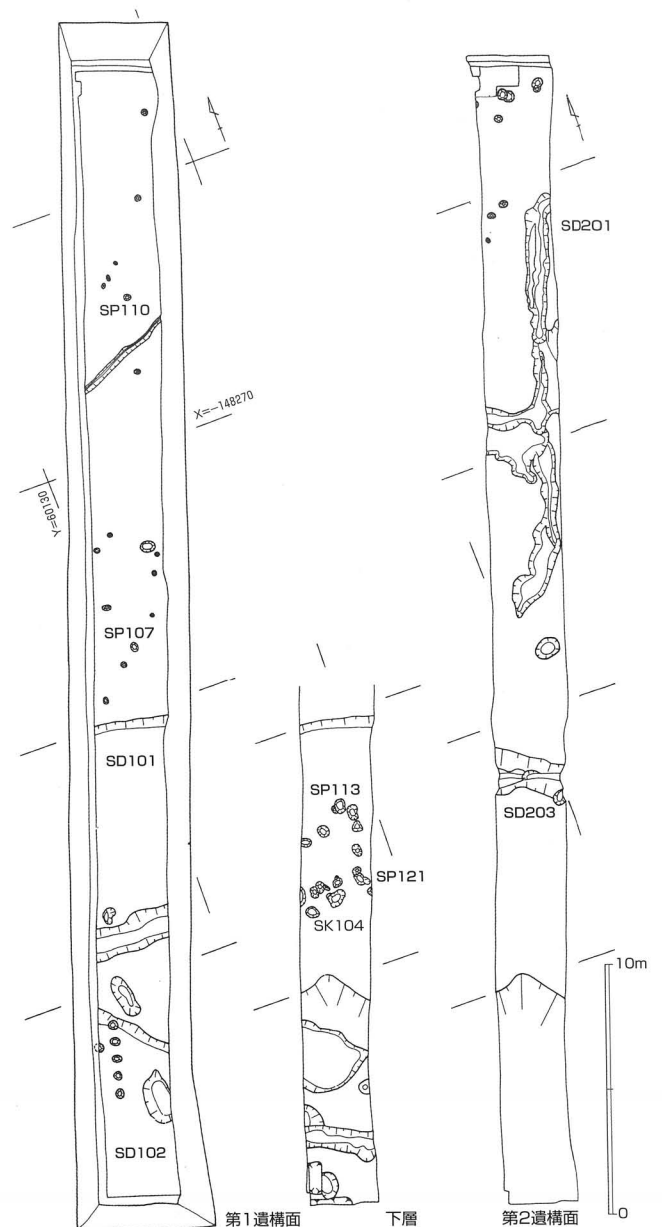


fig.168 遺構平面図

S P 121 調査区南半部中央東寄りで検出した長径0.62m、短径0.43m、検出面からの深さが0.28mのピットで、底面は中央部が一段下がる。須恵器坏蓋1点、土師器椀2点が出土したが、須恵器坏蓋と土師器椀1点は「入れ子」の状態が出土した。玉等の石製品は出土しなかったが、埋土中に炭を多く含む点や、遺物の出土状況から祭祀に関連するものと考えたい。出土した須恵器はTK23~47型式頃のものと考えられる。

第2遺構面 溝2条、土坑1基、ピット9基を検出した。

S D 201 調査区北半部で検出した幅1.0m前後、検出面からの深さ0.1~0.2mの北東、南西方向から北西、南東方向へそれぞれ続く溝である。中央部付近で完形の壺形土器1点、壺形土器の底部が出土した他、弥生土器片が出土した。出土遺物から弥生時代中期後半頃の時期が考えられる。

検出した部分が一部であり、調査区外へと続くため全体の状況が明らかではないが、壺形土器の出土状況から方形周溝墓である可能性が高い。

S D 203 調査区の南半部北端付近で検出した幅1.2~1.8m、検出面からの深さ0.65mの北西、南東方向の溝である。北側の肩で、地山面からやや浮いた状態で、壺形土器の底部など、弥生土器片がまとまって出土した。出土遺物はS D 201とほぼ同時期と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代と弥生時代の2面の遺構面を検出した。

第1遺構面からは古墳時代中期後半から後期にかけての遺構を確認した。出土遺物はTK208型式~TK10型式にかけてのものと考えられるが、TK23型式~TK47型式のものが多い様である。詳細な検討は整理作業の完了を待ちたい。

今回の調査地の南側に位置する、これまでの調査地においてもほぼ同時期の遺構、遺物が検出され、祭祀に伴うものも確認されている。平成10年度の調査では大量の土器と共に5,300点を越す滑石製品が出土した。今回検出されたS P 121では滑石製品は確認されず、祭祀形態のあり方が注目される。

第2遺構面では、方形周溝墓と考えられる溝(S D 201)を検出した。また、南半部で検出したS D 203は北側から投棄された状態で遺物が出土しており、S D 201との関係を考えてみると墓域との区画溝のような性格をもつとも考えられる。しかし、今回の調査で確認されたのは、一部分であり、不明な点も多く、疑問点も考えられる。

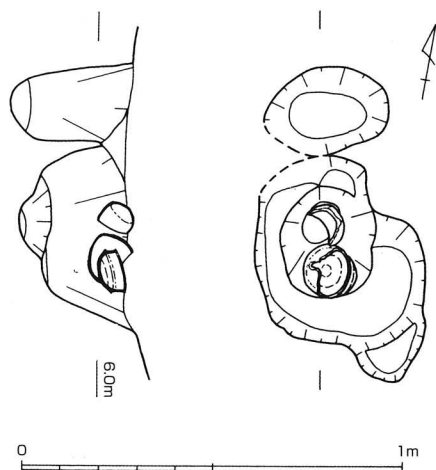


fig.169 S P 121平面・立面図

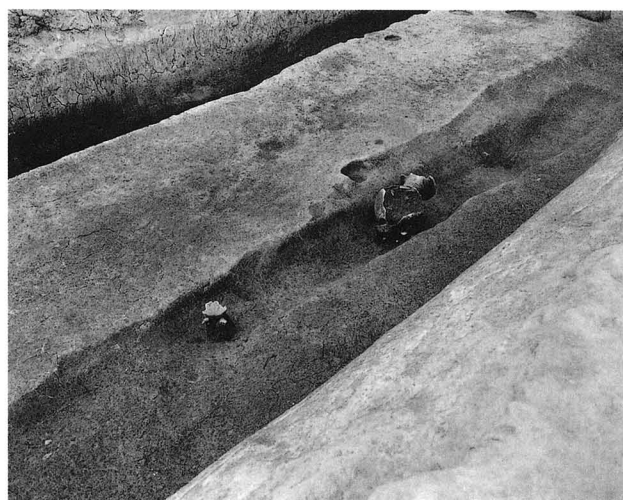


fig.170 S D 201

IV. 平成13年度の大規模試掘調査

概要

神戸市では、各種開発や造成工事に伴い、これに先立って埋蔵文化財の存否を確認する試掘調査を実施している。住宅建設に伴う小規模な試掘調査のほかに、広域に渡って大規模な地形の改変を伴う土地区画整理事業や土地改良事業などに伴う大規模試掘調査があり、ほぼ毎年広範な地域において実施してきている。これらの試掘調査によって、新たに遺跡の存在を確認し、周知の遺跡内においても、対象地域の遺構等の状況がより明確になるなど、遺跡の詳細な内容が把握できるようになってきている。

試掘調査は基本的に2m角の試掘坑を設定し、重機または人力により遺物包含層上面ないしは遺構面直上まで掘削し、その後、平面・断面の精査を実施している。また、必要に応じてトレンチ（試掘溝）を設定して確認している場合もある。

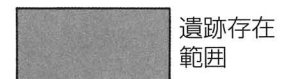
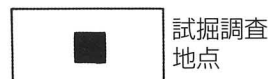
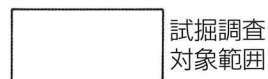
平成13年度に実施した大規模土地改変に伴う試掘調査は、土地改良事業に伴うものとして野瀬北地区、寺谷地区がある。

野瀬北地区は、美嚢川の支流である淡河川の上流域で蛇行して流下する屏風川の沿って広がる地区で、地形的に見ると、河岸段丘面と丘陵部斜面で構成される地域である。これまで埋蔵文化財の調査は実施されておらず、今回が初めて試掘調査を実施し、散在的に遺構・遺物包含層が確認された。

寺谷地区は、明石川の支流である櫛谷川の上流域に広がる地区で、地形的に見ると、河岸段丘面と丘陵部斜面で構成される地域である。これまでも試掘調査・発掘調査が実施されているが、今回の範囲については、遺構・遺物が確認されなかった。

大規模試掘調査一覧

事業名	調査主体	試掘坑数	面積	試掘調査結果
野瀬北地区 県営圃場整備事業	神戸市教育委員会	36	144	奈良時代後期～平安時代前期、平安時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物包含層
寺谷地区 圃場整備事業	神戸市教育委員会	9	36	遺構・遺物確認されず



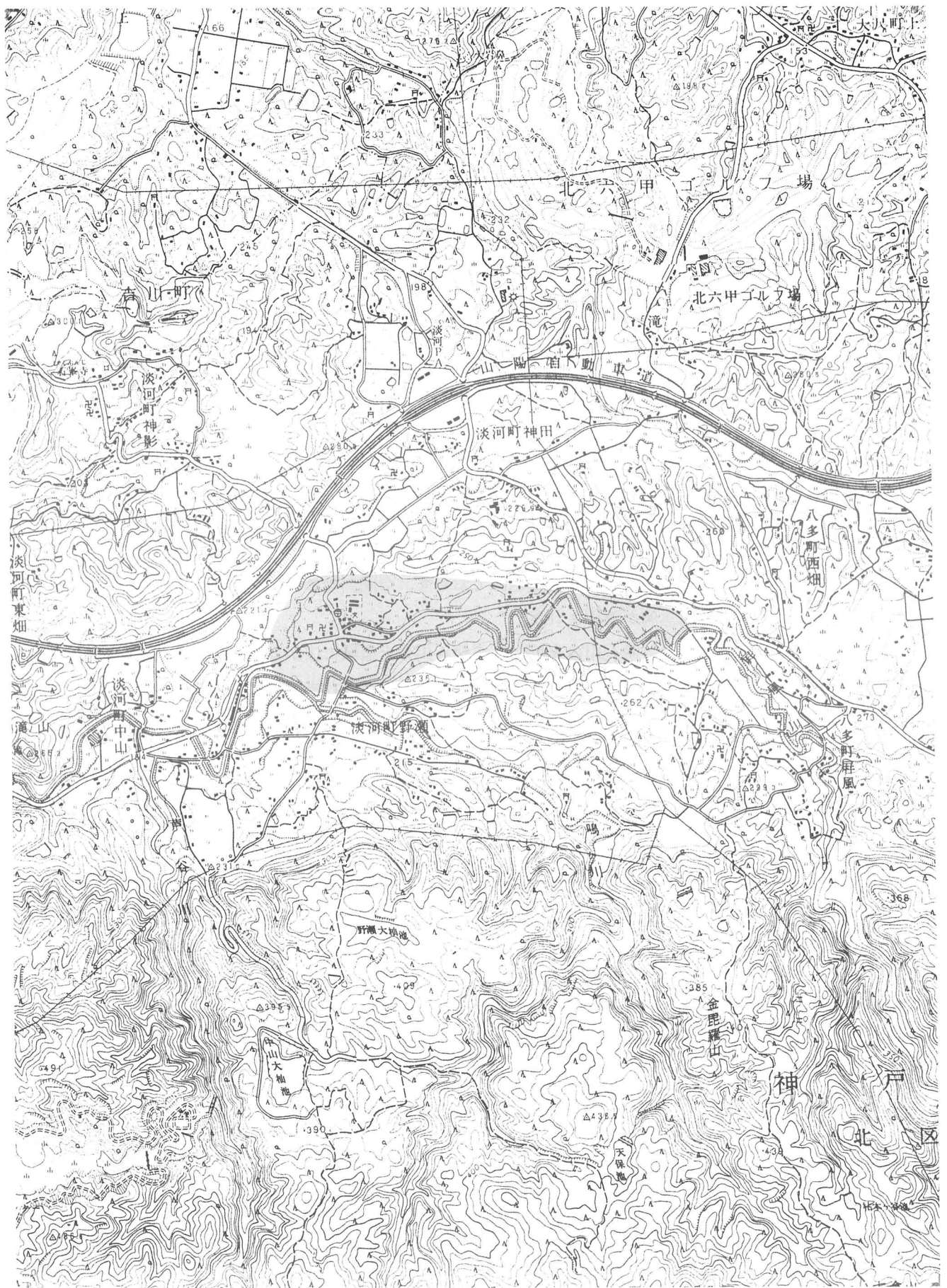


fig.171 野瀬北地区試掘地域全体図 1:25,000



fig.172 野瀬北地区試掘調査地点 1:10,000



fig.173 寺谷地区試掘地域全体図 1:25,000



fig.174 寺谷地区試掘調査地点 1:5,000